



Title	感情語の意味解釈における文化的背景と身体性の相互作用ーベトナム語のgiậnとthươngの分析を例に一
Author(s)	Doan, Ngoc Minh Tran
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105325
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2025 年度博士学位申請論文

感情語の意味解釈における文化的背景と
身体性の相互作用

—ベトナム語の **giận** と **thương** の分析を例に—

大阪大学大学院人文学研究科
言語文化学専攻
Doan Ngoc Minh Tran

謝辞

本稿の執筆および博士後期課程での研究を進めるにあたり、多くの皆様より温かいご指導とご支援を賜りました。ここに深く感謝申し上げます。

まず、指導教員の田村幸誠先生には、修士課程の頃より変わらずご指導賜り、心より御礼申し上げます。先生から通言語的に考える姿勢を学べたことは、本研究を進める大きな支えとなりました。また、常に示唆に富むご助言や発表練習の機会をいただき、研究内容の整理や伝え方について丁寧にご指導くださったことにも深く感謝いたします。

次に、副指導教員の大森文子先生には、心より感謝申し上げます。文脈の読み取り方や、語源を確認する際の辞書の調べ方について教わったことは、本稿の分析に大いに役立ちました。個別の面談では、人物の心情や文脈解釈の細かな点まで一緒に検討してくださり、温かいお言葉で励ましていただいたことにも感謝しております。

本論文の審査をご担当いただく中畠浩貴先生には、心より感謝申し上げます。レトリック研究会などの機会に頂いた示唆に富むコメントや、ご講義を通じて学んだ背景知識の重要性は、本稿の分析に大きく活かされております。

大阪大学名誉教授・関西外国語大学外国語学部の渡辺秀樹先生に、深く感謝いたします。毎月の英語記事の精読会では、レトリックや英語力だけでなく、文献に向き合う姿勢についても多くの学びを得ることができました。

大阪大学外国語学部の清水政明先生には、ベトナム語チュノムに関する資料をご提供いただき、感謝いたします。本論文第7章の考察において大変参考になりました。

日本語日本文化教育センターの松浦幸祐さんには、深く感謝しております。先輩としていつも発表練習を聞いてくださり、日本語のチェックや助言も丁寧にいただきました。

大学院の先輩方、同級生、後輩の皆さんに感謝申し上げます。特に張栩さん、山倉佐恵子さんには、多くの支えをいただき、ありがとうございました。

アンケート調査にご協力くださった皆様にも、心より感謝申し上げます。いただいた貴重なご回答のおかげで、本研究に必要なデータを得ることができました。

上記の皆様のほかにも、研究の中で多くの方々に助けていただきました。ここでお名前をすべて挙げることはできませんが、支えてくださった皆様に心より感謝いたします。

Cuối cùng, tôi xin gửi lời cảm ơn chân thành đến Bi, gia đình và những người bạn (nhất là Pin) đã luôn ở bên cạnh, tin tưởng và động viên tôi đừng bỏ cuộc.

要旨

本稿は、ベトナム語の感情語 *giận* と *thương* を対象とし、Langacker (1987, 2008) の意味論におけるドメイン概念と、Levinson (1996) の空間認知理論における相対枠を理論的枠組みとして用い、両語の意味構造の特徴を解明することを目的とする。

従来の感情研究 (Lakoff and Kövecses 1987, Kövecses 1991・2000; Wierzbicka 1986, 1992a, 1992b など) には、大きく二つの方向性が指摘されている。第一に、メタファー理論 (Lakoff and Kövecses) は英語を中心に普遍的モデルを構築し、生理的基盤を優先する傾向が強い。第二に、Wierzbicka の Natural Semantic Metalanguage (NSM) 理論は、簡約化された基本的意味素を用いて感情語の意味スクリプトを記述する枠組みであり、記述を簡潔に行うことができるとともに、当該語の特徴を明確化できるという利点をもつが、体系が閉じて抽象度が高く、語用的多様性を捉えにくいという問題が指摘されている。

特に、ベトナム語の感情語は対人関係・視点の取り方など、文脈依存性の高い要因が意味構造に深く影響する。本研究は、既存モデルを前提としつつ、複数の認知ドメインの相互作用と視点の共有可能性に着目することで、感情語の概念化をより多角的に記述するための観点を示すことを目指す。

本稿は、第1章から第8章までの全8章で構成される。第1章では研究の目的と全体構成を述べた上で、本研究が扱う4つの主要論点、すなわち(1) 感情語の意味解釈における文脈の重要性、(2) 対人関係の捉え方に基づく感情語の使用制約、(3) 関連概念の中心性に見られる言語間差、(4) 文化固有の共感観の特徴を簡潔に整理する。これらの論点は、英語中心の枠組みでは十分に扱われてこなかった問題であり、ベトナム語の感情語を分析する上で不可欠な視点である。

第2章では、心理学・文化心理学・認知言語学における先行研究を整理し、感情の概念化を生理的プロセスに基づいて説明する Lakoff and Kövecses (1987)、Kövecses (1991, 2000) のメタファー理論と、普遍的意味素によって感情の意味を抽象化する Wierzbicka (1986, 1992a, 1992b) の NSM 理論を取り上げる。これらの研究は英語の感情語モデルを精緻に描き出した一方で、対人関係を含む状況解釈が十分に考慮されていないこと、感情に伴う行動意図が一つの型へと単純化されやすいこと、モデルの前提が西洋文化の理解に偏りやすいこと、意味構造が抽象化されすぎることと言語ごとの感情の概念化の仕方の違いが見えにくくなることの4つの限界が指摘されている。ベトナム語の *giận* と *thương* は、関係性

や視点の選択などの要因によって使用や解釈が影響を受けるため、精緻に記述するには既存モデルを補完する視点が必要であることを示す。

第3章では、Langacker (1987、2008) のドメイン理論に基づき、感情をドメインマトリックスとして捉える枠組みを整理し、感情が単一の心理状態ではなく、「対人関係」「文化・社会的評価」「出来事の解釈」など複数の認知的背景が関与する多次元的概念であることを示す。また、Levinson (1996) の空間認知理論（相対枠）に基づき、話者がどの立場から状況を理解するか（自己志向・相手志向など）という視点の取り方が、感情の成立と解釈にいかに関与し得るかに着目する。本章では、以上の議論を踏まえ、後続章の分析の核となる「複数ドメイン」と「視点」という二軸の理論的枠組みを位置づける。

第4章から第7章は本稿の本論に当たる。第4章では、論点(1)である「感情語の意味解釈における文脈の重要性」に焦点を当て、自由記述調査・文完成課題・コーパスデータを通して、ベトナム語 *giận* と英語 *angry* の使用文脈を比較する。怒りに関する先行研究では、Lakoff & Kövecses (1987) を中心とするメタファー理論のもと、怒りが普遍的な身体反応にもとづく概念として捉えられ、英語を中心に多くの研究 (Matsuki 1995、Yu 1995 など) が内部圧力の上昇や爆発といった身体反応のプロセスに注目する傾向が見られる。一方で、怒りがどのような対人関係・状況のもとで成立し、誰に向けられやすいのかといった語用的側面は比較的十分に検討されていない。

本章では、この課題をふまえ、収集した文脈に基づいて *angry* と *giận* の語用的特徴を検討する。その結果、分析した文脈では、*angry* は望ましくない出来事の評価にもとづき幅広い対象に向けられやすいのに対し、*giận* は、親しい関係にある相手だからこそ生じる感情であり、相手の言動や期待の破れに敏感に反応して、身近な相手に向けられやすい傾向が確認された。さらに近接語句にも違いが見られ、*angry* では攻撃・復讐を示唆する語句が共起しやすく、*giận* では心配・関係修復といった関係志向の意味をもつ語句が共起する場合もあることが確認された。すなわち、両語はいずれも望ましくない出来事に対する感情であるものの、その状況の解釈仕方が異なる可能性が示唆される。

第5章では、論点(2)である「対人関係の捉え方に基づく感情語の使用制約」を扱い、英語 *angry* とベトナム語 *giận* の使用に見られる制約を比較する。行動意図に関する先行研究では、Wierzbicka による NSM 理論のもと、*angry* は「悪い行為を受ける→不快感を抱く→相手に対処行動をとりたくなる」という直線的な構造をもつ感情として記述されてきた (Wierzbicka 1992a)。しかし、このモデルでは、「怒り」を表すベトナム語 *giận* が、怒りの

後続反応であるにもかかわらず相手への配慮を示す行動と結びついて用いられるという、一見矛盾した現象を説明できない。

本章ではこの課題に対し、angry と giận の使用を対人関係の捉え方と結びつけて検討する。angry は出来事や被害の評価を起点とし「自分 vs 相手」という個人関係の枠組みで捉えられやすく、対立的な行動へ展開しやすいのに対し、giân は「大切な人なのに、なぜそんなことをしたのか」「どうして一人で抱え込んで、言ってくれなかったのか」「なぜ無理をしたのか」といった親密な関係のずれを起点として生じ、第4章で扱った関係性の捉え方がその意味構造に直接影響する。その結果、例えば、表面的には叱責であっても、その背後に相手への思いやりや保護的意図が含まれる場合が多い。こうした差異は、英語の angry が「個人対個人関係」を前提とし、ベトナム語の giận が「親密な関係」を前提とするという概念化の方向性の違いを反映している。

第6章では、論点(3)である「関連概念の中心性に見られる言語間差」を扱い、自由記述調査・文完成課題・コーパスデータを通して、英語 love とベトナム語 thương の使用文脈を比較する。「愛情」に関する先行研究では、Kövecses (1991 : 2000) を中心とするメタファー理論の枠組みにおいて、英語のモデルは liking (好ましさ) や affection (優しい思い) といった中心的関連概念を核とし、そこから caring (思いやり) や respect (尊敬) などの周辺的概念へ連続的に広がるネットワークとして捉えられてきた (Kövecses 1991 : 86-88 ; 2000 : 125)。しかし、こうした関連概念の構造が他言語にも同様に適用できるのかという点については、これまで十分に検討されてこなかった。

本章では、収集した文脈に基づき英語の love とベトナム語の thương における愛情が誰に向けられ、どの側面が中心化されるのかを比較する。英語では、相手の魅力・価値・好ましさといった肯定的属性が感情の根拠として前景化されやすいのに対し、ベトナム語では、困難や負担を抱える相手の弱さに寄り添うことが thương の成立基盤として示されやすい。また、この違いは使用範囲にも現れ、love が主として親しい相手に向けられるのに対し、thương は親しい相手に限らず、親密でない相手や不特定多数にも向けられうる。すなわち、両語はいずれも「相手を大切に思う感情」を表す点で共通するものの、中心となる関連概念と対象の捉え方には違いが見られる。

第7章では、論点(4)「文化固有の共感観の特徴」を扱い、ベトナム語 thương に見られる共感の核心的特徴を検討する。先行研究として取り上げた NSM 理論は普遍的意味素によって感情語を抽象化する枠組みであるため、文化固有の感情解釈を十分に捉えきれない

問題がある。特に、「相手に悪いことが起きた→自分も同様に悪く感じる」と表す NSM の枠組みでは、*thuong* に見られる「相手の痛みを自分の内側の傷として受け取る」という文化性を伴った共感の性質を十分に説明できない。さらに相手の喜びの背後にある痛ましさに反応して用いられる場面も NSM のモデルでは矛盾なく記述できないため、その限界が明確となる。

本章では、こうした課題に基づき、*thuong* の語源である「傷」に着目し、その意味が「相手の痛ましさを自分の内側に引き寄せて捉える共感」へと拡張してきた過程を整理した。さらに、Levinson (1996) の空間認知の理論を用いて、日本語の「心が痛む」と比較することで、*thuong* が観察者として外側から相手の状態を評価するのではなく、話者が相手の視点・位置に立ち、相手の感じている痛みを自身の感覚として共有するという視点共有型の共感として概念化される点を示す。

第 8 章では、本研究の成果として、複数ドメインと視点選択を統合する分析が、従来の英語中心モデルでは捉えきれなかったベトナム語の感情語の特徴を明確に描き出せることを示す。感情語の分析において、対人的文脈やその背後にある文化的概念など複数の側面を取り込む意義を示し、今後の課題についても言及する。本稿の議論が持ち得る意義としては、主に以下の二点が挙げられる。第一に、ベトナム語の *giận* や *thuong* の分析から、感情語は生理反応を超え、対人関係の捉え方や視点選択などの多面的な構造をもち、その多面性が文化的概念化を反映するため、単一モデルでは文化ごとの特性を十分にとらえることは難しい点、第二に、感情を複数のドメインが重なり合うドメインマトリックスとして概念化する立場をとることで、身体反応・対人関係・文化的価値観といった諸要素をそれぞれのドメインとして位置づけ、これらが意味形成にどのように関与するのかを一つのモデルに固定されることなく柔軟かつ精緻に記述できる。さらに各ドメインの特性を手がかりとして通言語的な比較にも応用できる点にある。

Abstract

This dissertation examines the Vietnamese emotion words *giận* and *thương* by employing Langacker's (1987, 2008) domain matrix and Levinson's (1996) Frames of Reference as its theoretical framework, with the aim of clarifying the characteristic features of their semantic structures.

Previous studies on emotion (Lakoff and Kövecses 1987; Kövecses 1991, 2000; Wierzbicka 1986, 1992a, 1992b, among others) have generally followed two major lines. The first is the metaphor-theoretical approach (Lakoff & Kövecses), which constructs universal models primarily on the basis of English and tends to give priority to physiological foundations. The second is Wierzbicka's Natural Semantic Metalanguage (NSM) theory, which offers the advantage of providing highly precise semantic descriptions, but whose closed system and high level of abstraction have been pointed out as limitations in accounting for pragmatic diversity.

Vietnamese emotion terms, however, are strongly influenced by context-dependent factors, such as interpersonal relationships and ways of taking a perspective. While building on existing models, this study aims to propose a more multifaceted account of emotion conceptualization by focusing on the interaction of multiple cognitive domains and the shareability of perspectives.

This dissertation consists of eight chapters (chapters one through eight). Chapter one outlines the research objectives and overall structure, and succinctly organizes four main issues addressed in this study: (1) the importance of context in interpreting emotion words; (2) usage constraints arising from ways of construing interpersonal relationships; (3) cross-linguistic differences in the centrality of related concepts; and (4) the characteristics of culture-specific conceptions of empathy. These issues have not been sufficiently addressed within English-centered frameworks, yet they are essential perspectives for analyzing Vietnamese emotion vocabulary.

Chapter two reviews previous studies in psychology, cultural psychology, and cognitive linguistics, focusing on the metaphor theory of Lakoff and Kövecses (1987; Kövecses 1991, 2000), which explains emotion conceptualization in terms of physiological processes, and Wierzbicka's NSM theory (1986, 1992a, 1992b), which uses universal semantic primes to explicate the cultural scripts underlying emotion words. While these approaches have produced detailed models of English emotion terms, four limitations have been noted: insufficient incorporation of situational and

interpersonal interpretations, a tendency to simplify the follow-up responses of emotions into a single action pattern, cultural bias toward Western conceptualizations, and a level of abstraction that obscures cross-linguistic differences. Because the Vietnamese *giận* and *thương* are shaped by factors such as relational construal and perspective choice, this chapter indicates the need for additional perspectives that complement existing models in order to explain their characteristics more adequately.

Chapter three outlines a semantic framework that adopts Langacker's (1987, 2008) notion of a domain matrix to characterize emotions, showing that they are not single psychological states but multidimensional concepts involving several cognitive backgrounds, such as interpersonal relations, cultural and social evaluations, and interpretations of events. Drawing on Levinson's (1996) theory of spatial cognition, the chapter also highlights how the interpretation of an emotional situation can vary depending on the relative frame of reference that the speaker adopts. Building on these discussions, the chapter positions multiple domains and perspective as the two theoretical axes that form the basis for the analyses in the subsequent chapters.

Chapter four examines Issue (1), the role of context in interpreting emotion words, by comparing the usage of *giận* in Vietnamese and *angry* in English. While earlier studies of anger have largely focused on universal physiological processes, the contextual and interpersonal conditions in which anger arises have received limited attention. The analysis shows that *angry* is often directed broadly toward various targets based on an evaluation of an undesirable event, whereas *giận* typically occurs within close relationships and reflects sensitivity to unmet expectations within those relationships. Differences in co-occurring expressions further indicate contrasting interpretations: *angry* often appears with words related to aggression or retaliation, whereas *giận* tends to co-occur with expressions linked to concern or the maintenance of relational harmony.

Chapter five examines Issue (2), the usage constraints shaped by interpersonal construal, by comparing how *angry* in English and *giận* in Vietnamese are used. NSM based accounts describe *angry* as a linear sequence in which a person experiences wrongdoing, feels something bad, and then wants to act against the offender, a model that cannot explain why *giận* is often accompanied by considerate or protective behaviors. The analysis shows that *angry* is typically understood within an oppositional frame of self versus other and is likely to lead to confrontational actions, whereas *giận* usually arises within close relationships and reflects sensitivity to problems that occur in those

relationships. As a result, expressions of *giận* may sound reproachful on the surface but often carry underlying concern. These contrasts indicate that angry presupposes an individual to individual relationship, whereas *giận* presupposes the maintenance of an intimate bond.

Chapter six examines Issue (3), cross linguistic differences in the centrality of related concepts, by comparing how *love* in English and *thương* in Vietnamese are used. Previous metaphor based accounts describe English *love* as centered on positive attributes of the target, such as liking and affection, from which related notions like caring and respect extend, but this structure has rarely been evaluated in other languages. The analysis shows that English *love* tends to foreground the target's appealing qualities, whereas *thương* is grounded in attending to the other person's vulnerability or hardship. As a result, *love* is generally directed toward close partners, while *thương* extends to less intimate individuals and even to broader or unspecified groups. These contrasts indicate that although both words express a feeling of wanting to protect another person, they differ in which related concepts are central and in how the target of emotion is construed.

Chapter seven examines Issue (4), the cultural specificity of empathy, by analyzing the core empathetic features expressed by the Vietnamese *thương*. Because NSM theory abstracts emotional meanings through universal semantic primes, it has difficulty capturing culturally grounded interpretations. In particular, the NSM script typically modeled as “because of this, someone feels something bad” or “if it happened to me, I would feel something bad” cannot adequately explain the type of empathy conveyed by *thương*, in which another person's pain is taken in as one's own inner wound. The model also struggles to account for cases in which *thương* is used in response to the painful circumstances that lie beneath someone's apparent joy. To address these issues, the chapter traces how the original meaning of *thương*, “傷 (wound) ,” developed into an empathetic stance that draws another's suffering into one's own experiential space. Using Levinson's (1996) theory of spatial cognition and a comparison with the Japanese expression *kokoro ga itamu*, the chapter shows that *thương* does not involve evaluating another person's condition from the outside as an observer. Instead, it is conceptualized as a perspective-sharing empathy in which the speaker adopts the other person's position and experiences that person's pain as their own. The concluding remark is given in chapter eight.

目次

要旨	ii
Abstract.....	vi
第 1 章 序論.....	1
1.2 本論文の構成	1
1.3 本稿で検討する 4 つの論点	2
1.3.1 ベトナム語の <i>giận</i> と英語の <i>angry</i> における関係前提の差異（第 4 章）	2
1.3.2 対人関係を前提とする <i>giận</i> に見られる「怒りと心配の併存」（第 5 章）	3
1.3.3 英語 <i>love</i> とベトナム語の <i>thương</i> における中心となる関連概念（第 6 章）	5
1.3.4 ベトナム語の <i>thương</i> に見られる「共感」の核心的特徴（第 7 章）	7
第 2 章 感情に関する先行研究	10
2.1 はじめに	10
2.2 感情に対する生物学的アプローチ	10
2.2.1 進化的適応に根ざした感情論（Darwin 1872）	11
2.2.2 基本感情説（Ekman 1969、2003、2011）	12
2.3 文化・社会心理学的なアプローチ	14
2.3.2 強制選択式の実験の限界（Russell 1994; Sato et al. 2019）	15
2.3.3 分析対象となる感情範囲の限定性（Sabini and Silver 2005）	15
2.3.4 文脈・文化的多様性への過小評価	16
2.4 言語学的アプローチ	19
2.4.1 イファルク語 <i>song</i> と <i>fago</i> の感情の記述（Lutz 1982、1988 ; Lutz&White 1986） ..	20
2.4.2 NSM 理論による普遍的意味素を用いた感情語の記述（Wierzbicka 1986、1992a、 1992b）	22
2.4.3 身体的経験を基盤としたメタファー理論（Lakoff & Kövecses 1987 ; Kövecses 1991、2000）	28
2.5 先行研究の問題点	35
2.5.1 「怒り」に関する先行研究の問題点	35
2.5.2 「愛情」に関する先行研究の問題点	41

2.6 まとめ	47
第3章 理論的枠組み	48
3.1 はじめに	48
3.2 概念化	48
3.3 ドメイン	50
3.3.1 基本ドメインと非基本ドメイン	51
3.3.2 ドメインマトリックス	52
3.3.3 中心性	54
3.4 視点の選択	55
(I) 絶対的枠 (Absolute Frame of Reference)	56
(II) 内在的枠 (Intrinsic Frame of Reference)	56
(III) 相対的枠 (Relative Frame of Reference)	57
3.5 感情語の意味構造をドメインマトリックスとして捉える	59
3.6 まとめ	61
第4章 angry と giận の使用文脈の比較	62
4.1 はじめに	62
4.2 調査 (i) : angry と giận の感情経験の自由記述	63
4.3 調査 (ii) : angry (形容詞) と giận (動詞) を用いた例文作成	67
4.3.1 angry の原因と反応	70
4.3.2 giận の原因と反応	71
4.4 調査 (iii) : コーパスの用例から angry と giận の文脈の考察	73
4.4.1 英語の angry の対象と共起する語句の傾向	74
4.4.2 ベトナム語の giận の対象と共起する語句の傾向	82
4.5 まとめ	91
第5章 対人関係の捉え方に基づく angry と giận の使用制約	92
5.1 はじめに	92
5.2 angry と giận に関わる対人関係と怒りの発生プロセスの捉え方	93
5.2.1 giận と angry を裏付ける対人関係の差異	93

5.2.2 giận と angry の感情発生プロセスの差異	94
5.3 親密さによる対象の制約	96
5.4 angry と giận における怒りの焦点と含意	99
5.4.1 angry と giận における怒りの出発点の違い	99
5.4.2 怒りの焦点と含意の変化	100
5.5 angry と giận における怒りの後続行動の特徴	103
5.5.1 angry と giận における後続行動の方向性の違い	103
5.5.2 同一文脈における angry の制約と giận の許容	104
5.6 まとめ	106
第 6 章 love と thương が向けられる対象とその中心化される側面	108
6.1 はじめに	108
6.2 調査 (i) : love と thương の感情経験の自由記述	109
6.3 調査(ii) : love (動詞) と thương (動詞) を用いた例文作成	115
6.3.1 love の作例の考察	119
6.3.2 thương の作例の考察	121
6.4 調査 (iii) : コーパスの用例から love と thương の考察	123
6.4.1 英語の love の対象と love を喚起する対象の性質	124
6.4.2 ベトナム語の thương の対象と thương を喚起する対象の性質	128
6.5 英語の love とベトナム語の thương の関連概念の中心性の差異	132
6.5.1 既存の「愛情」のモデルの再検討 (Kövecses 1991、2000)	133
6.5.2 英語の love とベトナム語の thương における中心ドメインの非対称性	134
6.6 まとめ	136
第 7 章 空間認知の枠組みから見た thương の「視点共感」の特徴	137
7.1 はじめに	137
7.2 ベトナム語 thương の語源と意味の広がり	137
7.2.1 漢字表記を付したベトナム語辞典における記述	138
7.2.2 漢越辞典における記述	140
7.2.3 現代語辞典における意味の扱い	140
7.3 日本語の「心が痛む」との比較	141

7.3.1 現代ベトナム語における thương の用法	142
7.3.2 日本語の「心が痛む」との相違点	144
7.4 相対的枠 (Levinson 1996) を用いた thương の分析	145
7.4.1 「相対的枠」の理論的背景の再確認 (Levinson 1996)	146
7.4.2 相対的枠を用いた thương の分析	147
7.5 まとめ	151
第 8 章 結語	152
参考文献一覧	156

第 1 章

序論

1.1 本研究の目的

本研究は、ベトナム語の *giận* (怒る) と *thương* (心配する・愛する) の意味的特徴を明らかにすることを目的とし、感情語の解釈に文化的背景がどのように関わるのかを考察するものである。

そのために、自由記述調査・例文作成調査・コーパス資料を用い、英語の *angry* と *love* を比較対象として取り上げる。これによって、*giận* と *thương* が現代ベトナム語でどのような文脈で使われ、どのような語用的特徴を持つのかを考察する。さらに、両言語の比較を通して、感情語の意味構造に見られる文化的な違いを検討する。

また、本研究では、理論的枠組みとして、Langacker (1987, 2008) の「ドメイン」理論と、Levinson (1996) の「認知的視点」の考え方をを用いる。ドメインの観点からは、感情語が複数のドメイン (ドメインマトリックス) によって概念化され、各ドメインの内容やその中心性が、その感情語の特徴をどのように形づくるのかを明らかにする。さらに、視点の観点から、話者がどのような立場や見え方で状況を捉えるときに、その感情が成立するのかを検討する。

1.2 本論文の構成

本論文は、本章を含む全 8 章で構成される。

第 1 章では、本研究の背景と目的を述べ、本稿で検討する主要な論点を提示する。

第 2 章では、生物学・文化心理学・言語学における感情研究を概観し、英語中心の枠組みでは対人関係などの文脈的要素を十分に捉えられない点を指摘する。

第 3 章では、分析の基盤となる Langacker (1987, 2008) のドメインと Levinson (1996) の相対枠の概念を導入し、本研究における役割を示す。

第 4 章では、自由記述調査・文完成課題・コーパス分析を用いて、*giận* と *angry* の使用実態を明らかにし、*giận* が「関係のずれ」、*angry* が「出来事や被害」に焦点を置くという語用的差異を示す。

第 5 章では、第 4 章の結果を踏まえ、これらの差異が各語の使用条件にどのように反映されるかを整理する。

第6章では、love と thương の使用文脈を比較することで、両語がどのような表現・対象と結びつくかを示す。両語はいずれも相手を大切に思う感情を表すが、love は相手の魅力・価値への賞賛を重要な関連概念とし、thương は相手の弱さや困難への共感を中心に据える点で異なる。

第7章では、thương の語源と意味拡張を整理し、相手の痛ましさを自分のものとして受け止める共感として概念化される点を示す。また、日本語の「心が痛む」との比較から、視点の概念を用いて、この共感が話者の相手側の視点の共有によって成立することを明らかにする。

第8章では、本研究の結論と今後の課題を述べる。

1.3 本稿で検討する4つの論点

本節では、第4章から第7章で展開する議論の中心となる論点を整理する。

1.3.1 ベトナム語の giận と英語の angry における関係前提の差異（第4章）

Lakoff and Kövecses (1987) に代表されるメタファー理論では、怒りは普遍的な身体的反応にもとづく概念として捉えられ、英語を中心とする多くの言語 (Matsuki 1995、Yu 1995 など) で「身体反応の変化」や「攻撃性の表出」といったプロセスが注目されてきた。

しかし、怒りがどのような人間関係や社会的距離の中で成立し、どのような対象に向けられるのかといった語用的側面は、必ずしも十分に扱われてこなかった。

英越辞書では一般に、英語の angry はベトナム語の giận に相当する語として記述されている (Từ Điển Anh Việt [Vietnamese-English Dictionary]、p.53) ものの、実際の使用を見ると、英語の angry とベトナム語の giận は、対人関係における使われ方に明確な差異を示す。

たとえば、英語の angry は(1a)のように親しい関係にある場合でも、(1b)のそうでない場合 (会社のライバル) でも、関係性にかかわらず幅広い対象に用いることができる。

(1) a.英語 : She was angry with her close friend for criticizing her behind her back.

b.英語 : She was angry with her rival in the company who criticized her behind her back.

一方、ベトナム語では *giận* は主に「親しい相手」への怒りを表すため、(2a)のような親友関係には自然に用いられる。しかし、(2b)のように親しくないライバルには *giận* は不自然で、代わりに(2c)の *tức giận* (「詰まる」+*giận*) の迂言表現が選ばれる。

(2) ベトナム語：

a. Cô ấy giận người bạn thân đã chỉ trích mình sau lưng.

彼女 親友 批判した 自分 背後

(親友に陰口を言われて *giận* を感じる。)

b. (??) Cô ấy giận người đối thủ trong công ty đã chỉ trích mình sau lưng.

彼女 ライバル 会社の中 批判した 自分 背後

(会社のライバルに陰口を言われて *giận* を感じる。)

c. Cô ấy tức giận với người đối thủ trong công ty đã chỉ trích mình sau lưng.

彼女 詰まる に対して ライバル 会社の中 批判した 自分 背後

(会社のライバルに陰口を言われて *tức giận* を感じる。)

このように、怒りの概念化は、身体的反応をどのように捉えるかという問題だけではなく、その感情がどのような関係性・文脈で生じるのかが意味構造を形づくる重要な要素となる。

第4章では、*giận* と *angry* の使用文脈を考察する。具体的に、自由記述調査・文完成課題・コーパス分析を通して、母語話者がこれらの感情語をどのように用い、どのような表現・対象と結びついて現れるのかを示す。また、*giận* が親しい関係のずれに基づくのに対し、*angry* は出来事や自己への被害に焦点を置くという語用的差異を明らかにし、両語の関係性の側面の違いを示す。

1.3.2 対人関係を前提とする *giận* に見られる「怒りと心配の併存」(第5章)

Wierzbicka による NSM (Natural Semantic Metalanguage) 理論は、文化的概念の意味を普遍的な意味素の組み合わせによって一つのスクリプトとして記述しようとする枠組みである。NSM は *bad*、*good*、*think*、*want* といった極めて簡約化された普遍の意味素を用いて文化的概念を記述している (Wierzbicka 2001 : 11)。

たとえば、英語 *angry* のスクリプト一部は、次のように示されている。

(3) (a) this person (Y) did something bad

(b) I don't want this

(c) I would want to do something bad to this person (Wierzbicka 1992a : 569)

このモデルによれば、angry は「悪い行為を受ける→悪い気持ちになる→何らかの対処行動をとりたくなる」という構造をもつ感情として理解できる。

この点は、(4a)の angry と(4b)の giận に見られる後続反応にも対応している。つまり、裏切られるという原因が声を荒らげるという行動を引き起こすのである。

(4) a.英語 : She felt angry with the close friend who betrayed her, so she raised her voice.

b.ベトナム語:

Cô ấy giận người bạn thân đã phản bội mình, nên cô ấy đã lớn tiếng.

彼女 親友 裏切った 自分 だから 彼女 大声を出した

しかし、angry のスクリプトに見られるような「悪い行為を受ける→対処行動をとりたくなる」という直線的モデルでは、文脈によって対人的意図が異なる場合、特に怒りと心配が同時に立ち上がる場合を十分に説明できない。

たとえば、(5)では、叱るという行動は怒りの表出のように見えるものの、その根底にある対人的意図は(4)とは異なって、実際に「相手を心配する」という保護的な意図が含まれており、このような対人的意図の違いは Wierzbicka のモデルでは捉えにくい。

(5) 『幼い弟が誤って殺虫剤で入浴してしまったことに姉のへオは「殺虫剤の風呂に入るなんて馬鹿よ。あいつ、シャンプーだと思ったのね」と叱りながら、同時に心配も抱いている。その後、弟にお粥を食べさせ、抱きしめて寝かせる』¹

“...chị Heo cần nhần, nhìn nó vừa giận vừa thương.”

姉 へオ 叱る 見る あいつ ながら ながら 心配する

(へオは叱りながら、弟を見ると、怒りと共に「弟を心配する」という感情が湧いた。)

¹この例文は VIETLEX コーパスから引用したものである。

仮に、NSM のモデルに忠実に沿って記述しようとする、

(6) I would want to do something bad to this person (叱るに対応)

I would want to do something good to this person (保護・思いやりに対応)

のように、相反する要素を並列させる必要が生じる。

しかし、このような表象では、感情の成立に関わる「関係性」の要因が組み込まれておらず、文脈に応じて後続行動の性質が変化する現象を十分に説明できない。すなわち、NSM の単一的かつ静的なモデルでは、関係性に依存して意味が変化する感情語の使用制約をとらえることが難しい。

第 5 章では、第 4 章で示された差異が各語の意味構造にどのように反映され、それが具体的な使用可否の条件としてどのように現れるのかを検討する。**angry** は被害の評価を起点として「自分 vs 相手」という対立的な関係枠で生じやすいのに対し、**giân** は「なぜ言ってくれなかったのか」「なぜ無理をしたのか」といった親密な関係のずれに反応し、相手への配慮を含む形で成立し得る。この関係性の前提の違いが後続行動の方向性にも影響し、思いやりの行動が続く文脈では **giân** は用いられる一方、**angry** では不自然になるなど、感情語ごとに使用可能な文脈が分かれて現れる。

1.3.3 英語 love とベトナム語の *thương* における中心となる関連概念 (第 6 章)

Kövecses (1991) は、英語の「愛情」の概念化をメタファー理論の立場から分析し、最も典型的なモデルとしてロマンチック愛を提示している (p.78)。

また、このモデルは、相手に向けられる諸概念が、中心的なものから周辺的なものへと連続的に配置される概念体系として理解できる。たとえば **liking** (好ましさ)、**sexual desire** (性的欲求)、**intimacy** (親密さ)、**longing** (切望)、**affection** (優しい思い)、**caring** (思いやり)、**respect** (尊敬)、**friendship** (友情) などの関連概念は、**love** を構成する中核的な関連概念と、状況に応じて付随する周辺的な関連概念とに区別されるとされる (Kövecses 1991 : 86–88 ; 2000 : 125)。その中に **liking** や **affection** が特に中心的な役割を果たす中核的関連概念として位置づけられ、その中間に **caring** のような関連概念が置かれると述べられている。一方で、**respect** や **friendship** のような概念は、より周辺的な関連概念として扱われる (Kövecses 2000 : 125)。

しかし、こうした関連概念のネットワークが他言語でも同様であるかどうかは明らかではない。

例えば、越英辞書では一般に、ベトナム語の *thương* は英語の *love* に相当する語として記述されている（*Từ điển Việt-Anh* 『ベトナム語英語辞典』、p.721）

(7)に見られるように、両語がいずれも対人的な感情であり、そうした感情があるからこそ「相手を大切にしたい」という思いやり（*caring*）が生じる点が確認できる。

(7) a.英語：I love you. There's nothing I want to protect more than you.²

b.ベトナム語：Anh thương em. Không có gì anh muốn bảo vệ hơn chính em.
私 あなた ない もの 私 守りたい より あなた

しかし、このような思いやりの関連概念が共通していても、そのネットワークにおいて他の概念が中心となる度合いは両語で同一ではない。

実際、相手の特徴を根拠に感情を述べる場合、その特徴がどの関連概念として解釈され、どこに焦点が置かれるのかは両語で異なる。

まず、例(8)では、相手について挙げられている特徴そのものが異なっている。(8a)は家族のために尽くしてきた「献身の行為」の特徴を示し、(8b)は「美しさ」や「勇気」といった相手の魅力・価値に関わる特徴を示している。(8b)に示される特徴は、Kövecses が英語のモデルで中心的な関連概念として挙げる *liking* に相当する。英語ではいずれの場合にも *love* が自然に用いられる。

(8) a.英語：I love you for everything you've made for our family.

b.英語：I love you for your beauty and your courage.³

しかし、ベトナム語ではこの二つの特徴に対して *thương* が必ずしも両方に対応できるわけではない。

²この例文は COCA コーパスから引用したものである。

³この例文は COCA コーパスから引用したものである。

例えば、(9a)の場合では、「献身の行為」を理由とする場合には、*thương* が自然に用いられるが、(9b)のように魅力・価値を理由とする場合に *thương* を使うのは不自然である。この場合、(9c)に示したように、*yêu* (愛する) を用いる方が適切である。

(9) a. ベトナム語 : Anh thương em vì những gì em đã làm cho gia đình mình.

私 君 ので 全部 君 した ため 私たちの家族

b. ベトナム語 : (??) Anh thương em vì vẻ đẹp và lòng dũng cảm của em.

私 君 ので 美しさ と 勇気 の 君

c. ベトナム語 : Anh yêu em vì vẻ đẹp và lòng dũng cảm của em.

私 君 ので 美しさ と 勇気 の 君

つまり、Kövecses が指摘する英語のモデルにおいて中心的な関連概念とされる、(8b)に見られる「好ましさ」(liking) は、ベトナム語の *thương* においては必ずしも中心的な概念とはいえない。同じ「愛している」という表現を用いる場合でも、その背後で中核となる関連概念がどれであるかは言語によって異なる。この違いは、文が伝える意味や受け手の感じ方にも影響を及ぼす。

第 6 章では、第 4 章と同様の調査方法を用いて、英語の *love* とベトナム語の *thương* の使用文脈を比較し、両語がどのような対象・表現と結びつくのかを示す。いずれも相手を大切に思い守ろうとする感情を表す点では共通しているものの、その感情が向けられる対象の捉え方や、それを支える中心的関連概念は異なる。*love* は相手の魅力・価値に基づく好ましさを中心に据えるのに対し、*thương* は相手の弱さや困難に寄り添う共感を中心的特徴とする。

1.3.4 ベトナム語の *thương* に見られる「共感」の核心的特徴 (第 7 章)

1.3.2 節で述べたように、Wierzbicka による NSM 理論は、普遍的意味素による「簡約的言い換え」によって感情語の意味構造を記述しようとする枠組みである。感情に伴う行動意図の違いが十分に区別できないという点に加えて、用いられる語彙が極めて限定されているため、その表現の核心となる文化的意味を十分に捉えられないという問題がある。

例えば、Wierzbicka (1992b : 145) は英語の *compassion* を次のように記述している。

(10) (a) something bad happened to Y

(b) because of this, Y feels something bad

(c) if it happened to me, I would feel something bad

しかし、ベトナム語の *thương* は、本来「傷」を語源にもち、相手の痛みを自分の身体感覚として受け止めるという共感の意味合いをもつ（『大南國音字彙』（Đại Nam Quốc Âm Tự Vị, 1895 : 429）。例(11)では、母親は息子の精神的な痛みを「自分の内側の傷」として感じ取っており、外側から状況を観察するのではなく、相手の痛ましさを自分に引き寄せて捉える点に *thương* の特質が表れている。

(11) 【30歳の息子が投資詐欺で全財産を失い、生きる目的を見失ってから、毎日を遊んで過ごしている。母親として息子が心配だ。】

Tôi cảm-thấy thương thằng con trai của mình.

私 感じる-見える 傷 息子 の 自分

字句通りの逐語訳：私はその息子の傷を感じて見える。

ニュアンスを含めた訳：私は息子の心の傷を感じ、自分の傷のように受け止める。

しかし、これを NSM のモデルで表すと、(12)の英語の *compassion* の形式になり、*thương* の核心である「相手の傷を共有する」という共感の特徴が十分に表現されない。

(12) (a) Y feels something bad

(b) if it happened to me, I would feel something bad

さらに、例(13)のように、相手が良い行動をして喜んでいる場面でも *thương* は用いられる。少女は貯金を寄付し、嬉しそうにしているにもかかわらず、話者はその背景の「痛ましさ」を感じ取り、*thương* によって共感を示している。

- (13) 【私たちが募金を募っていると、小学４年生の少女が貯金を全て持ってきて被災地の人々に寄付した。少女はお金を手渡す際、「少しでも困っている人たちの力になれば」と嬉しそうにしていた。私たちは少女が全てのお金を差し出したことが気にかかると同時に、その優しさに感動した。】

Chúng tôi cảm-thấy thương tâm⁴ lòng của cô bé.

私たち 感じる-見える 傷 類別詞 内臓 の 彼女

字句通りの逐語訳：私たちはその子の内臓の傷を感じて見える。

ニュアンスを含めた訳：私たちはその子の思いやりの心の傷を感じ、自分の傷のように受け止める。

この場面では、少女には「悪いこと」は起きておらず、むしろ良い行動をして喜んでい
る。それにもかかわらず、話者はその行為に潜む「痛ましさ」を感じ取り、thương を
用いて共感を表している。ところが、この状況を NSM のモデルで記述しようとする

- (14) (a)Y did something good

(b)something bad happened to Y

のように、「良いことをした」直後に「悪いことが起きた」と仮定せざるをえず、文脈と根
本的に矛盾する。つまり、この場面で thương が示す共感の本質は、NSM の抽象的枠組み
では十分に説明できない。

このように、thương が示す共感の特徴は、NSM の抽象的スクリプトでは十分に捉え
きれず、文化固有の共感概念としての thương の意味構造を説明するには、別の理論的
枠組みが必要となる。

第 7 章では、thương の語源とその意味の拡張を確認し、日本語の「心が痛む」との比
較を通して、thương が「傷」を語源とし、相手の痛ましさを自分のものとして捉える
共感として概念化される点を整理する。また、空間認知理論の相対枠 (Levinson 1996)
を援用して、thương の共感が話者の相手側の視点に基づいて成立することを示す。

⁴tâm (類別詞)：薄くて長い平たいものを表す名詞につける (Ngo 2014 : 188)

第2章

感情に関する先行研究

2.1 はじめに

本章では、感情に関する先行研究を学際的観点から整理する。本研究は言語表現を主な分析対象とするが、分析の前提として、感情そのものについての理論的・実証的知見を各分野のアプローチから概観しておく必要がある。

本章の構成は次の通りである。2.2 節では、心理学および人類学における感情研究の代表的アプローチを取り上げ、感情の生理的普遍性・進化的基盤や、文化・社会的文脈における経験という二つの視点を整理する。2.3 節では、社会心理学的立場から、実験手法の問題や文化的多様性、また対人的感情をめぐる議論など、基本感情理論への主な批判点とその論点をまとめる。2.4 節では、感情語や感情表現を中心とする言語学的アプローチを紹介し、フィールドワークによる記述や意味分析、比喩理論などを通して、感情概念の意味構造や文化的多様性を検討する。最後に 2.5 節で、本研究が採用する理論的立場や分析枠組みを明確にする。2.6 節はまとめである。

2.2 感情に対する生物学的アプローチ

本節では、感情研究の基盤的アプローチ、すなわち生物学的アプローチについて詳細に検討する。感情という現象をめぐっては、古くから「生得的かつ普遍的な生理反応」として理解する立場と、「文化的・社会的文脈の中で構築される経験」として捉える立場が対立・補完しながら発展してきた。

心理学領域では、Darwin や Ekman らが提唱した「基本感情説」に代表されるように、感情を生物学的・進化的基盤にもとづく普遍現象として捉え、その生理的反応や非言語的表出（表情、身体動作など）の共通性に着目した研究が主流となった。一方、人類学や社会文化心理学の領域では、感情が社会的相互作用や文化的価値観と不可分である点に注目し、感情経験や表現の多様性を明らかにする実証的研究が蓄積されている。

本節ではまず、進化的適応に根ざした感情理論や生理的普遍性を主張する立場を取り上げ（2.2.1）、続いて文化や社会的実践の中で感情がいかに関築されるかを論じる視点を紹介する（2.2.2）。こうした整理を通して、感情の本質やその経験・表現の多様性について、両アプローチの強みと限界を明らかにしていく。

2.2.1 進化的適応に根ざした感情論 (Darwin 1872)

Darwin (1872) は、感情の非言語的表出（顔の表情、身体的動作、生理的反応など）が人間を含む動物種に普遍的であり、進化的適応に根ざした現象であることを初めて体系的に示した。彼は『人および動物の表情について』（The expression of emotions in man and animals）において、怒りや恐れ、喜びといった感情が、人間のみならず多くの動物に共通する顔の表情として現れることを観察し、こうした特徴が人類に共通する進化的基盤に由来すると論じている。また、彼は感情をそれぞれ独立した感情カテゴリーとして捉え、それぞれに特有の身体的・表情的反応があるとした。

さらに Darwin は、感情の非言語的表出が進化の過程で主に二つの機能を担うようになったと考えた。第一に、繰り返し生じる環境刺激に対して生物が迅速かつ適応的に反応できるよう準備する機能、第二に、感情表現を通じて他者に重要な社会的情報を伝達する機能である (Shariff et al. 2011 : 395)。

例えば、怒りという感情は、生理的・行動的両面から詳細に記述されている。Darwin は怒りの状態において、心拍の増加、顔面の紅潮、目の輝き、そして呼吸の促進などの身体的変化が生じると述べており、これはまさに攻撃または防御に備えて身体を即座に準備するという適応的機能（第一の機能）を示している。また、怒りを感じた人物が無意識に胸を張り、頭を高く持ち上げ、拳を握りしめ、敵意を示す姿勢を取ることに ついても、Darwin は観察しており、これらの行動は相手に敵意や威嚇の意思を非言語的に伝達する社会的機能（第二の機能）を果たすと考えられる (Darwin 1872 : 256-257)⁵。このように、Darwin は怒りの表出を通じて、感情が生存と社会的相互作用の双方において進化的に重要な役割を果たしていることを明確に示した。このような進化論的アプローチや非言語的表現の普遍性に関する洞察は、後の Ekman らによる心理学的普遍性の研究にも大きな影響を与えている。

⁵“the action of the heart is a little increased, the colour heightened, and the eyes become bright...”.

“an indignant man unconsciously throws himself into an attitude ready for attacking or striking his enemy, whom he will perhaps scan from head to foot in defiance”. (Darwin 1872 : 256-257)

2.2.2 基本感情説 (Ekman 1969、2003、2011)

この Darwin 的視点は、20 世紀後半に Ekman や Izard らによって実証的に発展された。1960 年代から 1970 年代にかけて、彼らは異文化間における感情認識の実験を行い、感情表現の普遍性を検証した。

例えば、Ekman ら (1969) は、識字文化 (アメリカ、ブラジル、日本など) および非識字文化 (ニューギニア) の被験者を対象に、6 種類の基本感情 (喜び・怒り・悲しみ・恐怖・嫌悪・驚き) を表す顔写真を提示し、それぞれがどの感情を表しているかを判断させた。その結果、識字文化に属するすべての群で、被験者は偶然よりも有意に高い確率で正しい感情語を選択したことが確認された。また、非識字文化の被験者においても、偶然を上回る正答率が得られた点は注目に値する。これらの結果は、感情表出の顔面的特徴に文化を超えた普遍的要素が存在することを示している (p.87)。このように、Ekman らの研究は、顔の筋肉の動きと基本的感情との結びつきが文化を越えて普遍的であることを示唆している⁶。

実際、Ekman (2003) は感情の本質について、「自分の進化的・個人的な経験に基づいて『自分にとって重要な何かが起こっている』と無意識に判断したときに生じる反応」と定義している。その際、体内では生理的な変化が生じ、感情に関わる行動が引き起こされる (p.13)。

Ekman (2011) は、怒り、恐れ、驚き、悲しみ、嫌悪、軽蔑、喜びの 7 つの基本感情が文化や言語を超えて共通するとし、これらを 13 の特徴で定義している (p.365)。たとえば、世界共通の表情や生理的反応、無意識的な状況評価、短時間で現れる性質などがある。また、主観的体験や特定の記憶・思考との結びつきも含まれる。Ekman の理論は、感情を非言語的かつ生物学的な現象として捉える点に特徴がある。

また、この基本感情のシナリオに基づき、Ekman (2011 : 365) は各感情についても具体的な説明を行っている。たとえば、「怒り」については、次のように述べている。

⁶乳幼児や幼児を対象とした実験的研究からも、感情表現の生得性および普遍性を支持する結果が数多く示されている。たとえば Izard (1994) は、生後わずか数ヶ月の乳児が、喜び、怒り、恐れ、悲しみといった基本的感情を表す独特な顔の表情を示すことを明らかにしている (p.292)。さらに、Goodenough (1932) は、生まれつき視覚や聴覚に重度の障害を持つ子どもにおいても、社会的模倣や学習の機会がほとんどない状況下で、同様の感情表現が自発的に現れることを報告している (pp.328-329)。

- (1) “Anger: the response to interference with our pursuit of a goal we care about. Anger can also be triggered by someone attempting to harm us (physically or psychologically) or someone we care about. In addition to removing the obstacle or stopping the harm, anger often involves the wish to hurt the target”. (Ekman 2011 : 365)

このように、「怒り」とは「自分が大切にしている目標の達成が妨げられたとき、または自分自身や大切な他者が身体的・心理的な危害を受けそうになったときに生じる感情」であり、単に障害や危害を取り除こうとするだけでなく、時にその対象に対して攻撃したいという衝動も含まれる感情であるとされる。

しかし、愛情 (love) のような人間にとって重要な心理現象は、Ekman の枠組みにおいて感情 (emotion) としては位置付けられていない。その理由は、感情が瞬間的かつ一過性のエピソードとして発現するのに対し、愛は長期的・持続的な心理状態であり、基本感情の特徴すなわち、明確な表情や生理的反応、急速な発現などを必ずしも備えていないためである。たとえば、愛には怒りや恐れのような典型的な顔の表情や、明確な生理的変化が見られない。この点からも、愛情は Ekman の定義する「基本感情」には含まれないと考えられる (Ekman 2003 : 201) ⁷。

なお、Ekman の研究は、人間に生得的に備わった表情や生理的反応といった非言語的な感情表現の普遍性に焦点を当てており、emotion language (感情語やその語彙的多様性) は直接の分析対象とはなっていない。実際、Ekman (2003, 2011) は「言語は感情そのものではなく、感情を表象 (representation) する手段に過ぎない」と述べ、感情は自動的かつ生理的なプロセスとして進化的・個人的経験に基づき生じる現象であると位置づけている (Ekman 2003 : 13) ⁸。このように、Ekman の基本感情理論は、感情表現の非言語的・生物学的基盤に重点を置いている点が特徴である。

⁷ “Being in the presence of a loved one is another universal theme. Both parental love and romantic love involve long-term commitments, intense attachments to a specific other person. Neither is itself an emotion. Emotions can be very brief, but love endures.” (Ekman 2003 : 201)

⁸ “Words are representations of emotions, not the emotions themselves. Emotion is a process, a particular kind of automatic appraisal influenced by our evolutionary and personal past, in which we sense that something important to our welfare is occurring, and a set of physiological changes and emotional behaviors begins to deal with the situation. Words are one way to deal with our emotions, and we do use words when emotional, but we cannot reduce emotion to words.” (Ekman 2003 : 13)

2.3 文化・社会心理学的なアプローチ

次に、本節では文化・社会心理学の観点から感情研究の主要な議論を整理する。

これまで 2.2 節では、Darwin や Ekman らによる感情の生得性・普遍性をめぐる進化的・心理学的アプローチを中心に論じてきた。しかし、近年の研究では、こうした生理学的基盤に依拠した理論に対し、さまざまな批判や再検討が加えられている。特に、実験手法の限界や分析対象となる感情範囲の限定性、文化や文脈の多様性に着目した議論が展開されている。

基本感情理論の普遍性については、多くの批判も提起されている (Russell 1991、1994、Mesquita 2001、Sabini and Silver 2005、Barrett 2011、2013、2017⁹など)。その中で以下のような点が指摘されている。

第一に、実験方法の影響という問題がある。基本感情の普遍性を支持する多くの研究は、強制選択式や事前に用意された表情写真など、人工的な実験条件を用いている。しかし、こうした手法では、参加者は与えられた選択肢の中から最も近いものを選ぶだけであり、実際の日常的な感情認識とは異なる可能性がある。

第二に、分析対象となる感情の範囲が限定的であるという点である。Sabini and Silver (2005) は、Ekman の基本感情理論が怒りや恐れなどの「非対人的」な感情を重視する一方で、愛や嫉妬といった「対人的・関係的な感情」を体系的に扱っていない点を批判している。

第三に、文化や文脈の影響が過小評価されている点が挙げられる。表情そのものは共通していても、それがどの感情を表しているかという「意味付け (ラベル付け)」は文化によって異なりうる。

本節では、まず基本感情理論の主な批判点を整理し、強制選択式実験の方法論的課題 (2.3.2)、分析対象となる感情の範囲の問題 (2.3.3)、さらには文化的・文脈的多様性への注目 (2.3.4) という流れで、社会心理学的なアプローチが感情研究にもたらした視点の転換を検討する。

⁹ Barrett (2011、2013、2017) の一連の研究は本節で述べるような文化や文脈による感情経験・表現の多様性に注目した立場をとっているが、これを「心理構成主義」(psychological constructionism) と呼び、特に感情が脳内で文化的・社会的文脈をもとに構築されるプロセスであることを神経科学的な観点から検討している。本稿では Barrett のアプローチの詳細は割愛するが、詳しくは Barrett (2011、2013、2017) を参照されたい。

2.3.2 強制選択式の実験の限界 (Russell 1994; Sato et al. 2019)

基本感情の普遍性を支持する従来多くの研究は、あらかじめ用意された表情写真や強制選択式という、人工的な実験手法に依拠してきた。しかし、こうした条件下では、参加者は提示された選択肢の中から最も近いものを選ぶだけであり、実際の自然な状況での感情認識とは異なる可能性がある。実際、選択肢を与えずに自由記述形式で回答させ、より現実に近い状況設定で実験を行った場合、異文化間での感情認識の一致率は大幅に低下し、感情表現の普遍性が必ずしも強く現れないことが明らかになっている (Russell 1994 : 116-117)。

例えば、Sato et al. (2019) は、感情表現研究が西洋文化に偏ってきた点を指摘し、欧米とアジアの文化差が感情の普遍性を再考する上で重要であると述べた。彼らは日本人一般成人を対象に、Ekman らの方法に近い「写真モデルの模倣条件」と、より現実的な「状況想定 (シナリオ) 条件」の二つを設定し、基本感情の表情表出を比較した。その結果、模倣条件ではすべての基本感情が理論通りに再現された一方、状況想定条件では「喜び」と「驚き」を除き典型的な表情が現れにくく、個人差が顕著であった。表情分析でもこれらの感情における筋肉活動は不明瞭または一致度が低いことが確認された (pp.6-7)。

以上の結果は、Ekman 型の実験で強調される「感情表現の普遍性」が、実際には実験手法や文化的文脈に大きく依存していることを示唆している。すなわち、日常的な状況においては、基本感情理論で想定されるような一対一対応の典型的な表情が常に現れるわけではなく、感情表現の普遍性や一様性を評価する際には、実験方法や文化・文脈の影響を慎重に考慮する必要があるといえる。

2.3.3 分析対象となる感情範囲の限定性 (Sabini and Silver 2005)

第二の問題点として、Sabini and Silver (2005) は、Ekman の基本感情理論が分析対象とする感情の範囲が極めて限定的である点を厳しく批判している。

Sabini and Silver (2005) は、Ekman が怒りや恐れ、嫌悪といった主に「非対人的」な感情を重視し、愛 (love) や嫉妬 (jealousy) のような「対人的・関係的な感情」を、明確な顔面表情や短期的な生理反応といった自身の基準を満たさないという理由で分析の対象外としている点について、こうした基準そのものに問題があると指摘している (pp.700-703)。

嫉妬 (jealousy) と親の愛 (parental love) の感情は、生物学的かつ進化的に人類に備わった「実在する」感情であると広く認識されており、その不在は少なくとも不可解である。実際、嫉妬および親の愛は、進化心理学における中心的な感情と見なされており、進化によって私たちに与えられた感情の原型的存在であり、特に生殖や繁殖といった適応的利益に最も近接する感情であると理解されている (p.694)。

Sabini と Silver (2005) は、怒りや嫉妬、愛といった感情には、実際に脳内でそれらを生起させる進化的なメカニズムが存在するという点で部分的に同意している。しかし同時に、彼らは感情を単なる主観的な「感覚」として捉えることには限界があると指摘し、むしろ感情を「行動」と結びつけて理解することによってこそ、感情がもつ道徳的・社会的意義や、自己の構成要素としての重要性が明確になると論じている (pp.709-710)。

2.3.4 文脈・文化的多様性への過小評価

最後に、第三の問題として、文化的・文脈的多様性が十分に考慮されていない点が指摘されている。

2.3.4.1 文脈の欠如と実験的制約の批判 (Russell 1994)

2.2 節では、Darwin や Ekman による「感情の生得性・普遍性」という進化論的枠組みを中心に、感情がいかに遺伝的・生理的基盤に根ざした現象として捉えられてきたかを述べた。このアプローチは、動物と人間に共通する感情表出を観察し、感情が生存や社会的コミュニケーションに資する適応的な反応であることを示すとともに、感情表情の客観的・自動的・生得的な側面についても示唆的な知見を提供している。

しかし、「人間とは何か」という問いに立ち返ると、感情は単なる生理的反応ではなく、主観的な意味づけを通して経験される現象として捉え直す必要がある。すなわち、人間の視点から考えると、感情は単に表情や身体反応にとどまらず、文脈に応じて意味が付与され、異なる形で解釈される。このような観点から、近年の感情研究では、文化・社会・言語的要因が感情の経験や理解に与える影響が重要視されるようになっていく。

この点に関して、Russell (1994)¹⁰は、Ekman らによる感情表情の実験における「文脈情報の欠如」の問題点を精緻に論じている。多くの実験では、被験者は提示された顔写真のみを手がかりに感情判断を求められ、その表情がどのような状況・背景で生じたものかについては一切情報が与えられない。しかし実際の社会生活においては、同一の表情であっても、文脈次第で意味や解釈が大きく異なる。例えば、贈り物を受け取った直後の微笑みは「喜び」、食事をこぼした際の微笑みは「恥ずかしさ」、敵対者との対面時の微笑みは「礼儀」として受け止められる (p.123)。

また、「欧米文化とほとんど接触のない集団」を対象とした研究についても、被験者が学校教育やメディア等を通じて西洋的な感情表現や解釈枠組みに少なからず接触している可能性が高く、真に隔絶された社会を対象とした実証研究は極めて限られている。このような制約の下で、「感情表現の普遍性」を主張することには大きな限界があると Russell は指摘する (p.124)。したがって、表情のみを切り離した実験的枠組みや、文化的要素を十分に考慮しないまま普遍性を論じることには、理論上の大きな制約が残る。

2.3.4.2 文化によって異なる感情経験とその実証的研究 (Markus & Kitayama 1991; Mesquita 2001)

De Leersnyder et al. (2015) は、同じ文化の人々が人間関係のゴールを共有すると、同じ感情を経験する傾向があると指摘する。これは、感情経験自体よりも、むしろ文化の基準に基づく状況評価が感情の生起に先立つことを意味する。また、状況評価の違いの根底には文化間の価値判断の差異がある可能性も指摘されている (pp.12-13)¹¹。実際、近年の社会文化心理学的研究は、感情経験やその表現がいかに文化や社会的価値観と結びついているかを、実証的に明らかにしてきた。

¹⁰Russell (2003) は Ekman の立場を批判し、Core Affect モデルを提案した。Core Affect とは、「快－不快」(valence) および「覚醒－沈静」(arousal) という二つの次元で特徴づけられる、連続的かつ持続的な主観的感觉であり、必ずしも特定の出来事や明確な感情カテゴリーと結びつかない基礎的な気分状態を指す。しかし、それが対象に結びつき、解釈されると、明確な感情(怒り・悲しみなど)になる。(pp.148-150)

¹¹ “Differences in the most important cultural values may underlie some of the differences in appraisals : People will appraise emotional situation according to their meaning with regard to important values.” (De Leersnyder et al. 2015 : 12-13)

例えば、Markus&Kitayama (1991) は、文化によって「自己」と「感情」の捉え方が異なると述べ、アメリカなどの個人主義的文化では、自己が他者から独立しており（図 1A）、自分の感情を率直に表すことが肯定的に評価されるとした。一方、日本のような集団主義的文化では、自己は他者と密接に関係づけられ（図 1B）、調和を重視するため、「恥」や「共感」など関係志向的な感情が重んじられ、「怒り」など対立を生む感情の表出は抑制される傾向がある（pp.226-227）。

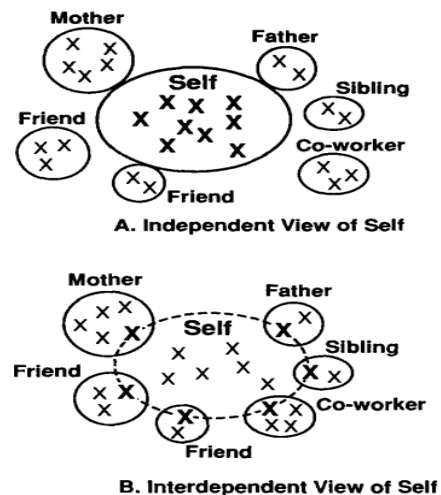


図 1：独立的自己観と相互協調的自己観

さらに、Mesquita (2001) は複数の文化圏を (Markus and Kitayama 1991 : p.226) 比較し、感情がどのような状況で生じ、どう表現・制御されるかを分析した。その結果、個人主義文化では「権利侵害」に対する怒りや「成果」に対する誇りといった自己志向的感情が多く、集団主義文化では「人間関係の軋轢」や「社会的義務の未達」といった対人的感情が中心であることが明らかになった（p.69）。これらの知見は、感情の内容や表現が文化的価値観と密接に連動し、文化ごとに大きく異なることを示す。

すでに 2.1 節で述べたように、Ekman (2011) の「怒り」のエピソードも、実際には文化的・社会的文脈に依存する感情経験の一形態といえる。たとえば「自分や重要な他者が傷つけられた」「目標達成が妨げられた」といった状況は普遍的に怒りを喚起するが、その表現や分類の仕方は言語や文化によって大きく異なる可能性がある¹²。

- (2) “Anger: the response to interference with our pursuit of a goal we care about. Anger can also be triggered by someone attempting to harm us (physically or psychologically) or someone we care about. (中略) anger often involves the wish to hurt the target”.

(Ekman 2011 : 365 再掲)

¹² 実際、Lutz (1988) などの文化人類学的研究は、Ekman が想定する「怒り」のエピソードがすべての文化で感情表現として明確に存在するとは限らず、その表現や評価の枠組みも多様であることを示している。こうした異文化事例については、次節で詳述する。

このように、心理学的・人類学的研究から明らかになったのは、感情には生得的・生理的な側面がある一方、日常的な状況では基本感情理論が想定するような典型的表情が必ずしも現れないという点である。したがって、感情表現の普遍性を論じる際には、実験方法や文化的・文脈的要因を慎重に考慮する必要がある。さらに、同じ表情であっても、それがどの感情を示すかという「意味付け」は文化的な意味体系や社会的規範に強く依存しており、Russell (1991、1994) や社会文化心理学の研究でも繰り返し示されている。

また、感情は「個人的」現象であると同時に「社会的」現象でもあり、その経験・理解・表現の規範は、社会的に構築され共有された意味システムに支えられている (Ye 2006 : 59-60)。この共有された意味システムは言語の中に表れ、各言語には固有の感情表現や語彙体系が存在すると考えられる。したがって、感情表現の意味や用法を精密に分析することは、感情解釈の普遍的側面と文化固有の側面の双方を明らかにする重要な手がかりとなる。

次節では、感情語の意味構造やカテゴリー化に注目し、文化と言語の観点から感情概念の多様性を検討する。

2.4 言語学的アプローチ

Pavlenko (2014 : 254) は、感情を文化的・社会的文脈から切り離して理解するという発想自体が、西洋近代心理学の産物であると指摘する。近年の研究でも、感情語は経験を単純に反映するものではなく、翻訳の非等価性 (translation non-equivalence) に示されるように、高度に解釈的な性質をもつことが明らかになっている。これは、言語ごとに感情語彙の構造や意味体系が大きく異なるためである。

本節では、感情の文化的多様性を理解する手がかりとして、感情語 (emotion words) に焦点を当てた言語学的アプローチに注目する。2.4.1 で文化人類学的研究 (Lutz 1982、1988; Lutz & White 1986) を通じた感情カテゴリーの文化的構築、2.4.2 で Wierzbicka の NSM 理論による意味構造の分析、2.4.3 で Kövecses らのメタファー理論に基づく比喩的意味構築の文化的多様性を検討する。

2.4.1 イファルク語 *song* と *fago* の感情の記述 (Lutz 1982、1988 ; Lutz&White 1986)

Lutz¹³ (1982、1988)、Lutz & White (1986) などの人類学の研究は、欧米中心的な感情観が普遍的なものとみなされがちであることに疑問を呈し、「感情とはそもそもどのような現象か」という問い自体が文化ごとに異なる枠組みで立てられるべきであることを強調している。

例えば、Lutz (1988 : 3-5) は、従来の心理学的アプローチが実験室的な条件や西洋中心の感情語彙を前提としている点を批判している。その上で、「自己」や「他者」、さらには世界や経験に関する私たちの理解は、根本的に社会的な起源を持つと指摘する。すなわち、喜びや怒りといった感情がどのように個人に割り当てられ、主観的経験として構築されるかという問題について、対人的・社会的なプロセスが不可欠な役割を果たしていることが示唆される。

- (3) “The concept of emotion plays a central role in the Western view of the world... on the belief that emotion is in essence a psychobiological structure and an aspect of the individual. The role of culture in the experience of emotion is seen as secondary, even minimal, from that perspective”. (Lutz 1988 : 3)
- (4) “the decidedly social origins of our understandings of the self, the other, the world, and experience draw our attention to the interpersonal processes by which something called emotion or some things like joy, anger, or fear come to be ascribed to and experienced by us.”
(Lutz 1988 : 5)

Lutz はミクロネシアのイファルク島で約 20 か月にわたり現地住民と生活を共にし、実際の社会生活の場で、彼らがどのような言語資源を用いて感情を経験し評価するのかを、参与観察やインタビュー、日常会話や争いごとの記録・分析を通して明らかにした。例えば、*song* や *fago* などの感情語について、その意味と文化的機能、さらに *song* (正当な怒り) のようなイファルク語特有の感情語がどのような状況で用いられ、どのような感情経験や社会的評価と結びつくのかを詳細に記述している。

¹³ Lutz は本来人類学者であり、ミクロネシアイファルク島でのフィールドワークを通して感情語の用法や意味構造を記述している。しかし、本稿では感情語研究という観点から、便宜的に言語学的アプローチの枠組みに含め、Kövecses や Wierzbicka との比較対象として論じる。

本節では、イファルク語の *song* と *fago* の意味と文化的役割の記述を確認する。

2.4.1.1 *song*（正当な怒り）に関する記述

一見すると、イファルク語の *song* は英語の *anger* に類似しているように思われるが、その成立背景や社会的機能は大きく異なる。Lutz (1988) によれば、*song* は単なる怒りではなく、共同体の道徳的秩序や社会的責任に深く関わる感情であり、個人の内的衝動ではなく規範的判断に基づいて生じる (p.157)。親が子どもに対して、あるいは共同体の指導者が成員に対して抱く感情であり、その中心には規律や道徳への関心がある。表出も怒鳴るといった激しいものではなく、沈黙や視線、姿勢といった非言語的な手段が多用される。さらに、*song* は他者との関係性の中で共有され、共同体の規範を再確認・強化する社会的機能を担う (pp.169、174)。

これに対し、英語の *anger* は主として自己の権利や尊厳が侵害されたときに生じる個人的な情動反応である。中心には「自分や自分にとって重要なものが攻撃された」という感覚があり、感情の焦点は自分自身に向かう。表出は大声や顔の緊張など身体的反応として直接的に現れやすく、文脈も主として私的領域や親密な関係に限定される (pp.177-178)。

このように、*anger* が個人の内面に根ざした主観的な感情であるのに対し、*song* は社会的文脈で機能する規範的な感情であり、両者は本質的に異なる概念である (p.179)

¹⁴。

2.4.1.2 *fago* に関する記述

song と同様に、イファルク語に特有の感情語 *fago* も、英語の感情語と部分的に重なるものの、独自の感情構造と社会的機能を備えている。*fago* は、他者の脆弱性や困難に対して深く寄り添い、その人物を思いやり支えようとする感情である (p.119)。Lutz (1988) は、*fago* を英語の *compassion*、*love*、*sadness* などで部分的に訳しうるとしつつ、いずれもその全体像を十分に捉えることはできないと指摘する (pp.119-120)。

¹⁴イファルク語の *song* のように、フィリピンのイロンゴット社会にも *liget* という英語の直訳できない感情語が存在する (M.Rosaldo 1980)。この感情は、一般に *energy*、*anger*、*passion* と説明される (p.22)。これは、あふれる感情を行動や創造に変える力を指す感情である。具体的には、感じられる激しい衝動が人を慰める歌や重労働、さらには首狩りといった行為へと向かうとされる (pp.27-28)

まず *fago* と *love* の比較では、ともに他者への肯定的感情を含むが、その焦点が異なる。アメリカ文化における *love* が対等で自立した関係を前提に対象の価値や理想性を重視するのに対し、*fago* は弱者や困難に直面する他者を思いやる感情として現れ、「援助を必要とする他者」に向けられる (pp.144–146)。

次に *compassion* は他者の苦しみに対する思いやりとして *fago* に比較的近いが、アメリカ文化では主に「理解しようとする姿勢」や「気遣い」として語られ、必ずしも行動を伴わない。一方、*fago* は実際のケアや支援行動へと結びつく能動的な感情であり、共同体における重要な社会的実践として機能する。また、*compassion* は日常語としての使用頻度が低く、文化の中心的感情語とは位置づけられていない (pp.146–148)。

さらに *sadness* は喪失や死に関連する点では共通するものの、アメリカ文化における *sadness* は自己否定感や無力感を伴う内向的・受動的な感情として理解されるのに対し、*fago* は他者の苦境に寄り添い支えようとする能動的で倫理的な責任感として現れ、行動を促す点で対照的である (pp.148–149)。

以上のように、*song* や *fago* は英語の *anger* や *love*、*compassion*、*sadness* と一対一で対応する概念ではなく、各文化の価値観や対人関係の枠組みのなかで意味づけられている。これは、感情が個人の内的経験であると同時に、文化的・社会的背景のなかで構築される現象であることを示す。したがって、感情研究においては文化固有のカテゴリーとしての感情語を精密に記述する視点が不可欠である。

こうした文化的特異性をふまえつつ、異なる言語間で感情語の意味を比較可能な形で描写しようとする試みも存在する。その代表が Wierzbicka の Natural Semantic Metalanguage (NSM) 理論である。

次節では、この理論枠組みと感情語研究への応用について詳細に検討する。

2.4.2 NSM 理論による普遍的意味素を用いた感情語の記述 (Wierzbicka 1986、1992a、1992b)

Lutz と同様に、Wierzbicka (1986、1992a、1992b) は感情概念の普遍性に対して慎重な立場を取り、感情語の意味や概念枠組みは文化ごとに大きく異なることを一貫して主張している。特に、Ekman ら心理学者が提示する「基本感情」のリストが英語の語彙に依拠している点を批判し、英語中心的な感情観を他文化にそのまま適用できるという前提自体が妥当ではないと論じる。

実際、英語の *disgust*、*shame*、*fear* といった感情語は、他言語に一对一で対応する語が必ずしも存在せず、その意味範囲や使用条件も大きく異なる。したがって、これら英語語彙を分析の出発点とすることは、感情概念を無意識のうちに英語的枠組みに閉じ込めてしまう危険を伴う。彼女は次のように、英語の感情語は文化依存的であり、普遍的な分析枠組みとは言い難いと指摘する (Wierzbicka 1986 : 586)。

- (5) “English terms of emotion constitute a folk taxonomy, not an objective, culture-free analytical framework, so obviously we cannot assume that English words such as *disgust*, *fear*, or *shame* are clues to universal human concepts, or to basic psychological realities.”

(Wierzbicka 1986 : 586)

もちろん、特定言語に感情語が存在するからといって、その感情をその文化の話者だけが経験することを意味するわけではない。しかし、固有の語彙が与えられているという事実は、その感情が当該文化で特別な意味や社会的役割を担っている可能性を示す指標となる (p.587)。

この問題意識から、Wierzbicka は Natural Semantic Metalanguage (NSM) 理論を提唱する。これは *good*、*bad*、*do*、*happen*、*know* など、全言語に共通するとされる意味素のみを用いて感情語の意味を記述・比較する手法であり、翻訳可能に見える感情語間に潜む文化的・意味的ズレを明示化することを可能にする。

さらに Wierzbicka (1992a) は、感情語の意味が特定の「文化的スクリプト」や「プロトタイプの状況」と結びついている点を示し、感情体験そのものがこうしたスクリプトを通じて解釈されると論じている (p.548)。

また、英語の *anger* と *indignation* について NSM による分析を提示し、両者がどのような心理的スクリプトを持ち、どの点を核心として異にするのかを、表 1 の普遍的意味素に基づいて比較可能な形で記述している (pp.569-570)。

表 1 : 英語の感情語 anger と indignation の NSM 意味記述
(Wierzbicka 1992a : 569-570 強調は筆者による)

anger	indignation (indignant)
X feels something	X feels something
sometimes a person thinks something like this :	sometimes a person thinks something like this :
this person did something bad	I know now : someone did something bad
I don't want this	I didn't think : someone can do something like this
because of this, I want to do something	I don't want this
I would want to do something bad to this person	because of this, I would want to do something
because of this, this person feels something bad	I want to say what I think about this
X feels like this	because of this, this person feels something bad
	X feels like this

表 1 が示すように、anger と indignation はいずれも I don't want this (誰かが悪いことをした) という認知から生じるが、両者の意味構造には明確な違いがある。

anger は I would want to do something bad to this person (相手に対して何かをしたい) という衝動的・攻撃的な要素が強い。一方、indignation には I didn't think : someone can do something like this (予想外だった) といった驚きの成分に加え、「自分の意見を表明したい」という社会的側面がより強調される。

このような分析により、一見似ている感情語であっても、その心理的枠組みや文化的意味の違いを、言語非依存的な形で可視化することが可能になる (pp.569-570)。

さらに、NSM 理論では、これらの文化的スクリプトを言語非依存的な意味素のみで記述することで、異なる言語 (ポーランド語、イファルク語など) の感情語がどのような心理的枠組みや状況と結びついているのかを比較可能にし、文化固有の感情経験の構造を明示する手がかりを提供する (Wierzbicka 1992b、1997、1998、1999、2001 など)。

これらの研究は、英語の anger や sadness などといった感情カテゴリーが他言語で必ずしも同じ形で存在するわけではなく、各言語がもつスクリプトや概念的枠組みの違いによって、感情の捉え方や分類自体が大きく異なることを示している。

以上をふまえ、次の 2.4.2.1 節および 2.4.2.2 節では、NSM による分析を通して、英語とイファルク語の感情概念の相違を具体的に検討する。

2.4.2.1 イファルク語の **song** と英語の **anger** の比較

Wierzbicka (1992b : 147-148) は、NSM を用いて英語の **anger** とイファルク語の **song** のプロトタイプの構造を比較し、両者が感情概念の内的構造や社会的機能において本質的に異なることを示している。両語はいずれも **this person did something bad** (この人が悪いことをした) という判断を共有するものの、その後続く構成要素には顕著な相違が見られる (表 2)。

表 2 : Wierzbicka (1992b : 147) の NSM を用いた
イファルク語の **song** と英語の **anger** の比較 (強調は筆者による)

song	anger
(a) X thinks something like this :	(a) X thinks something like this :
(b) this person (Y) did something bad	(b) this person (Y) did something bad
(c) people should not do things like this	(c) I don't want this
(d) this person should know this	(d) I would want to do something bad to this person
(e) because of this, X feels something bad	(e) because of this X feels something bad toward Y
(f) because of this, X wants to do something	(f) because of this X wants to do something

英語の **anger** では、**I don't want this** (私はこれを望まない) という主観的な拒絶が加わり、さらに **I would want to do something bad to this person** (この人に悪いことをしたくなる) という報復的な行動欲求が明示される。つまり、**anger** の意味構造は、自己の欲求や行為意図を中心に展開されている (p.148)。

これに対して、イファルク語の **song** には、**people should not do things like this** (人はこのようなことをすべきではない) や **this person should know this** (この人はそれを知っているべきだ) といった道徳的・規範的な判断が含まれており、個人的な欲求ではなく社会的価値観に基づいて構成されている点が特徴である。

また、anger に見られるような対象への直接的な攻撃性 (I would want to do something bad to this person) は song には見られず、感情の向かう先は必ずしも相手に限定されず、自分自身や共同体全体にも及びうる。その結果として表れる行動も、報復ではなく、沈黙、拒絶、あるいは自罰的な反応として現れる可能性がある (p.148)。

2.4.2.2 イファルク語の fago と英語の love, compassion の比較

また、Wierzbicka (1992b : 143-146) は、NSM 理論を用いて、イファルク語の fago と英語の love、compassion の意味構造とプロトタイプの状況を詳細に比較している。彼女は、これら三つの感情語には「他者への肯定的な感情」と「何らかの善意の行動意図」が共通して含まれていると認めつつも、その内的構造、社会的機能、文化的役割には本質的な違いが存在すると論じている (表 3)。

表 3 : Wierzbicka (1992b : 143-145) の NSM を用いた

イファルク語の fago と英語の love、compassion の比較 (強調は筆者による)

fago ¹⁵	compassion	love
X thinks of person Y X feels something good toward Y X thinks something like this : something bad can happen to a person when something bad happens to someone, some people should do something good for this person I don't want bad things to happen to Y when X thinks that something bad can happen to Y, X feels something bad	(a)X thinks something like this : (b) something bad happened to Y (c)because of this, Y feels something bad (d) if it happened to me, I would feel something bad (e)when X thinks this, X feels something good toward Y	(a) X knows Y (b) X feels something good toward Y (c) X wants to be with Y (d) X wants to do good things for Y

¹⁵ 原典 (Wierzbicka 1992b : 143) では fago に(a)(b)の区分がないため、本稿でも付していない。

because of this, X wants to do something good for Y		
---	--	--

2.4.1.2 節で述べたように、Lutz (1988) によって **fago** という感情語には、イファルク語社会に固有の複雑で多層的な意味構造があることが指摘されている。**fago** は、特定の親密な一人に向けられるだけではなく、社会的弱者や家族、コミュニティ全体にまで及ぶ非対称的かつ集団志向的な感情である (pp.119-120)。

Wierzbicka (1992b) は、NSM 理論を用いて **fago** の意味構造を分析し、その中心的意味 (core sense) と周辺の意味 (peripheral sense) を区別して記述している。彼女によれば、**fago** の意味記述の中核にあるのは、「困難な状況にある他者への思いやりや善意の行為」である。また、**fago**、**love**、**compassion** の三つの感情語はいずれも「X が Y に対して肯定的感情を抱き、Y に何か良いことをしたいと望む」という点で共通するものの、その内在的構造や文化的機能には顕著な違いが見られるとされる (p.143)。

まず、**fago** は **something bad can happen to Y** (Y に悪いことが起こるかもしれない) という危機認識と相手の脆弱性への配慮を中核にもち、保護・思いやり・社会的責任といった要素が強調される。また、**fago** は親密な一対一の関係に限定されず、社会集団の成員全体にも向けられる非対称的・集団志向的な感情である (p.144)。

一方 **compassion** は **something bad happened to Y** (Y にすでに悪いことが起きている) という状況認識に基づき、他者の苦しみに対する共感的反応を主要な要素とする。しかし、**compassion** では実際の行為意図よりも、苦しむ他者への共感そのものが前面に出る点に特徴がある (p.145)。

また、**love** は **X knows Y** (X は Y をよく知っている)、**X wants to be with Y** (X は Y と一緒にいたいと思っている) といった構成要素が示すように、特定の人物に対する親密さや個人的な絆、さらに喪失や親密性といった情緒的側面が中心となる。**love** はきわめて個人志向的な感情であり、対象との特別な関係性が意味構造の核を成す (pp.145–147)。

このように、NSM は異文化間で類似する感情語の意味構造を客観的に比較し、その差異を精緻に言語化するうえで大きな役割を果たしている。

一方で、このように文化的・社会的意味を大きく抽象化する NSM の方法では、感情語に内在する文化固有の特徴を十分に記述できないという限界も残されている。NSM のこうした限界と本研究における立場については、第 2.5 節で改めて論じる。

次節では、もう一つの重要なアプローチとして、感情概念がどのような認知的メカニズムによって構築されるのかに注目する。特に、Lakoff & Kövecses (1987) が提唱する「身体的経験に基づくメタファー理論」を取り上げ、感情の意味や枠組みが身体的・生理学的経験に基づく比喩的構造（メタファー）を通じて、どのように言語的・文化的に形成されるのかを検討する。

2.4.3 身体的経験を基盤としたメタファー理論 (Lakoff & Kövecses 1987; Kövecses 1991、2000)

本節では、感情の意味や構造がどのようにメタファーによって形成されているのかを、認知言語学の観点から整理する。

Lakoff & Johnson (1980 : 5) は、メタファーが単なる言語表現上の現象にとどまらず、認識や思考の根幹をなすものであると主張している。つまり、我々は抽象的な事柄や概念を、より具体的で身体経験に基づいて理解する傾向がある。この観点から、メタファーは日常言語に広く遍在し、思考そのものを形作っているとされる。

- (6) “The essence of metaphor is understanding and experiencing one kind of thing in terms of another.” (Lakoff & Johnson 1980 : 5)

このメタファー理論を踏まえ、Lakoff & Kövecses (1987) はとくに「感情」に注目した研究を展開した。従来、感情は単なる感覚とみなされ、意味論や概念構造の研究では十分に扱われてこなかった。しかし、Lakoff & Kövecses (1987) は次のように述べ、感情はきわめて複雑な概念構造を持ち、多様な推論を生み出す存在であると主張する。

- (7) “Emotions are often considered to be feelings alone, and as such they are viewed as being devoid of conceptual content. ... We would like to argue that the opposite is true, that emotions have an extremely complex conceptual structure, which gives rise to wide variety of nontrivial inferences.” (Lakoff & Kövecses 1987 : 195)

以上を踏まえ、2.4.3.1 節と 2.4.3.2 節では、Lakoff & Kövecses (1987) の「身体的経験を基盤としたメタファー理論」に基づき、感情語がいかに比喩的構造を通じて意味づけられ、概念化されているかを、英語の「怒り」と「愛」という代表的な感情語を中心に具体的に検討する。

2.4.3.1 「怒り」の感情概念の分析

Lakoff & Kövecses (1987) は、従来、感情が単なる個々の感覚経験として捉えられ、意味論や概念構造の研究対象として十分に扱われてこなかった点を指摘した上で、感情概念が人間の身体的・生理的経験に根ざした比喩的枠組みの中でどのように構築されるかを理論的に明らかにした (p.195)。

(I) 英語の「怒り」のメタファー

特に Lakoff & Kövecses (1987 : 197) によるアメリカ英語の *anger* モデルでは、怒りという感情表現が「容器内の熱い液体」や「火」といったメタファー、また生理的反応に基づくメトニミーによって複雑な概念構造を持つことが示されている。例えば、怒りを感じると体温の上昇や顔の赤み、動揺といった生理的反応が伴い、(8)や(9)のようにそれらが言語表現の中に反映される。

(8) *Billy's a hothead.* (体温の上昇)

(9) *He got red with anger.* (顔と首周辺の赤み)

(Lakoff & Kövecses 1987 : p.197 斜字は原文による)

Lakoff & Kövecses (1987) は、怒りを表すメタファーの中心として「怒りは熱である」を挙げ、このメタファーには主に二つのバージョンが存在すると指摘している (p.197)。

一つは(10)で示されている *ANGER IS FIRE* (怒りは火である) で、怒りの「熱さ」や「赤み」が「火」に喩えられる。

(10) (*ANGER IS FIRE*) *She was doing a slow burn.*

(Lakoff & Kövecses 1987 : p.198 斜字は原文による)

もう一つは、(11a)と(11b)で具現化している ANGER IS THE HEAT OF A FLUID IN A CONTAINER (怒りは容器内の熱い液体である) で、怒りの「熱」「内圧」「動揺」といった側面が容器に入った液体の熱として表現される。

(11) (ANGER IS THE HEAT OF A FLUID IN A CONTAINER) ^{16 17}

a. You make *my blood boil*.

b. I had *reached the boiling point*. (Lakoff & Kövecses 1987 : pp.198-202 斜字は原文による)

さらに、英語の怒りのモデルには、これ以外にも多様なメタファーが見られる。たとえば、(12)の「攻撃的な動物行動」は怒りの表出様態を、(13)の「越境」は怒りの発生要因を示すメタファーである (pp.207-209)。

(12) (ANGRY BEHAVIOR IS AGGRESSIVE ANIMAL BEHAVIOR) Don't *snarl at me!*

(Lakoff & Kövecses 1987 : p.207 斜字は原文による)

(13) (THE CAUSE OF ANGER IS TRESPASSING) This is where I *draw the line*.

((Lakoff & Kövecses 1987 : p.209 斜字は原文による))

Lakoff & Kövecses (1987) は、数多くのメタファーの中でも、「怒りは容器内の熱い液体である」というメタファーが中心的な働きをもつと指摘している。このメタファーが核となるのは、怒りが高まっていく過程を、液体の温度や圧力が徐々に上昇し、ついには噴き出すに至るという連続的な変化として、きわめて自然に描き出せる点にある (p.198)。

¹⁶Kövecses が「怒り」に関する主要なメタファーとして「容器内の熱い液体」や「自然の力」など多く挙げているが、Stefanowitsch (2006) による 1000 件のコーパス分析では、これらのメタファー表現は全体のわずか 14%しか占めていなかったことを明らかにしている (p.73)。実際の言語使用では、「怒り」は「移動する物体」または「位置の変化」として概念化されるメタファーが非常に多く、これらが全体の約 3 分の 2 を占めていた (p.75)。このように、直感に基づく分析のみでは、現実の言語使用に見られる多様なメタファーを十分に把握することは難しいことが示唆される (Gibbs et al. (2017 : 117)。

¹⁷Omori (2008) は、中心的とされてきた「感情は容器内の熱い液体である」というメタファーに疑問を投げかけた。Omori は大規模コーパス (British National Corpus) を用いて実際の英語表現を分析した結果、「波」「海」「洪水」などの自然界に存在する巨大な水の動きを表現するメタファーが感情の描写で最も頻繁に使われていることを指摘した (pp.136-137)。加えて、中心的な感情も「怒り」ではなく、「不安」「安堵」「欲望」「喜び」など多様であることが分かった (p.142)。

(II) 英語の「怒り」の典型的認知モデル

また、Lakoff & Kövecses (1987 : 211) は、英語の怒りのメタファーを基盤として、怒りの進行過程を 5 つの段階から成る認知モデルとして示している (表 4)。

表 4 : 英語の「怒り」の典型的な認知モデル (Lakoff & Kövecses 1987 : 211)

“1. Offending Event → 2. Anger → 3. Attempt at control → 4. Loss of control → 5. Act of Retribution”

このモデルによれば、まず、侮辱的な出来事が怒りの契機となり、続く怒りの段階で感情が立ち上がり、身体的反応が生じる。次に、コントロールの試みで怒りを抑えようとするものの、制御に失敗すると制御不能に至り、感情が爆発する。最終段階である復讐では、怒りの対象に向けた行動が取られる。このように、怒りを一定の順序をもつ過程として記述している点に、このモデルの特徴がある (p.211)。

中国語 (King 1989、Yu 1995)、日本語 (Matsuki 1995) など他言語でも、この英語のモデルに基づく分析が行われている。

たとえば、中国語では、怒りが伝統的な「気」(qi) の概念と強く結びつき、怒りは液体ではなく「気が上昇する・溢れる・爆発する」といった身体内のエネルギーの動きとして捉えられる (Yu 1995 : 63)。一方で、日本語の「腹が立つ」「頭にくる」と英語の *explode with anger* は、いずれも体内に蓄積した怒りが噴き出すというイメージを共有しているが、文化固有の違いも存在する。Matsuki (1995) は、日本語の「怒り」ではとくに「コントロール」段階の描写が精緻で、怒りの高まりを「腹→胸→頭」という身体内部での位置の移動として段階的に表す傾向があると指摘している (pp.145–146) ¹⁸。

¹⁸大石 (2008 : 281-282) は、日本語と英語における感情メタファーの違いとその要因について考察している。両言語には、「怒り」を「熱い液体」や「火」にたとえる表現など、基本的なメタファーが多く共通していることが確認できる。しかし、英語では「怒りが自分を支配する」(He was beside himself with anger) や「感情が主体となる」(He was ruled by anger) といった、感情が人間の行動をコントロールする主語として扱われる表現が多い。一方で日本語では、「怒りに襲われる」「胸が痛む」など、感情を身体の変化や過程として捉えた表現が多く見られる。この背景には、英語圏にみられる「結果」や「主語」を重視する認知傾向と、日本語文化に根付く「過程」や「変化の流れ」を重視する傾向など文化的・認知的要因が関係していると指摘する。

2.4.3.2 「愛情」の感情概念の分析

次に、英語の「愛情」の感情概念の分析を見る。

広く受け入れられている Ekman の基本感情理論では、「愛」や「嫉妬」といった対人的な感情は、瞬発的な生理反応や特徴的な表情をともしないため、いわゆる「感情」には含まれていない (Ekman 2003 : 203)。

これに対し、メタファー理論の立場を取る Kövecses は、英語における love を anger や fear と同様に、基本的な感情の一つとして捉えている (Kövecses 2000 : 3)。

(14) “Speakers of a given language appear to feel that some of the emotion words are more basic than others. More basic ones include in English anger, sadness, fear, joy, and love.”

(Kövecses 2000 : 3)

Kövecses (2000 : 27) は、「愛」は感情カテゴリーの中でも特に比喩的に構築された概念であると指摘している。これは、「愛」が単なる情動ではなく、対人的な関係そのものを伴う複合的な現象であるためであり、その結果、人間関係に関わる多様な比喩的イメージを通して理解されるという。

さらに、Kövecses (1991 : 93) は、英語の「愛」にはさまざまな種類が存在することを認めたうえで、その中でもロマンチック・ラブ (romantic love) が「カテゴリーの最も典型的な形である」と位置づけている。彼によれば、「愛」は単なる心理的な感情ではなく、身体的経験や文化的イメージに基づく多様なメタファーを介して概念化され、言語化されるものである。

(15) “But romantic love is not the only kind of love, although I think it is the most prototypical member of the more general category of love. (Note that love is a basic-level category, and romantic love is a subordinate level category.) ” (Kövecses 1991 : 93)

(I) 英語の「愛情」のメタファー

Kövecses (1991 : 82) によれば、愛の概念には多様なメタファーが関与しており、その中でも重要なのが「一体」(unity) と「絆」(bond) という二つの関連するメタファーである。

「一体」のメタファーでは、(16)のように恋人同士が「互いを補い合う二つの半分」として一つの全体を形成すると捉えられ、こうした発想は「運命の相手」や「二人で一つ」という理想化された愛情のイメージを支える基盤となっている。また、「絆」のメタファーでは、(17)のように愛する者同士の関係が強固な結びつきとして描かれ、その絆が「決して壊れないもの」として表象される点が特徴的である (p.82)。

(16) (LOVE IS A UNITY OF TWO COMPLEMENTARY PHYSICAL OR BIOLOGICAL PARTS)

We were made for each other.

(17) (LOVE IS A BOND)

Their love is a bond which could not be broken.

(Kövecses 1991 : 82)

さらに、愛を捉える比喩はほかにも存在するが、例えば、「栄養」と「貴重な商品」のメタファーが挙げられる。(18)の栄養メタファーでは、愛が生命維持に不可欠な栄養素に喩えられ、愛を得られない状態は「飢え」として表される。一方、(19)の商品メタファーでは、愛が価値ある資源として理解され、関係は「与える／受け取る」という交換のバランスを基盤として捉えられる。このように、愛は欠乏と補完、あるいは相互交換の関係として概念化されている (p.82)。

(18) (LOVE IS A NUTRIENT (FOOD, ETC.)) He hungered for love.

(19) (LOVE IS A VALUABLE COMMODITY (MONEY, ETC.)) .I didn't get much in return.

(Kövecses 1991 : p.82)

また、例(20)と(21)に示されるように、「愛は容器内の液体」「愛は火」といった比喩も存在し、愛の強さや高まりを表す際に用いられる。

(20) (LOVE IS A FLUID IN A CONTAINER) She overflowed with love.

(21) (LOVE IS FIRE) My heart's on fire.

(Kövecses 1991 : p.83)

(II) 英語の「愛情」の典型的認知モデル

Kövecses (1991 : 90) は英語の愛の理想的なモデルを提案している (表 5)。愛は「二人で一つになる」(一体的)、「互いに与え合い・受け取り合う」(双方向的) 関係として捉えられ、唯一無二で不可欠、持続的な結びつきが強調されている。また、「自分にとって必要」「幸福感」など利己的な側面も一部含まれる。さらに、love には生理的・行動的な変化や、情熱・献身・尊敬といった多様な感情が複合的に現れる点が特徴である。

表 5 : 英語の「愛情」の典型的認知モデル (Kövecses 1991 : 90) (修正を加えた)

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・ 始まりの段階：相手に強く惹かれる。「唯一無二の存在」として認識する。・ 維持の段階：一体感・補完性：「二人で一つ」「自分の半身」という意識。
双方向性と相互作用：与え合い・受け取り合い、公平さを意識する。・ 期待 (将来像)：愛は究極の幸福をもたらす。
関係は「永遠に続くべきもの」と期待される。・ 生理的・行動的变化：ドキドキ、顔が赤くなる、相手のことばかり考える
親密なスキンシップ、性的関心などが表れる。・ 複数の関連概念が含まれる：情熱、献身、尊敬、自己犠牲、親密さ、誇り
幸福感など多様な感情が混ざり合う。 |
|--|

Kövecses (1991 : 86) は、英語の love が単独で成立する一つの感情ではなく、いくつかの 関連概念 (related concepts) によって構成されていると指摘している。これらは、いずれも「愛する対象に向けられる態度」(attitude to the beloved) を表すものであり、具体的には、liking (好ましさ)、sexual desire (性的欲求)、intimacy (親密さ)、affection (優しい思い)、caring (思いやり)、respect (尊敬) などが含まれる。

重要な点として、これらの関連概念はすべて同じ重みをもつわけではなく、love を構成する中核的な関連概念と、状況に応じて付随する周辺の関連概念に区別されるとされる。具体的には、liking や affection が最も中心的な役割を果たす中核的関連概念として位置づけられ、その中間に caring のような概念が置かれる。一方、respect や friendship といった概念は、より周辺の関連概念として扱われるとされる (Kövecses 2000 : 125)。

以上のように、本節で取り上げた三つの理論的アプローチはいずれも、感情が文化や社会的文脈と不可分であること、そして感情語の意味構造や表現が文化ごとに異なることを明確に示している。それぞれ異なる分析枠組みを用いながらも、いずれも「文化的多様性」に着目している点に共通性が見られる。次節では、これら先行研究の成果と限界を踏まえたうえで、本研究の立場を明確にし、分析枠組みを提示する。

2.5 先行研究の問題点

これまで述べてきたように、心理学的アプローチは感情研究の中心的役割を担い、感情を普遍的な生理反応・内的体験として捉えることで、分類や測定、理論構築に大きく貢献してきた。一方、言語学的アプローチは社会文化心理学的視点とも連動しながら、感情概念の多様性や文化的特異性を明らかにし、従来の心理学的枠組みでは捉えきれなかった言語・文化の役割に光を当ててきた。

特に、Wierzbicka の Natural Semantic Metalanguage (NSM) 理論や Kövecses の概念メタファー理論は、感情語の意味構造や枠組みが文化によって大きく異なり得ることを示し、「普遍性」と「文化特異性」の問題を再考する重要な契機を提供している。しかし同時に、これらの理論も、実際の感情経験の複雑さや社会的・語用的側面、文化間の微細な意味差を十分に捉えきれないという限界が指摘されている。

本節では、こうした先行研究の成果を踏まえつつ、残された理論的・分析的課題を整理する。とくに 2.5.1 節および 2.5.2 節では、「怒り」と「愛」に関する既存研究が抱える問題点を具体的に検討し、本研究が採用する理論的立場を明確化していく。

2.5.1 「怒り」に関する先行研究の問題点

本節では、Kövecses のメタファー理論と Wierzbicka の NSM 理論の問題点を取り上げ、怒りの研究における課題を整理する。

2.5.1.1 メタファー理論の問題点

(I) 問題点：「身体的基盤」への偏り

2.4.3.1 節で述べたように、Kövecses (1987) は、英語の「怒り」などの感情概念が、身体的経験を基盤とするメタファーやメトニミーによって文化的に構成されることを示した。彼の代表的モデルでは、「怒り」は身体反応の変化など、コントロールの喪失、

そして報復行為へと至る一連のプロセスとして描かれている (p.211)。

この理論は、感情に共通する身体的基盤を前提としつつ、言語ごとに生理的反応がどのように概念化されるかを示す点で有効である。たとえば、英語では「怒り」が容器内の液体として、日本語では「腹」や「胸」といった身体部位を通して表される (Kövecses 2000 : 145)。

しかし、こうした比較は文化ごとの焦点の違いを示すにとどまり、議論が「身体反応の捉え方」の範囲に限定されがちである。

実際に Kövecses (2000 : 165) 自身も、感情概念化の基盤には「普遍的身体性」があり、文化差はその枠組みの中で生じると述べている。言い換えれば、この理論は文化差を認めながらも、感情を身体的経験の次元で説明する立場を維持しており、感情の原因、社会的機能、語用的条件といった、より複雑で文化的な側面については十分に説明できないという限界を抱えている。

(22) “Given the universal real physiology, members of different cultures cannot conceptualize their emotions in a way that contradicts universal physiology (or maybe even their conceptualization of universal physiology);...” (Kövecses 2000 : 165)

英語に基づく「怒り」のモデルでも、「侮辱の出来事」といった特定の原因や「加害者・敵」を想定した対象、さらに「報復行為」といった反応が中核構成要素として設定されている。その結果、他言語における感情の原因や対象の捉え方が英語の枠組みに押し込められ、感情が生じる社会的文脈の多様性を十分に反映できないという問題が残る。

実際、感情は単なる身体的反応ではなく、原因・経験者・対象といった複数の要素が相互に関わる複合的なプロセスである (Foolen 2012 : 352)。したがって、感情語を通言語的に分析する際には、身体的経験だけでなく、「原因や対象の解釈」や「社会的側面」といった、より広い観点から検討する必要がある。

(II) 具体例：ベトナム語の *giận* と英語の *angry* における関係前提の差異

以上の問題点をより明確にするため、本節では、ベトナム語の *giận* を取り上げ、感情の「対象」に関わる文化的制約を具体的に検討する。

実際、英越辞書では一般に、英語の **angry** はベトナム語の **giận** に相当する語として記述されている (Từ Điển Anh Việt [Vietnamese–English Dictionary], p.53)。

また、ベトナム語の **giận** も英語 **angry** と同様、「顔が熱くなる」「血が上る」といった身体反応にもとづくメタファーで表現されることが多い。

たとえば、次の(23)が挙げられる。

(23) ベトナム語

Cô	giận	nóng	máu	với	người bạn thân	đã phản bội	mình.	(作例)
彼女		熱い	血	と	親友	裏切った	自分	

(彼女は親友に裏切られ、血が熱くなるほど怒った)

例(23)では、**giận** は裏切りを契機に怒りが生じ、その高まりが「血が上がる」という喩で表される。これは、英語の **blood boils** など、怒りを「熱」や「血の上昇」として捉える表現と対応している。

しかし、「怒り」が誰に向けられるか(感情の対象)に注目すると、英語とベトナム語の間には明確な違いが見られる。たとえば、英語の **angry** は、(24a)のように親しい関係にある場合でも、そうでない場合(会社のライバル)の(24b)でも、関係性にかかわらず幅広い対象に用いることができる。

(24) 英語

- a. She was angry with her close friend for criticizing her behind her back.
- b. She was angry with her rival in the company who criticized her behind her back.

一方、ベトナム語では **giận** は主に「親しい相手」への怒りを表すため、(25a)のような親友関係には自然に用いられる。しかし、(25b)のように親しくない相手には **giận** は不自然で、代わりに(25c)の **tức giận với** (「詰まる」+ **giận**+「に対して」)の迂言表現が選ばれる。

(25) ベトナム語：

a. Cô ấy giận người bạn thân đã chỉ trích mình sau lưng.

彼女 親友 批判した 自分 背後

(親友に陰口を言われて giận を感じる。)

b. (??) Cô ấy giận người đối thủ trong công ty đã chỉ trích mình sau lưng.

彼女 ライバル 会社の中 批判した 自分 背後

(会社のライバルに陰口を言われて giận を感じる。)

c. Cô ấy tức giận với người đối thủ trong công ty đã chỉ trích mình sau lưng.

彼女 詰まる に対して ライバル 会社の中 批判した 自分 背後

(会社のライバルに陰口を言われて tức giận を感じる。)

このように、怒りの概念化は、身体的反応をどのように捉えるかという問題だけではなく、その感情がどのような関係性・文脈で生じるのかが意味構造を形づくる重要な要素となる。

2.5.1.2 NSM 理論の問題点

続いて、本節では「怒り」に関して NSM 理論が抱える問題点を検討する。

2.4.1 節で述べたように、Wierzbicka の NSM 理論は、すべての自然言語に共通する「意味素」(semantic primes) の存在を前提に、文化を超えた意味記述を可能にしようとする枠組である。感情語を含む語彙の意味構造を、文化に依存しない最小単位で記述できる点は、異文化間比較において一定の有用性を持つ。

しかし、感情語を異なる言語文化の中で比較しようとする、NSM にはいくつかの理論的課題がある。特に、固定的で一義的な意味モデルに基づいて感情語を記述するという前提が、感情の多層性や文化的・語用的側面を十分に捉えきれないという限界を抱えている。

次に、このような単一かつ閉じたモデルによる記述の限界に焦点を当て、NSM の問題点を整理する。

(I) 問題点：単一かつ閉じた意味モデルによる感情語の記述

NSM 理論は、各言語の感情語を普遍的意味素の組み合わせによって静的なスクリプトとして簡潔に記述し、異言語間で比較可能にする点で一定の有用性をもつ。

一方で、このような単一かつ閉じた意味モデルに依拠することにより、実際の言語使用に見られる感情語の多様な意味変化や文脈依存性を十分に捉えきれないという問題が指摘されている (Blumczyński 2013 ; Riemer 2006)。

たとえば、Blumczyński (2013) は翻訳研究の立場から NSM 理論にいくつかの問題点があることを指摘している。彼によれば、言語は純粋な意味素の集合として機能するのではなく、常に文脈に依存して運用される複合的な体系である (p.266)。そのため、NSM が文脈・経験・伝達目的といった意味構築に不可欠な要素を十分に扱わず、言語を実際の使用状況から切り離して捉えている点に注意を促している (p.264)。また、「簡約的言い換え」(reductive paraphrase) についても、場合によっては抽象度が高く、自然な記述から離れてしまう可能性があると述べている (p.270)。

(II) 具体例：関係性に基づく *giận* の後続行動に見られる「怒りと心配の併存」

以下では、NSM のスクリプトが抽象化されすぎるとどのような問題が生じるのかを、ベトナム語 *giận* の例を用いて検討する。

たとえば、英語 *angry* のスクリプト一部は、Wierzbicka (1992a : 569) が次のように示している。

(26) (a) this person (Y) did something bad

(b) I don't want this

(c) I would want to do something bad to this person (Wierzbicka 1992a : 569)

このモデルによれば、*angry* は「悪い行為を受ける→悪い気持ちになる→何らかの対処行動をとりたくなる」という構造をもつ感情として理解できる。

この点は、(27a)の *angry* と(27b)の *giận* に見られる後続反応にも対応している。つまり、裏切られるという原因が声を荒らげるという行動を引き起こすのである。

(27) a.英語 : She felt angry with the close friend who betrayed her, so she raised her voice.

b.ベトナム語

Cô ấy giận người bạn thân đã phản bội mình, nên cô ấy đã lớn tiếng.
彼女 親友 裏切った 自分 だから 彼女 大声を出した

しかし、angry のスクリプトに見られるような「悪い行為を受ける→対処行動をとりたくなる」という直線的モデルでは、文脈によって対人的意図が異なる場合、特に怒りと心配が同時に立ち上がる場合を十分に説明できない。

たとえば、例(28)を見てみよう。

(28) 『幼い弟が誤って殺虫剤で入浴してしまったことに姉のヘオは「殺虫剤の風呂に入るなんて馬鹿よ。あいつ、シャンプーだと思ったのね」と叱りながら、同時に心配も抱いている。その後、弟にお粥を食べさせ、抱きしめて寝かせる』

“...chị Heo cần nhìn, nhìn nó vừa giận vừa thương.”

姉 ヘオ 叱る 見る あいつ ながら ながら 心配する

(ヘオは叱りながら、弟を見ると、怒りと共に「弟を心配する」という感情が湧いた。)

(28)では、叱るという行動は怒りの表出のように見えるものの、その根底にある対人的意図は(27)とは異なって、実際に「相手を心配する」という保護的な意図が含まれており、このような対人的意図の違いは Wierzbicka のモデルでは捉えにくい。

仮に、NSM のモデルに忠実に沿って記述しようとする、

(29) I would want to do something bad to this person (叱るに対応)

I would want to do something good to this person (保護・思いやりに対応)

のように、相反する要素を並列させる必要が生じる。

しかし、このような表象では、感情の成立に関わる「関係性」の要因が組み込まれておらず、文脈に応じて後続行動の性質が変化する現象を十分に説明できない。すなわち、NSM の単一的かつ静的なモデルでは、関係性に依存して意味が変化する感情語の使用制約をとらえることが難しい。

2.5.2 「愛情」に関する先行研究の問題点

続いて、「愛情」の感情概念の分析に関して、Wierzbicka の NSM 理論および Kövecses のメタファー理論における限界点を検討し、両理論における課題を整理する。

2.5.2.1 メタファー理論の問題点

(I) 問題点：関連概念の理解を西洋文化の枠組みに限定すること

2.3.4.2 節で述べたように、Kövecses (1991) は英語の「愛情」をメタファー理論の観点から分析し、その典型的モデルとしてロマンチック愛を提示している (p.78)。また、このモデルでは、相手に向けられる諸概念が「中心—周辺」の連続体として構成され、love は複数の関連概念のネットワークとして理解される。

具体的には、liking (好ましさ)、sexual desire (性的欲求)、intimacy (親密さ)、longing (切望)、affection (優しい思い)、caring (思いやり)、respect (尊敬)、friendship (友情) といった概念が、love を構成する関連概念として挙げられる。これらはその役割に応じて区別され、liking や affection が中心的な関連概念、caring がその中間、respect や friendship が周辺的な概念に位置づけられるとされる (Kövecses 1991: 86–88; 2000: 125)。

しかし、このような関連概念の配置が、他文化においても成立するかどうかは依然として疑問が残る。言い換えれば、このモデルは、西洋文化の価値観に強く依存した枠組みである可能性がある。

西洋文化そのものが自律した個人を重視する個人主義的・平等主義的価値観に支えられている点を踏まえると、そこで理解される「愛情」もまた、相手を「優れた存在」「唯一無二の個人」として評価することを前提とした感情として特徴づけられると考えられる (Lutz 1988: 145)。

実際、Lutz (1988: 145) や Averill (1985: 100–101) は、アメリカ文化における「愛」が理想化 (idealization) や称賛 (admiration) を本質的に伴うことを指摘し、特に Averill は「相手の理想化」「突然の感情の高まり」「生理的覚醒」「相手へのコミットメント」などの特徴を挙げ、これらが自律した個人同士の対等な関係という文化理念と深く結びついていると述べている (p.101)。

こうした文化的特徴は、Kövecses (1991, 2000) が提示する英語のモデルにおいて liking (好ましさ) が中心的な関連概念として位置づけられる点にも反映されており、西洋文化固有の価値観を強く内包した概念であることを示唆している。

したがって、Kövecses の提示する英語のモデルや関連概念の配置をそのまま他言語に当てはめると、各言語が固有にもつ愛の概念的特徴を十分に捉え損ねる可能性がある。

(II) 具体例：英語の love とベトナム語の thương における中心的関連概念の違い

こうした問題をより具体的に示すために、ベトナム語の事例を検討する。

越英辞書では一般に、ベトナム語の thương は英語の love に相当する語として記述されている (Từ điển Việt-Anh 『ベトナム語英語辞典』、p.721)

例(30a)と(30b)に見られるように、両語がいずれも対人的な感情であり、そうした感情があるからこそ「相手を大切にしたい」という caring の要素が生じる点が確認できる。

(30) a. 英語 : I love you. There's nothing I want to protect more than you. ¹⁹

b. ベトナム語 : Anh thương em. Không có gì anh muốn bảo vệ hơn chính em.

私 あなた ない もの 私 守りたい より あなた

しかし、このような思いやりの関連概念が共通していても、そのネットワークにおいて他の概念が中心となる度合いは両語で同一ではない。

実際、相手の特徴を根拠に感情を述べる場合、その特徴がどの関連概念として解釈され、どこに焦点が置かれるのかは両語で異なる。

まず、(31)では、相手について挙げられている特徴そのものが異なっている。(31a)は家族のために尽くしてきた「献身の行為」の特徴を示し、(31b)は「美しさ」や「勇気」といった相手の魅力・価値に関わる特徴を示している。(31b)に示される特徴は、Kövecses が英語のモデルで中心的な関連概念として挙げる liking に相当する。英語ではいずれの場合にも love が自然に用いられる。

(31) a. 英語 : I love you for everything you've made for our family.

b. 英語 : I love you for your beauty and your courage. ²⁰

¹⁹この例文は COCA コーパスから引用したものである。

²⁰この例文は COCA コーパスから引用したものである。

しかし、ベトナム語ではこの二つの特徴に対して *thương* が必ずしも両方に対応できるわけではない。

例えば、(32a)の場合では、「献身の行為」を理由とする場合には、*thương* が自然に用いられるが、(32b)のように魅力・価値を理由とする場合に *thương* を使うのは不自然である。この場合、(32c)に示したように、*yêu*（愛する）を用いる方が適切である。

- (32) a. ベトナム語 : Anh thương em vì những gì em đã làm cho gia đình mình.
私 君 ので 全部 君 した ため 私たちの家族
- b. ベトナム語 : (??) Anh thương em vì vẻ đẹp và lòng dũng cảm của em.
私 君 ので 美しさ と 勇気 の 君
- c. ベトナム語 : Anh yêu em vì vẻ đẹp và lòng dũng cảm của em.
私 君 ので 美しさ と 勇気 の 君

つまり、Kövecses が指摘する英語のモデルにおいて中心的な関連概念とされる(32b)に見られる「好ましさ」(liking) は、ベトナム語の *thương* においては必ずしも中心的な概念とはいえない。

同じ「愛している」という表現を用いる場合でも、その背後で中核となる関連概念がどれであるかは言語によって異なる。この違いは、文が伝える意味や受け手の感じ方にも影響を及ぼす。

2.5.2.2 NSM 理論の問題点

(I) 問題点：抽象化により、意味の核心が捉えられなくなる問題

最後に、「愛」に関する NSM 理論の問題点について整理する。

2.5.1.2 節で示したように NSM 理論は、普遍的意味素を用いた「簡約的言い換え」によって、感情語の記述可能なモデルとして提示する点に特徴がある。しかし、このアプローチは、過度な抽象化により語の核心的意味を再構成できなくなるという問題が指摘されている。特に Quinn (2015) は、Wierzbicka (1992b) が提示したイファルク語 *fago* の文化スクリプトが、普遍的意味素の制約ゆえに実際の語義を十分に反映していない点を強く批判する (pp.175-176)。

Quinn (2015) は、Wierzbicka (1992b) による fago の文化スクリプトが、NSM における意味素 think、feel、want などとその文法枠組みだけで構成されているため、語義の核心にある経験を表現できていないと具体的に批判している。

たとえば、fago の原因とその行為的側面を示す部分は NSM によって抽象的に次のように記述される (p.175)。

(33) a. something bad can happen to a person

b. someone wants to do something good for someone

しかし、Quinn によれば、イファルク語の something bad とは、死別や島外への移動による家族との分離、その差し迫った不安、病気・飢え・老いといった身体的脆弱性など、共同体の生活に深く関わる具体的な危機を意味する。これらの文脈依存的な経験は、NSM の抽象的な something bad では捉えられない。同様に、イファルク語の something good も、病人の看病、飢えた人への食物提供、弱った高齢者の介助といった直接的な身体的ケアを指すが、NSM では do something good と単純化され、その本質が見えなくなる。そのため、このような抽象化されたスクリプトは、イファルク語の人々自身にとっては fago の経験として認識しがたいものであり、語の意味構造に固有の文化的リアリティを十分に再現していないと Quinn は指摘している (p.175)。

このように、NSM では fago を成り立たせる文化的・身体的・情緒的側面が抽象的語彙に還元され、イファルク語の生活世界に固有の意味が失われてしまう。Quinn は、この過度な抽象化により Wierzbicka の文化スクリプトが「fago 意味にとって重要な部分がそぎ落とされ、過度に単純化されてしまっている。そのため、実際の姿を反映できず、棒人間のように本質をつかみ損ねている」のように本質を捉え損ねていると批判している (p.175)。

(II) 具体例：抽象化が捉えきれないベトナム語 thương の「傷を共有する」の特徴

こうした NSM の抽象化の問題点がどのように現れるのかをより具体的に示すために、以下ではベトナム語 thương の事例を取り上げる。

ベトナム語の thương は、相手の状況に「共感する」という意味を持っている。その背景には、thương が本来「傷」を意味する語源的起点から出発し、「相手の痛み (= 傷)

を感じ取る」という共感的意味へと発展してきた歴史がある（Đại Nam Quốc Âm Tự Vị 『大南國音字彙』 1895：429）。

たとえば、(34)では、*thương* が用いられることで、母親は息子が抱えている精神的な痛みを、自分自身の内側にも響く「傷」として感じ取っている。つまり、息子の困難を外側から観察するのではなく、それを自分の身体感覚に引き寄せて受け止めている点に、*thương* の特徴的な共感のあり方が表れている。

- (34) 【30歳の息子が投資詐欺で全財産を失い、生きる目的を見失ってから、毎日を遊んで過ごしている。母親として息子が心配だ。】

Tôi cảm - thấy thương thằng con trai của mình.

私 感じる-見える 傷 息子 の 自分

字句通りの逐語訳：私はその息子の傷を感じて見える。

ニュアンスを含めた訳：私は息子の心の傷を感じ、自分の傷のように受け止める。

しかし、仮に NSM のモデルを用いて記述すると、次のようになる。

- (35) (a) something bad happened to Y

(b) because of this, Y feels something bad

(c) if it happened to me, I would feel something bad

この記述は英語の *compassion*²¹ (2.4.2.2 節) とほぼ同じ形式になってしまうため、*thương* に特有の概念化、すなわち相手の痛みを自分の身体感覚として受け止める共感の特徴が十分に浮かび上がらない。結果として、*thương* の核心的な意味がモデルの中で他の共感語と同質化され、ベトナム語に固有の感情の捉え方が再現されにくくなる。

²¹ 英語語源辞書 Online Etymology Dictionary によると、英語 *compassion* は 14 世紀中頃に「苦しむ他者への深い思いやり」を意味する語として初出し、語源的にはラテン語 *compassio* (com 「共に」 + *pati* 「苦痛を受ける／耐える」) に由来する。特に *pati* は本来「身体的苦痛を受けること」を一次的意味とし、後に「精神的・情緒的な苦しみ」へ拡張した。この *pati* から派生した *passio* → *passion* は 12 世紀頃にはまずキリストの受難（肉体的苦痛）を指し、その後「激しい感情・情熱」へ転義した。したがって *compassion* には語源的に「他者の苦痛を共に受ける／共苦する」という身体的苦痛の共有という概念基盤があるが、現行の NSM モデルによって *compassion* を記述した場合でさえ、語の意味構造に内在する重要な特性を十分に捉えきれない。

また、例(36)では、相手がむしろ嬉しそうに振る舞っている場面でも、*thương* は使用できる。少女は貯金をすべて寄付するという利他的で温かい行動を取り、本人はむしろ楽しげにしているにもかかわらず、話者はその状況に触れて *thương* を感じている。

- (36) 【私たちが募金を募っていると、小学4年生の少女が貯金を全て持ってきて被災地の人々に寄付した。少女はお金を手渡す際、「少しでも困っている人たちの力になれば」と嬉しそうにしていた。私たちは少女が全てのお金を差し出したことが気にかかると同時に、その優しさに感動した。】

ベトナム語：Chúng tôi cảm-thấy thương tâm²² lòng của cô bé.

私たち 感じる-見える 傷 類別詞 内臓 の 彼女

字句通りの逐語訳：私たちはその子の内臓の傷を感じて見える。

ニュアンスを含めた訳：私たちはその子の思いやりの心の傷を感じ、自分の傷のように受け止める。

このような文脈では、少女に「悪いこと」は起きていないどころか、自ら「良いこと」をして喜んでいる。それにもかかわらず、話者はその行為を「痛み」を感じ取り、*thương* を用いて共感を表している。しかし、この状況を NSM のモデルに当てはめて記述しようとすると、次のような構造になってしまう。

- (37) (a) Y did something good

- (b) something bad happened to Y

すなわち、(a) Y did something good の直後に(b) something bad happened to Y を想定しなければならず、「良いことをして喜んでいる」少女の行為と「悪いことが起きた」という前提が連続することになり、この文脈とは根本的に矛盾する。さらにこの場面で *thương* が表す、話者が抱く共感の本質は、NSM の枠組みでは十分に説明しきれない。

²² *tâm* (類別詞)：薄くて長い平たいものを表す名詞につける。(Ngo 2014 : 188)

2.6 まとめ

本章では、感情研究に関する先行研究を整理し、生物学的アプローチ、社会・文化心理学的アプローチ、言語学的アプローチという三つの主要な方向性を明らかにした。生物学的アプローチは感情の普遍的身体反応を示し、社会文化的アプローチは感情が社会規範や対人関係に依存して成立することを示した。

さらに、言語学的アプローチ（Kövecses のメタファー理論、Wierzbicka の NSM 理論、人類学的研究）は、感情語の文化特異性を描き出す一方で、英語中心のモデルの偏りや、過度な抽象化によって意味の核心を捉えきれないという限界も明確になった。これらの問題点を踏まえ、次章では、ベトナム語 *giận* と *thương* の分析に適した、より柔軟で文脈依存性を扱える理論的枠組みを提示し、本研究が採用する分析方法を具体化していく。

第3章

理論的枠組み

3.1 はじめに

本章の目的は、Langacker (1987, 2008) の意味論および Levinson (1996) の空間認知理論を理論的背景として導入し、ベトナム語の感情表現を分析するための枠組みを整えることにある。

第2章で述べたように、感情表現の研究においては、Lakoff & Kövecses (1987) による概念メタファー分析や Wierzbicka (1992) の NSM (Natural Semantic Metalanguage) 理論をはじめ、身体経験や基本語彙にもとづいて感情の意味構造を説明しようとするアプローチが展開されてきた。これらの研究は、感情語が実際にはきわめて複雑で体系的な意味構造を備えていることを明らかにした点で重要であり、感情意味論の発展に対して重要な示唆を与えた。しかし、こうしたアプローチには身体経験への強い依拠や、意味を単一のモデルへと還元する傾向があり、ベトナム語の感情表現を十分に説明するには限界がある。

そこで本研究では、メタファー理論や NSM に基づく従来の枠組みに依拠するのではなく、Langacker の意味論の中核をなすドメイン、ドメインマトリックス、中心性といった概念、および Levinson の空間認知理論を手がかりとし、従来の分析では捉えきれなかったベトナム語の感情語の特徴をより精緻に記述することを目指す。

本章の構成は次の通りである。3.2 節では、認知意味論における概念化の考え方を導入し、言語的意味が認知主体の経験や文脈に基づいてどのように構成されるかを確認する。3.3 節では、Langacker (1987) のドメイン概念に基づき、基本ドメイン・非基本ドメイン、ドメインマトリックス、中心性といった枠組みについて述べる。3.4 節では、Levinson の空間認知理論における「視点の選択」を取り上げ、感情表現に適用しうる分析枠としての可能性を検討する。

3.2 概念化

認知意味論以前の意味分析は、意味を解釈する認知主体をできるだけ排除しようとする傾向が強かった。これは、認知主体が言語分析に関与すると、客観的かつ科学的な分析が妨げられると考えられてきたためである (碓井ほか 2021 : 44)。

しかし、Langacker (2008 : 35) は、私たちが世界を理解する過程は「能動的・動的・構成的」であり、言語の意味は外界をそのまま写し取ったものではないと述べている。すなわち、言語表現が喚起する意味は、客観的状況から自動的に導かれるものではなく、人間がもつ想像力や心的構築によって大きく形づくられる。そのため、意味を理解する際には世界がどのように捉えられ、言語化されているのかを考えることが重要である。

この意味観を支える中心的な概念が、Langacker のいう「概念化」である。Langacker (2008 : 15) は、意味とは「言語的目的のために利用される概念化」であり、特にそれが言語表現の意味として機能すると述べている。つまり、言語の意味は、話者が用いる概念化によって成立するものとして捉えられる。

- (1) “Semantic structures are conceptualizations exploited for linguistic purposes, notably as the meanings of expressions.” (Langacker 2008 : 15)

さらに、Langacker (2008 : 30) は、「概念化」を「心的経験のあらゆる側面を含む広範なプロセス」として位置づけている。Langacker によれば、概念化とは決して知的・抽象的な操作だけを指すものではなく、感覚的・運動的・情動的な経験、さらには物理的・言語的・社会的・文化的な文脈の把握までも含み込む、きわめて包括的な心的活動である。また、概念化は一度に固定的に与えられるものではなく、時間の流れの中で徐々に展開し、変化していく動的な理解の過程であると述べられている。

- (2) “Conceptualization is broadly defined to encompass any facet of mental experience.

It is understood as subsuming :

1. not just ‘intellectual’ notions, but sensory, motor, and emotive experience as well;
2. apprehension of the physical, linguistic, social, and cultural context; and
3. conceptions that develop and unfold through processing time(rather than being simultaneously manifested).” (Langacker 2008 : 30)

こうした「時間的に展開する」概念化の特徴は、Langacker (2008 : 32) が示す次の例にも明確に現れている。

- (3) a. A line of trees extends from the highway to the river.
b. A line of trees extends from the river to the highway.

(Langacker 2008 : 32)

(3)の二文は同一の状況を記述しているものの、話者が心的に「木の列をどの方向へ走査するか」が異なるため、喚起される概念化も微妙に異なる。つまり、意味は外界の写像ではなく、処理の時間を含む心的構築の違いによって形成される点に、概念化の動的性質が示されている (p.32)。

また、Langacker は、意味が常に変化しうる「動的な側面」をもつことを認めつつも、言語表現の意味が「その都度ゼロから交渉される完全に流動的なもの」ではないとも述べる。すなわち、語には話者共同体によって慣習化された安定的な部分が存在し、それが理解の出発点となる。一方で、実際の用法においては、文脈や相互行為の中で意味が柔軟に調整・構築されていく (p.31)。

次の節では、Langacker の意味論における重要概念の一つである「ドメイン」を取り上げ、これが意味理解を支える認知的枠組みとしてどのように機能するかを検討する。

3.3 ドメイン

Langacker (1987) は、語の意味がどのような認知的背景 (ドメイン) に基づいて成立するのかを体系的に論じている。彼によれば、語や表現の意味単位 (semantic units) は認知ドメインとの関係において特徴づけられ、「いかなる概念や知識体系もドメインとして機能しうる」と定義される (Langacker 1987 : 63)。ここでいうドメインとは、語の意味を理解するための前提となる経験的・知識的領域であり、物理的な空間、色彩、社会的知識、文化的背景など、多様な範囲に及ぶ。

- (4) “...semantic units are characterized relative to cognitive domains, and...any concept or knowledge system can function as a domain for this purpose.” (Langacker 1987 : 63)

Langacker は、このドメインを大きく基本ドメイン (basic domains) と非基本ドメイン (non-basic domains) に分けて説明しており、これらは語の意味構造を理解するうえで重要な概念となる。

3.3.1 基本ドメインと非基本ドメイン

Langacker (1987 : 147) は、語の意味を特徴づける認知的背景であるドメインを体系的に分類し、その中でも特に、他の概念に還元できない原初的な認知領域を基本ドメインとして区別している。基本ドメインとは、人間の知覚や感覚経験に直接基づく最も根源的な意味の基盤であり、すべての概念的意味の出発点をなす。

Langacker (1987 : 149) は、私たち人間が世界をどのように感じ取り、理解するかという感覚のしくみそのものが、基本ドメインを構成していると述べている。つまり、言葉の意味の背景には、私たちが日常的に経験する視覚・聴覚・触覚などの感覚的基盤が存在するという考え方である。たとえば、視覚には、二次元・三次元の空間の広がりや色を認識する力と、色の違いを識別する力がある。聴覚には音の高さを基準とした知覚があり、触覚には温度、圧力、痛みといった感覚のスケールが存在する。さらに、味覚や嗅覚、身体の動きを感じる運動感覚、そして人の心の動きを伴う情動的経験なども、それぞれ独立したドメインとして考えられる。

Langacker は、これらの感覚ドメインは互いに関連しているものの、ひとつの感覚を別の感覚で置き換えることはできないと強調している。たとえば、「味」を空間の広がりや時間で説明したり、「時間」を色の変化で表したりすることはできない。このように、各感覚ドメインはそれぞれ固有の次元をもち、他のドメインに還元することができない。これが Langacker のいう「還元不可能な経験ドメイン」である (p.149)。

さらに、Langacker (1987 : 147-148) は、多くの概念が他の概念を前提として定義されることを指摘している。たとえば、「指の関節」という概念は「指」を前提とし、「指」は「手」を、「手」は「腕」を、そして「腕」は「身体」をそれぞれ前提としている。しかし、「身体」をさらに上位の概念で説明することはできない。Langacker によれば、身体の形や構造は、三次元空間というより基礎的な表象領域を前提にしており、この空間こそが基本ドメインの一例である。

このように、基本ドメインとは、感覚経験に基づく原初的で還元不可能な認知領域であり、語や概念の意味はこれらのドメインに依拠して形成される。一方、これらの基本ドメインを基盤として新たに構築される高次の概念的領域が、次に述べる非基本ドメイン (non-basic domain) である。

Langacker (2008 : 45-47) は、私たちが日常的に用いる概念の多くは基本ドメインではなく、より複雑な認知的領域に属する非基本ドメインであると述べている。基本ドメインが感覚経験に基づく原初的な認知領域であるのに対し、非基本ドメインはそれらを基盤として成立する高次の概念領域であり、言語的意味の多くはこの層に依拠している。

非基本ドメインには、感覚的・情動的・運動的な経験（たとえば「濡れている感覚」や「恐れの中の感情」「風船を膨らませる行為」など）だけでなく、抽象的な思考の産物（「正義」「脊椎動物」「打率」など）も含まれる。また、瞬間的に意識に浮かぶ単純なイメージ（たとえば円の像）のほか、時間的な処理を経て段階的に理解される複雑な構造（料理の手順や計算過程など）も、すべて非基本ドメインとして機能する。つまり、言語的意味を構築するうえで利用可能なあらゆる概念的領域は、非基本ドメインとして捉えられる（p.45）。

非基本ドメインの複雑さには段階があり、単純な概念（「赤」など）から、より構造化された知識体系（「人体の構造」「野球に関する知識」など）まで多岐にわたる。これらのドメインは階層的に組織されており、上位の概念は下位の概念を前提として成り立っている。たとえば、「リンゴ」という概念は「赤」という色彩の知識を含み、「首」は「身体全体の形状」に関する知識を前提とする。また、「打率」は算術的知識と野球に関する知識の両方を必要とする。このように、非基本ドメインは複数の下位概念を統合しながら、より高次の概念的構造を形成する（p.45）²³。

要するに、非基本ドメインとは、基本ドメインを土台として発展した高次の認知領域であり、人間の社会的・文化的経験や知識体系を反映するものである。これらのドメインは言語意味の多様性と文化的差異を支える重要な基盤であり、次節で述べるドメインマトリックスにおいても中心的な役割を果たす。

3.3.2 ドメインマトリックス

一つの語や概念の意味が複数の異なるドメインにまたがって構成される場合、Langacker (2008:27) はその複合的な認知的基盤をドメインマトリックス (domain matrix) と呼んでいる。

²³ これらの非基本ドメインは、Fillmore (1982) の「フレーム」、あるいは Lakoff (1987) の「理想化された認知モデル (ICM)」に相当する (Langacker 2008 : 46)。

ドメインマトリックスは、語や概念が意味を持つための知識的土台として機能し、多面的で複雑な意味の広がりを支える。意味解釈において関係しうるドメインは、理論的には開かれた集合（open-ended set）であり、複数の認知的背景が文脈や使用目的に応じて動的に再構成されるものとして理解される（p.47）（図 2）。

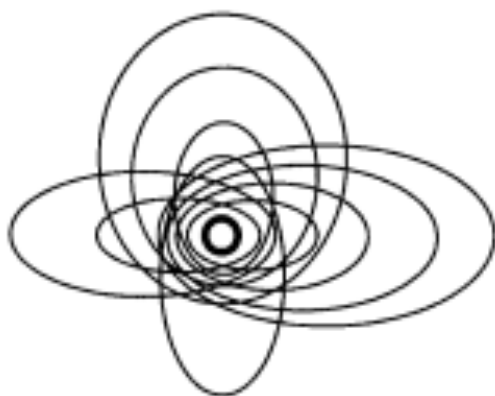


図 2：ドメインマトリックス（Langacker 2008：48）

たとえば、英語の **knife**（ナイフ）という語は、その意味を理解するために複数の異なるドメインを必要とする（Langacker 1986：5）。少なくとも以下のような主要なドメインが関与している（図 3）。

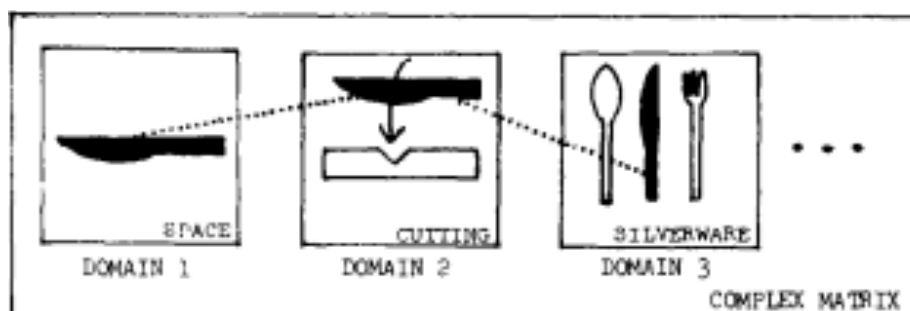


図 3：英語の **knife** のドメインマトリックス（Langacker 1986：5）

第一に、「形状ドメイン」では、ナイフの刃の形状や長さ、全体の構造といった物理的特徴に関する知識が関与する。これらはナイフ自体の内的属性に関わっており、物としてのナイフの姿を思い浮かべる際の基盤となる（p.5）。

第二に、「機能ドメイン」として、ナイフが物を切るための道具であるという典型的な使用目的が含まれる。このドメインは、ナイフが人間や他の対象とどのように相互作用するかという行為との関係に焦点を当てるものである。つまり、ナイフを単なる形ある物体としてではなく、何かに使われる道具として捉える視点である (p.5)。

第三に、「文化的ドメイン」では、ナイフが食卓においてフォークやスプーンなど他の食器とともに使われるという文化的背景が重要になる。このドメインでは、ナイフの社会的役割や使用習慣に関する知識が意味解釈に影響を与える。たとえば、西洋の食事文化における「シルバーウェア」の一部としてのナイフの理解が挙げられる (p.5)。

ナイフに関する知識には他にもさまざまな要素が含まれる。しかし、これらすべての要素が同じ重要性を持っているわけではない。つまり、ドメインマトリックスに含まれる各属性は一樣ではなく、その意味解釈への貢献度には違いが存在する。この違いを理論的に捉える枠組みとして、「中心性」(centrality) の概念が重要となる。

3.3.3 中心性

ドメインマトリックスに含まれる複数の属性や知識要素は、すべてが同等の役割を果たしているわけではない。Langacker (1987 : 159) の立場によれば、それぞれの要素には活性化のされやすさや意味解釈への寄与の度合いに違いがあり、あるものはより「中心的」で、別のものは「周辺的」とされる。ある特徴は非常に重要で頻繁に思い浮かべられるのに対し、他の特徴はあまり意識されないこともある。このように、それぞれの特徴は「中心性」(centrality) の度合い、つまりある場面でその特徴がどの程度活性化されやすいか、において大きく異なる。

中心性の度合いは、ある属性がどれほど容易に活性化されるか、つまり語の使用時に自然に想起されやすいかによって決まる。Langacker (1987) によれば、中心性は主に四つの要因によって左右される。すなわち、話者間で広く共有される慣習性、多くの事例に共通する一般性、対象の本質に関わる内在性、そして他の概念との差異を示す特徴性である (p.159)。

たとえば、図2の knife という語において、「刃の形状」や「物を切るという機能」は、ナイフという道具の存在を支える基本的な属性であり、言語使用においても頻繁に活性化される。これらは、慣習性・一般性・内在性・特徴性のいずれの観点からも高く評価されるため、意味構造における中心的要素とみなされる。一方で、「サーカスでのナ

「ナイフ投げ」や「ナイフの製造方法」などは、文脈によっては活性化されるものの、日常的な意味理解においては周辺的とされ、中心性は相対的に低い。このように、語の意味に関わるさまざまな属性は、中心性の度合いにおいて差があり、それぞれの属性の活性化のしやすさは、複数の要因の組み合わせによって決まるのである。(Langacker 1986 : 5)

この見解の主旨は、中心性の連続体の中の特定の地点を恣意的に選んで「この線より上は言語的に意味がある、下は意味がない」と線引きすることが不可能であるという点にある。実際の研究においては、当然ながら、研究者はより中心的な属性に焦点を当てることになる。この立場は、ある対象についてのあらゆる知識を言語分析の前提として記述しなければならないと主張するものではない。どの要素を、どこまで取り扱うかは、分析の目的に応じて決定される (Langacker 1987 : 159)。

このように、Langacker の理論では、語の意味は複数の認知的領域 (ドメイン) に基づいて構成され、それぞれの要素は中心性の度合いに応じて意味解釈に寄与する。

ところが、意味の構成はこれらの知識要素の活性化にとどまらず、話者が状況をどのように捉え、どのような視点から言語表現を構築するかという、より動的で主観的な側面も無視できない。特に感情表現のように主観性の強い領域では、話者と対象との心理的距離や視点の選択が、意味の理解や解釈に大きく影響を与える。

次節では、このような視点の投射や共感的立場の選択が言語にどのように表れるかを、Levinson (1996) の空間認知の理論に基づいて考察する。

3.4 視点の選択

視点は、認知意味論における意味構築の過程において、重要な構築操作のひとつである。特に空間的表現においては、視点の取り方が意味解釈を大きく左右することが知られており、話者の身体的な位置や知覚的な方向性が表現選択に反映される。しかし、視点の概念は空間的領域に限らず、知識、信念、感情、さらには文化的背景といった非空間的領域にも広く関わっている。言い換えれば、私たちが何かを捉えるとき、その捉え方は常に「どこから、どのように見るか」という認知的な立場＝視点に依存している (Croft et al. 2004 : 58)。

本節では、「視点の選択」という認知的態度に注目する。Langacker の理論でも視点の概念は重要視されているが、本研究では Levinson (1996) の空間認知枠組みを手がかり

りに、話者がどの立場から状況を捉えるかという共感的視点の選択が、感情語の意味構築にどのように影響を及ぼすかを考察する。

Levinson (1996) は、空間に関連する語彙や表現が、単なる語の違いにとどまらず、文化ごとに異なる認知的枠組みを反映していることを強調している (Levinson 1996 : 376-377)。すなわち、空間情報をどのように把握し、構造化するかというプロセスそのものが、言語に現れるという立場である。これは、言語表現の背後にある認知的基盤や、文化固有の空間的思考がどのように表現選択に影響するかを再検討する必要性を示唆している。Levinson は、空間の認識に関して、以下の三つの座標系 (Frames of Reference) を提示している。

(I) 絶対的枠 (Absolute Frame of Reference)

まず、絶対的枠とは、固定された方向や基準 (例：北・南・東・西・山の上/下・海側/陸側など) を用いて空間関係を記述する枠組みである。この枠組みでは、観察者の視点に依存せず、外部の基準 (allocentric system) に基づいて空間関係が認識される (pp.371-373)。

例えば、オーストロネシア語族のいくつかの島嶼言語では、季節風の方角に基づいて「東-西」という絶対的な軸が固定されている。また、それとは別に「山側/海側」といった空間の対比も使われており、話者が島内を移動しても表現の意味は変わらない。これは、空間表現が話者の視点に依存せず、自然環境に基づく外部の基準により構成されていることを示している (p.372)。

(II) 内在的枠 (Intrinsic Frame of Reference)

次に取り上げるのは、「内在的枠」と呼ばれる空間の捉え方である。これは、対象物そのものがもつ固有の構造や機能を基準として、位置や方向を認識・表現する枠組みである。この枠において重要なのは、空間関係が観察者の視点に依存せず、あくまで対象物の内在的な特徴に根ざして捉えられる点である (p.366)。

たとえば、(5)の *in front of the TV* (テレビの前) においては、「前」という位置は観察者の立場によって決まるのではなく、テレビ画面が視聴者に向けて情報を発信する側＝映像を見る側が「前」とされる。同様に、(6)の *in front of the steps* (階段の前) では、「前」とは階段を上り始める側、つまり階段の進行方向を想定したときの入口側を意

味する。また、(7)の in front of the church（教会の前）の場合には、教会という建物における正面玄関側が「前」と見なされており、建物の設計上の正面性が空間表現に反映されている。このように、内在的枠における空間理解は、観察者の視点とは独立して、対象物が持つ固有の構造・機能・方向性に根ざしているのが特徴である（pp.366-368）。

(5) in front of the TV（テレビの前）→画面が提供する視聴位置に基づく

(6) in front of the steps（階段の前）→階段が提供する昇る方向に基づく

(7) in front of the church（教会の前）→建築物が提供する入館方向（玄関の位置）に基づく

（Levinson 1996 : 368）

（III）相対的枠（Relative Frame of Reference）

最後に取り上げる相対的枠は、対象物の構造や機能を基準とする内在的枠とは対照的に、観察者（話者や聞き手など）の視点を基盤とした空間認識の枠組みである。この枠では、物体間の位置関係は、観察者の立ち位置や身体の向きに依存して決定される。そのため、同一の場面においても、観察者が置かれる位置によって空間の捉え方が変化する可能性がある。この相対的枠では、「誰の視点を採用するか」という視点の選択が重要となる（pp.369-371）。

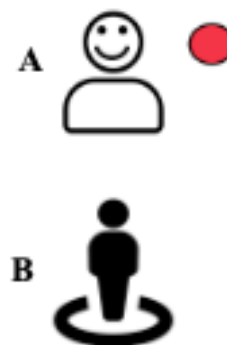


図 4：視点の選択による
空間認知の違い

図 4 において、人物 A の横に黒い点（物体）が配置されている。このとき、B にとって黒い点の位置をどのように捉えるかには、少なくとも 2 通りの可能性がある。

次の図 5 では、それぞれの視点の取り方に基づく解釈の違いを示す。

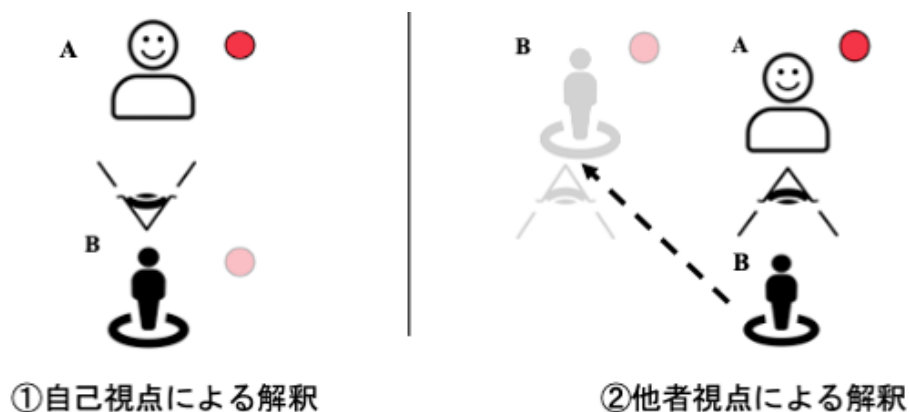


図 5：自己視点と他者視点に基づく空間の捉え方（Levinson：1996 を参考に作成）

①自己視点による解釈（図 5 の左）

まず、B が自分の立ち位置と身体方向を基準として空間を認識する場合、黒い点は A の「右側」にあると解釈される。このように、B が自己中心的な視点（egocentric view）を採用すると、他者である A の視点は空間理解に反映されない。そのため、(8)のように表現できる。

(8) （B が話者）「黒い点は A の右にある。」

② 他者視点による解釈（図 5 右）

一方、B が A の立場に立ち、仮想的に A の視点を共有する場合、黒い点は「A の左側」にあると解釈される。このとき、B は自分の身体的立場を一時的に離れ、他者視点に寄り添って空間を理解していることになる。その結果、(9)のようになる。

(9) （B が話者）「黒い点は A の左にある。」

このように、相対的枠では誰の視点を採用するかによって、空間的な認識が大きく変化する。同一の位置関係であっても、自己視点か他者視点かの選択によって、意味の構成が異なるという点に本枠組みの特徴がある²⁴。

²⁴Kuno & Kaburaki (1977) は、Levinson と同様に視点を扱うが、問題にするのは空間的な視点ではなく、文法現象を左右する「話者が出来事のどの人物に心的に寄り添って描写するか」と

空間認知における視点の選択は、単に物理的な位置関係の記述にとどまらず、話者が自らの立場をいかに相手や状況に重ね合わせるかという認知的な態度を反映している。そしてこのような共感的な立場の投射は、感情表現においても同様に、意味の構成や解釈に深く関与する要因となりうる。

3.5 感情語の意味構造をドメインマトリックスとして捉える

すでに第2章で述べたように、従来の欧米的な感情観では、感情は主に個人の内的な心理状態を表すものとされ、内省的な側面に重点が置かれてきた。しかし、この見解はアメリカ文化特有の民族心理学的枠組みや言語使用に根ざしていることが、Lutz (1982) によって指摘されている。

このような背景を踏まえると、感情を単なる一時的・生理的反応として理解するのではなく、より広範な認知的・社会的・文化的文脈の中で捉える必要がある。実際、Markus & Kitayama (1991) や Lutz (1988) などの研究でも、感情は生理的反応に加え、対人関係や社会的知識など、複数の側面が相互に関与する多次元的な概念であることが示されている。

たとえば「怒り」という感情には、

- (10) 何に対する感情かという自己認識的要素、
 - (11) 誰に向けられるかという対人関係的構造、
 - (12) その反応が社会的・文化的にどのような意味を持つか
- という規範的側面が関与している。

このように、感情には「身体性」や「関係性」「文化的価値観」など複数の認知ドメインが複雑に重なり合っており、文脈によって活性化される要素も異なる。さらに重要なのは、これらのドメインが常に同等に扱われるわけではなく、どの側面がより強く前景化され、どのドメインが中心的な役割を担うかは言語・文化によって異なり得る点である。

いう共感の向け先 (=camera angel) である。この視点の取り方が、能動・受動や主語選択といった統語的振る舞いに影響するとされる。例えば、同じ出来事であっても John hit Mary が客観的な描写 (カメラが両者から距離を置く) のに対して、John hit his wife では、話者の視点が John 側に寄り添って、Mary を his wife と呼ぶことでカメラアングルの違いが現れている (p.627)。

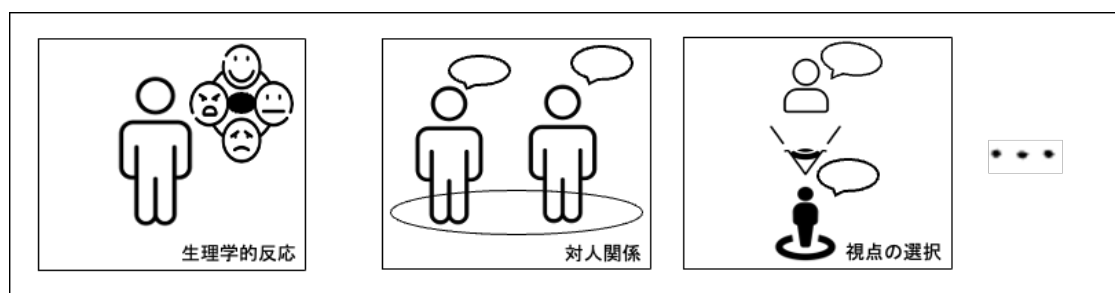


図 6：感情のドメインマトリックス

(Langacker 1986 を参考に作成)

認知意味論の立場から見ると、言語の意味は単なる外界の写しではなく、話者が自身の経験・知識・価値観、そしてその時々状況を通して世界をどのように概念化しているかに依存する。したがって、感情の概念化のあり方も文化的世界観や価値観を反映し、それが各文化の言語表現に現れると考えられる。

特に文化間比較においては、生理的反応の捉え方だけでなく、感情語がどのような社会的・対人的状況で使用されるのかという語用的側面にも注目する必要がある。たとえば、「怒り」の表出についても、ある文化では親しい相手とそうでない相手への表現に明確な区別がある一方、別の文化ではその差が存在しない場合がある。

こうした観点から本研究では、感情語を「身体的反応」や「心理状態」などの単一の側面に還元するのではなく、複数の認知的背景（ドメイン）が相互に作用して意味を形成するドメインマトリックスとして捉える枠組みを採用する（図 6）。第 4 章から第 7 章にかけては、この枠組みに基づき、自由記述調査・例文作成調査・コーパス資料を組み合わせ、ベトナム語の感情語 *giận* および *thương* と英語の *angry* と *love* を対象とする対照分析を行う。

第 4 章では、*angry* と *giận* を取り上げ、これらの感情語がどのような対人関係で用いられやすいのかという使用傾向と、その語用的特徴に焦点を当てる。第 5 章では、そうした対人関係のドメインが感情語の意味解釈や用いられ方にどのような影響を及ぼすのかを明らかにする。第 6 章では、*love* と *thương* を対象とし、Langacker (2008) のドメイン理論における「中心性」の概念を用いて、各感情語についてどのドメインがどの程度中心的な役割を果たしているのかを検討する。さらに、第 7 章では、Levinson (1996) の「認知的視点」の枠組みを用いて、*thương* が表す感情について、話者がいかなる視点から状況を捉えるときにその感情が成立するのかを明らかにする。

3.6 まとめ

本章では、本研究の理論的枠組みとして、認知意味論の基本的考え方を整理した。Langacker のドメイン理論を通じて、語の意味が複数の認知的背景（ドメイン）に基づき構成されることを確認し、Levinson の空間認知理論をもとに、意味構築における視点選択の重要性を示した。さらに、感情を身体的・社会的・文化的側面を含むドメインマトリックスとして捉える立場を採用し、感情語の意味が多層的かつ文脈依存的に形成されることを示した。これらの理論的枠組みは、次章以降のベトナム語感情語 *giận* と *thương* の分析の基盤となる。

第4章

angry と giận の使用文脈の比較

4.1 はじめに²⁵

本章では、論点①「感情語の意味解釈における文脈の重要性」に着目し、英語 **angry** とベトナム語 **giận** の語用的特徴を比較することを目的とする。

第2章で述べたように、各言語文化における「怒り」の概念化は、生理的反応を基盤としたメタファーによって説明する方法が多く注目されてきた (Lakoff & Kövecses 1987, Matsuki 1995 など)。ただし、実際の使用や解釈には対人関係や状況といった文脈的要因も関与するため、この点はメタファー研究では十分に扱われてこなかった。

英越辞書では一般に、英語の **angry** はベトナム語の **giận** に相当する語として記述されている (Từ Điển Anh Việt [Vietnamese–English Dictionary], p.53)。しかし、辞書上の対応だけでは両語の意味構造や使用文脈を十分に捉えられない可能性がある。

本章では、自由記述調査・文完成課題・コーパスデータの三つの資料を用いて **angry** と **giận** の使用文脈を比較し、両語がどのような対人関係・状況の下で成立しやすいのか、そしてその背景にある関係性の違いを明らかにする。

- (i) 自由記述による感情エピソードの収集：英語話者とベトナム語話者に対し、**anger**²⁶と **giận** となる出来事や状況を自由記述形式で収集し、両言語文化における怒り経験の語り方の特徴を検討する。
- (ii) 文完成課題による例文作成調査²⁷：英語母語話者とベトナム語母語話者を対象に **angry** と **giận** を含む文完成課題を実施し、怒りの原因の焦点化と後続反応の傾向を比較する。
- (iii) コーパスデータ分析：実際の言語使用例に基づき、両言語における **angry** と **giận** の使用傾向および近接して起きる語句の特徴を明らかにする。

²⁵ 本章は、Doan (2023, 2024) の議論に大幅な加筆および修正を施したものである。

²⁶ 調査(i)では、感情経験の語りを引き出すために、名詞の **anger** を用いた。他方、ベトナム語の **giận** は名詞として用いる場合でも同じ形で指示できるため、同語を提示した。

²⁷ なお、調査(i)および(ii)はサンプル数が限られているため統計的な一般化を目指すものではなく、各言語文化における「怒り」の語りや感情表現の一般的な傾向を明らかにし、調査(iii)の詳細な分析のための基礎資料とすることを目的とする。

本章の構成は次の通りである。4.2 節では、自由記述調査に基づき、英語の **angry** とベトナム語の **giận** がどのような出来事・状況として語られるのかを比較し、怒り経験の語り方の特徴を明らかにする。4.3 節では、母語話者による文完成課題の結果をもとに、怒りの原因の焦点化と後続反応の傾向を検討する。4.4 節では、コーパスデータから両語が実際の文脈においてどのような対象や語句と共起しやすいのかを分析する。4.5 節では、本章のまとめを示す。

4.2 調査 (i) : **anger** と **giận** の感情経験の自由記述

調査(i)では **anger** と **giận** という感情語が話者にどのような「怒り」の出来事・状況を想起させ、どのように語られるのかを明らかにすることを目的として、自由記述課題による予備調査を実施した。

【参加者】：英語母語話者 2 名、ベトナム語母語話者 3 名。

【実験の流れ】：各参加者には Google Form を用いて、「親友に自身の体験を打ち明ける」という状況を想定した上で、「怒りを感じた出来事」について、できるだけ具体的に母語で記述してもらった。記述内容には、怒りを引き起こした対象（人や状況）、そのときの感情的・身体的反応、取った行動などを含めてもらった。また、実体験に限らず創作エピソードでも回答できることを示し、自由な語りを促した。

【分析観点】：代表的なエピソードについて、以下のような観点から、語りの構成や感情表現の特徴を比較的に検討した。

- 怒りの原因の語り方
- 語りの中心（出来事／相手／関係性など）
- 感情に伴う行動・意図の表現

【結果】：次の表 6 では、言語ごとの代表的なエピソードを示す。なお、ベトナム語話者の記述はすべてベトナム語で回答されたが、本稿では分析の便宜上、筆者により英訳されたものを用いている。

表 6 : 母語話者による angry と giận のエピソード (強調は筆者による)

40 代のアメリカ人男性
“My coworker who is Japanese asked me about a student that was supposed to start a new class the following week. I said next week is impossible to start because the textbook we will use won't arrive in time. The student can't start next week, in two weeks can start. The coworker asked me again. I gave the same reply. I was asked can't the student start anyways, I said no. This went on several more times. I was getting upset. I thought it was insulting to me to be asked the same question over and over. I was confused and frustrated why I was asked the same thing so many times. Why ask me the question if you don't value my opinion. My tone of voice changed as I was getting upset. The next day my coworker said the student will start in two weeks. It was no problem. I think it was a cultural issue. My coworker didn't want to tell me directly and I didn't read the signs being sent to me. ”
20 代のベトナム人男性
“I don't have a close friend, so I'll write a story about a family member I consider my best friend. She and I quarreled in the night just before New Year's countdown only 3 hours left. The problem of giận nhau (giận + mutual) was only a tiny thing, but no one gave up. Hence, it became a big deal and brought me a horrible experience after 25 years of living in this world. It started when I asked that person to help me do something. Still, instead of talking softly, she suddenly raised her voice at me, even though I said it a second time in a very soft voice, hoping she would calm down. “Calm down and talk softly,” but it doesn't work. And now I couldn't keep my composure, and we started talking loudly to each other. As a result, one person cried, and the other left just 2 hours before New Year's Eve.”

【考察】：両エピソードはいずれも「特定の相手に対する不快感」を含む点は共通しているが、感情の向け方・出来事の捉え方・語りの焦点には明確な違いがみられる。angry の語りでは、自分の感情・判断・体験の主観的側面に焦点が置かれ、語りの中心が「私」(I) に位置づけられている。一方、giận の語りでは、相手との関係の変化ややり取りの過程が物語の中心に置かれ、怒りが生じた背景として「関係のすれ違い」が強調される。これらの傾向については、表 7 と表 8 で詳細に検討する。

表 7 : angry のエピソードの特徴

観点	アメリカ人男性 (40 代)
場面	語学学校で日本人の同僚と新しいクラスの開始時期について相談。教材の到着遅延により開始は困難と説明したが、同僚から何度も「開始できないか」と質問され続けた。
原因	同じ質問を繰り返され、自分の意見・判断が軽視されている／尊重されていないと感じたこと。 例 : I thought it was insulting to be asked the same question over and over.
感情の焦点	自分の不快感・困惑・怒りに強く焦点。 例 : I was getting upset. I was confused and frustrated why I was asked the same thing...
表現の特徴	一人称の頻繁な使用 : I (13 回)、me (4 回)、my (3 回)。 語り全体が I said / I gave / I thought / I was getting upset など 「自分」を主語とする叙述で構成される。 一方、同僚の描写 (coworker) は語り冒頭の 2 回のみで、その後は相手より自分の内的経験に焦点が移行。
望む結果	自分の判断 (教材未到着＝開始不可) が理解・承認されること。 最終的に the student will start in two weeks となり納得。
物語の志向	個人の判断・自律性の正当性を主張する「个人中心」の志向が強い。

英語話者のエピソードでは、怒りの原因は「自分の意見・判断が尊重されないこと」に置かれ、感情の焦点は一貫して自分の不快感や困惑に向けられている。語りでは一人称表現が頻出し、出来事の説明や感情・反応が自分を主語として述べられることが特徴的である。また、望む結果としては「自分の判断が理解・承認されること」が示されており、物語全体が個人の立場や判断の正当性を中心に展開している。

続いて、ベトナム語話者による *giận* のエピソードについても検討する。

表 8 : giận のエピソードの特徴

観点	ベトナム人男性 (20 代・母語ベトナム語)
場面	大晦日の時、自宅で家族 (親しい家族) とのやりとり。 カウントダウン直前に口論となった状況。
原因	些細なことで依頼した際、相手が突然声を荒らげたことが発端。 その後、双方が冷静になれず giận nhau (giận+「互い」) 状態に発展。 例 : She suddenly raised her voice... and we started talking loudly to each other.
感情の焦点	「自分」ではなく「相手と自分の関係」の緊張・衝突に焦点。 相互の感情の高まり・すれ違いが中心となって語られる。 例 : She and I quarreled in the night just before New Year's countdown only 3 hours left. The problem of giận nhau (giận + mutual) was only a tiny thing, but no one gave up.
表現の特徴	we / she / that person など複数の人物を主語にし、 双方の行動・反応・感情の変化を記述。 family member / best friend など親密な関係性を示す語彙が頻出。
望む結果	結果の明示はないが、 関係の乱れが残ることへの違和感・苦しさを感じ込む。
物語の志向	個人ではなく関係全体に価値を置く「関係中心」の志向。 相手とのやりとりの過程と感情の変化が物語の核となる。

英語話者の angry が自分の気持ちに強く焦点を当てているのに対し、ベトナム語話者の giận は相手との関係ややりとりに重きが置かれている。giận の語りでは、怒った理由やその後の出来事が「二人の関係の中」で説明され、相手と自分の気持ちの変化が詳しく語られる。また、出来事の結果として関係が乱れ、気まずさや距離が生まれる様子が語られる点も特徴である。

以上の予備的分析から、英語話者とベトナム語話者の「怒り」に関する語り方や意味づけについて、次の二つの理論的含意を導き出すことができる。

【理論的含意】

本節の調査結果から、英語母語話者とベトナム語母語話者は、いずれも不快な感情を語っている点では共通しているものの、その感情がどのように理解され、語りの中で何が中心に置かれているのかには違いが見られた。こうした語り方の違いは、両言語の母語話者が **anger** と **giận** を同一の「怒り」としてではなく、それぞれ異なるあり方の感情として理解している可能性を示唆している。すなわち、感情をどのように概念化するかという点で差異が存在する可能性がある。

Langacker (1987 : 35) が述べるように、意味とは客観的状況をそのまま反映するものではなく、話者が状況をどのように概念化し、どのような表現を選択するかによって構築される。この観点に立てば、本節で推測された概念化の差異は、実際の言語使用の中にも反映されると考えられる。したがって、その概念化のあり方をより精確に把握するためには、感情語が実際の言語使用の中でどのように用いられているのかを詳しく調べる必要がある。

次節では、先述の二つのエピソードにおいて確認された特徴が、より制御された条件下においても見られるのかを検証するため、予備調査(ii)として文完成課題を実施する。

4.3 調査 (ii) : **angry** (形容詞) と **giận** (動詞) を用いた例文作成

本節では、4.2 節で示唆された語りの傾向、特に **angry** と **giận** に見られた概念化の違いが、より制御された条件下でも再現されるかを検証するため、感情語を含む文完成課題による調査を行った。

【目的】：英語の **angry** とベトナム語の **giận** に焦点を当て、怒りの「原因」と「反応」がどのように表現されるかを比較する。

【参加者】：英語母語話者 8 名 (アフリカ系およびヨーロッパ系アメリカ人、10～50 代) とベトナム語母語話者 8 名 (いずれも 20 代)。

【課題の流れ】：各参加者には、それぞれの母語に対応した形式で、感情語 **angry/giận** を含む例文を作成してもらった。文の形式は以下の通りである。

(1) 英語 : I was angry that (原因) , so I (反応) .

(2) ベトナム語 : Tôi giận vì (原因) , nên tôi (反応) .

私 ので だから 私

【分析観点】：収集した例文は、以下の三つの観点から分析を行った

- 怒りの原因のタイプ（例：個人の権利侵害／信頼関係の破綻など）
- 感情対象の明示性（対象が具体的に言及されているかどうか）
- 反応行動のタイプ（対立的／受動的など）

【結果】：表 9 および表 11 に示した文完成課題のデータに基づき、angry と giận の作例結果とその考察を述べる。

表 9：angry の作例

参加者（8 名）	angry の作例
女性 45 歳以上 アフリカ系米国人	I was angry that I had to work on Saturday, so I said maybe I'll come, maybe I won't.
女性 45 歳以上 アフリカ系米国人	I was angry that someone lied to me, so I never talked to them again.
女性 30 歳から 45 歳 アフリカ系米国人	I was angry that I was lied to, so I wanted to fight.
男性 30 歳から 45 歳 アフリカ系米国人	I was angry that a car pulled in front of me and caused an accident, but I didn't react because I don't act on impulse.
男性 45 歳以上 アフリカ系米国人	I was angry that a friend lied to me, so I stopped speaking to them.
女性 15 歳から 30 歳 コケーション	I was angry that someone cut me off in traffic, so I flipped them off.
女性 15 歳から 30 歳 コケーション	I was angry that my coworker disrespected me, so I yelled at him.
女性 30 歳から 45 歳 コケーション	I was angry that someone cut me off while driving, so I honked and yelled at them.

表 10 : giận の作例

参加者 (8 名)	giận の作例
男性 20 代	(対象：親友) Tôi giận vì cái Lan không chỉ cho tôi đáp án đợt kiểm tra trước, nên tôi chả buồn nhìn mặt nó hơn tuần nay. (ランちゃんが前回のテストの答えを教えてくれなかったことに私は giận して、彼女の顔を 1 週間もみていない。)
男性 20 代	(対象：恋人) Tôi giận vì người đó ²⁸ đã không làm được những gì họ hứa, nên tôi đã bỏ về mặc cho họ xin lỗi rất nhiều. (あの人が約束したことをしなかったことに私は giận した。彼が謝ったにもかかわらず私はさっきに帰った。)
男性 20 代	(対象：親友) Tôi giận vì bị leo cây, nên tôi ngưng nói chuyện với người đó. (約束を守らなかったあの人に私は giận して、あの人と話すのを辞めた。)
男性 20 代	(対象：恋人) Tôi giận vì tôi đã nói sự thật cho anh ấy nhưng anh ấy không tin, nên tôi sẽ không bao giờ nói chuyện với anh ấy nữa. (彼氏に本当のことを言ったのに信じてくれなかったことに私は giận して、彼とは話さないことにした。)
男性 20 代	(対象：親友) Tôi giận vì bạn thân đã hẹn mà không đến đúng giờ, nên tôi đã bỏ về. (約束の時間を守らなかったあの人に私は giận して、さっきに帰った。)
女性 20 代	(対象：親友) Tôi giận vì bạn thân mượn tiền không trả, nên tôi đã nghỉ chơi. (親友が借りたお金を返してくれなかったことに私は giận して、その人との友達関係を辞めた。)

²⁸ベトナム語の作例では、người đó (あの人) という表現が 2 つの作例で用いられているが、この「あの人」は必ずしも単なる第三者を指すわけではなく、親友や恋人、家族など話し手にとって親しい関係性を持つ相手を指すことが多い。実際、筆者が参加者に対象について確認したところ、それぞれ「恋人」と「親友」であることが確認された。

女性 20代	(対象：夫) Tôi giận vì anh ấy làm vỡ cái bát mà tôi rất thích, nên tôi không nói chuyện với anh ấy một tuần. (夫が私の大好きだった茶碗を割ったことに私は giận して、私は一週間彼と話を話していなかった。)
女性 20代	(対象：恋人) Tôi giận vì bạn trai không quan tâm tôi, nên tôi muốn được dỗ dành. (彼氏が私のことを気遣いしなかったことに私は giận して、私は彼に甘やかしてほしい。)

4.3.1 angry の原因と反応

まず、angry の例文に見られる怒りの「原因」と「反応」を確認する。

(I) angry の原因の特徴

表 9 に示された英語話者の例文を分析すると、怒りの原因は主に「自分への不利益・不当な扱い」や「他者からの不誠実・無礼」に関連する出来事である傾向が見られた。(3)(4)(5)にみられるように、原因となる人物が必ずしも明示されず、出来事そのものが語りの中心に置かれる傾向が確認された。

(3) I was angry that someone lied to me, so I never talked to them again. (加害者が明示されない)

(4) I was angry that I was lied to, so I wanted to fight. (受動態により出来事が前景化)

(5) I was angry that I had to work on Saturday, so I said maybe I'll come, maybe I won't.

(出来事に焦点)

(II) angry の反応の特徴

行動への言及については、(6)(7)(8)のように yelled、flipped off、stopped talking といった対立的・外向的な反応が比較的多く見られた。こうした語りの特徴から、怒りが主に自己防衛的な反応や境界の主張として語られる傾向がうかがえる。必ずしも攻撃性を意味するものではないが、感情を外向けに表出し、相手に対して態度や立場を明確化することに焦点が置かれやすいといえる。

(6) I was angry that someone cut me off in traffic, so I flipped them off.

(7) I was angry that my coworker disrespected me, so I yelled at him.

(8) I was angry that someone cut me off while driving, so I honked and yelled at them.

(指さし・怒鳴り声・クラクションなど、相手に不当性を示す明示的なシグナル)

4.3.2 giận の原因と反応

続いて、giận の例文に見られる怒りの「原因」と「反応」を確認する。

(I) giận の原因の特徴

一方、表 10 に示されたベトナム語話者による giận の例文を分析すると、その原因は主に親しい関係の中で生じる対人関係上の出来事に集中していた。特徴的なのは、英語の angry にみられる「お茶碗が割れた」「お金が返ってこなかった」といった中立的な描写ではなく、その出来事が「誰との関係の中で起きたのか」を明示して語る点である。

(9)(10)にみられるように、「親友が借りたお金を返さない」「夫が大切な茶碗を割る」など、身近な存在への信頼や期待が裏切られた状況が中心であった。

(9) Tôi giận vì bạn thân mượn tiền không trả...

私 ので 親友 借りる お金 ない 返す

「親友が私から借りたお金を返してくれなかったことに私は giận している」

(10) Tôi giận vì anh ấy làm vỡ cái bát mà tôi rất thích...

私 ので 彼 (夫) する 割る お茶碗 その 私 とても 好き

「夫が私の大好きなお茶碗を割ったことに私は giận している」

(いずれも行為者が明示される)

(II) giận の反応の特徴

giận の反応行動については、攻撃的な対立行動はほとんど見られず、「距離を置く」「先に帰る」など、(11)のように相手から一時的に離れたり沈黙したりする受動的な対応が多く観察された。重要なのは、原因の語りの段階で関係性が明示化されていることと連動して、こうした行動が関係の傷ついていることを相手に知らせるシグナルと

して機能していると考えられる点である。実際、(12)の「甘やかしてほしい」という反応は、気遣いの欠如によって損なわれた関係を修復し、元の親密さを回復したいという要求として解釈できる。このように、*giận* では関係に問題が生じていることを相手に気づかせ、修復へと向かわせる側面がみられる

- (11) Tôi giận vì bạn thân đã hẹn mà không đến đúng giờ,
私 ので 親友 約束した けど ない 来る 通り 時間
nên tôi đã bỏ về.
だから 私 帰った

「約束を守らなかった親友に私は *giận* して、さっきに帰った。」

(距離を置くことで不満を伝える)

- (12) Tôi giận vì bạn trai không quan tâm tôi, nên tôi muốn được dỗ dành.
私 ので 彼氏 気遣いしない 私 だから 私 甘やかしてほしい

「彼氏が私のことを気遣いしなかったことに私は *giận* して、私は彼にすねた。」

(親密さの回復を求めることで修復を促す)

以上のように、*angry* と *giận* の作例を比較した結果、各語の「怒り」に対する原因や反応、さらに語用的に焦点化される側面に違いが見られた。具体的には、*angry* では出来事そのものの不当性が強調され、怒りが対立的・外向的な反応へとつながる傾向がみられたのに対し、*giận* では親しい関係の中での信頼の損なわれ方が中心に語られ、怒りが関係に問題が生じていることを相手に知らせ、距離を置く・沈黙するといった、関係性の再調整を意図した行動として表現されていた。

このことから、*angry* と *giận* は、それぞれ異なる形で「怒り」を概念化していると考えられる。*angry* が、相手との関係性の有無や親密さにかかわらず、誰からの不当な扱いであっても自己への侵害として捉えられる個人的な感情として語られるのに対し、*giận* は親しい他者との関係の揺らぎの中で生じる感情として語られる。

そこで次節では、コーパスデータを用いて *angry* と *giận* の用例を分析し、予備調査で得られた特徴が実際の言語使用においても確認できるのかを確かめるとともに、両語が用いられる文脈の特徴を検討する。

4.4 調査 (iii) : コーパスの用例から angry と giận の文脈の考察

本節では、前節までの自由記述調査および例文作成課題で明らかになった「怒り」の語り方・意味づけの違いが実際の言語使用データにおいても確認できるかを検証する。

具体的には、ベトナム語コーパス VIETLEX とアメリカ英語コーパス COCA から angry と giận の用例を抽出し、両語がどのような対象・関係性・出来事と結びついて用いられているのか、および前後文脈でどのような語句と共起するのかを分析する。

本分析では、主に 20 世紀以降のデータを対象とし、「怒り」の向けられる対象とその反応、さらに文脈的特徴を両言語で比較する。

表 11 : giận と angry の用例分析に用いたコーパスの概要

コーパス名	時代	ジャンル	総合数
COCA (Corpus of Contemporary American English)	1990 年 ～ 2019 年	SPOKEN, FICTION, POPULAR MAGAZINES, NEWSPAPERS, ACADEMIC JOURNALS	約 10 億語 (2025 年現在)
VIETLEX (Vietnamese Corpus of Vietlex)	- ²⁹	FICTION, POPULAR MAGAZINES, NEWSPAPERS, ACADEMIC JOURNALS	1 億 5000 万語 (2025 年現在)

次に、angry の対象を調査するために、コロケーションで angry at、angry with、angry about の右に現れる句を検索し、ランダムに 50 件ずつを抽出し、分析する。giận の場合は、総数 445 件の中に、giận の主語の感情が観察できる 149 件を抽出し、分析を行った。両言語の用例数は表 12 に示した通りである。

表 12 : コーパスから抽出した angry と giận の用例数の内訳

angry	angry at : 51 件	angry about : 50 件	angry with : 49 件
giận	149 件 ³⁰		

²⁹ VIETLEX は公表していないため扱われる用例の時代範囲は不明である。

³⁰ Doan (2024) における用例数 163 件には複合語が含まれていたことが判明したため、本稿では、複合語を除外して 149 件を分析対象とする。

4.4.1 節と 4.4.2 節では、それぞれの感情語についてコーパスから得られた用例を観察し、どのような使用特徴が見られるかを検討する。本節では、その分析基準を示す。

まず、感情の対象について、「恋愛関係」「夫婦関係」「家族関係」「親友関係」をまとめて「親密な関係」とし、それ以外を「親密でない関係」と区分する。

次に、感情語と共起する語句については、複数の作品に出現し、感情語の使用状況を示す手がかりとなる語句を対象とする。感情語の直前・直後に位置する必要はなく、文脈情報として主体の感情理解に寄与する場合は共起語句として扱う。また、語句の完全一致に限定せず、意味的に同じカテゴリーに属する語（例：angry と共起する unfair や unscrupulous など）も含めて分析する。

以上を踏まえ、次節ではまず angry のコーパス用例を観察し、その特徴を検討する。

4.4.1 英語の angry の対象と共起する語句の傾向

本節では、COCA コーパスから抽出した用例をもとに、angry がどのような対象や語句と共起して用いられるかを観察・分析する。

4.4.1.1 angry の対象

表 13 に示すように、angry は対象となる相手との関係の親密さにかかわらず幅広く用いられていた。「親密な関係」（恋愛・夫婦・家族・友人）に向けられた用例が 68 件と最も多かったが、「親密でない関係」（44 件）にも頻繁に用いられていた。また、特定の人物ではなく出来事・状況に対する用例が 31 件、人生・運命・自己といった抽象的対象に向けられた用例も 7 件確認された。

表 13 : angry の用例に見られる対象の分類と頻度

	関係の種類	頻度（合計 150 件）
親密な関係	恋愛関係（片思い関係も含まれる）、夫婦関係	31 件
	家族	33 件
	友人	4 件

親密でない関係	あまり親しくない人あるいは 全く知らない人	44 件
	事態・被害を受けた状態	31 件
その他	人生・運命・自己	7 件

予備調査では、angry は親しい人物にも、親しくない人物にも、さらには出来事や状況そのものにも向けられることが示唆されたが、この特徴はコーパス分析においても確認された。

例えば、(13)(14)(15)³¹の文脈を見ながら、angry が向けられる対象・状況を見ていく。

(13) My father had drifted in and out of my life, mostly out of it. The only real thing I remember about him was his absence.

“Mom, he'll be here,” I said with the trust of an 8-year-old.

We were supposed to meet him for a picnic, I got angry at her when he didn't show up; she was the only one there to take the blame.

(14) “Boy, what is your name ?” Mrs. Brown hissed as she pulled me aside.

“Camden Paulsen.”

“Camden, why do you feel like you need to interrupt a perfectly traditional pie contest ?”

“That 's the problem, Mrs. Brown. Times are changing. In case you haven't checked, women have the vote now...,” I told her, starting to feel angry at her old-fashioned ideas.

(15) The dollhouse mother wields her knife, while the children stay far away, in the upstairs nursery.

She's angry about making dinner again. She hates to cook, the bland routine of it, the eternal return of it, the never-ending present of chopping, boiling, cleaning up.

(13)では、父親が人生のほとんどで不在だったことから、語り手は「本来、父親であればそうするべきではない」という関係的な期待が裏切られたことに強い失望を抱いている。しかし、その場に父親がいなかったため本来の怒りの対象を責めることができず、結果として、唯一そばにいた母親に怒りを向けてしまう (the only one to blame)。

³¹ コーパス用例の下線はすべて筆者による。

また、angry は必ずしも親密な人間関係や特定の相手に限定される感情ではない。(14)の語り手は「男の子でも料理コンテストに参加できる」と考えているのに対し、Mrs. Brown は「料理コンテストは女性の領域であり、男子児童は参加すべきではない」という古い価値観を体現している。この価値観の衝突によって語り手に angry が生じており、相手との親密さに関係なく、他人の受け入れがたい価値観・態度が怒りの契機となりうることが示されている。

さらに、(15)では、angry の対象は人間ではなく、「料理をしなければならない日常そのもの」に向けられている。語り手は、the bland routine of it、the eternal return of it、the never-ending present...といった表現を用いて、料理という繰り返しの行為自体に強い嫌悪感やうんざりした気持ちを抱いている。angry は「自分自身の不快感」に焦点を当てる感情であるため、「自分にとって不快な出来事や状況」も怒りの直接的な原因となりうることが現れている。

4.4.1.2 angry と近接して起きる語句

次に、angry が出現する際、その前後の文脈に現れる語句を原因別に分析する。原因の分類は表 14 に示したものである。これにより、angry という語が、それぞれの原因グループにおいて具体的にどのような感情や状況、または出来事の特徴を表現するために用いられているかを確認する。

表 14 : angry の原因の種類と用例の一部

原因の種類 (150 件)	用例の一部
個人の利益や境界の侵害に対する怒り (26 件)	Some people at work have been doing something really sneaky and bad to me and so <u>I'm angry at them.</u>
集団・社会の利益が損なわれることへの怒り (23 件)	<u>They were angry at the Bush Administration for criticizing Israel.</u> Rabbi Marc D. Angel, president of the Rabbinical Council of America, said," The U.S. has betrayed Israel.
身近な人間関係・期待の裏切りに対する怒り (66 件)	We opened the door without waiting for a knock, my mother and I, and he said, "Hello, Kathryn. Hello, son." ... and that <u>I was angry</u>

	<u>about how easily he'd released me from his daily life.</u> “Hello, sperm donor,” I should have said back to him, or “Hello, ghost”.
相手への心配から生じる怒り（2件）	Her teacher, Mr. Soto, was angry about that. He told her she wasn't taking the assignment seriously. <u>Mr. Soto gets angry at her a lot.</u> She knows why. He wants to save her. He wants to take credit for whatever she makes of herself if it turns out to be good.
望ましくない事態・状況への怒り（23件）	<u>A few were angry about having a practice on a Sunday night,</u> especially with the first full week of school starting the next morning.
運命・人生への怒り（4件）	She could have become bitter about her parents; bitter and <u>angry with any God who could let them be extinguished while she was left behind alone.</u>
自己への怒り（3件）	<u>She was angry at her own stupidity , angry at her own fear.</u> She pushed the thought away, angry at its irrelevance, and made herself walk down the ramp and into the clearing.
不明（3件）	I am now writing a chapter about <u>my last master who was so angry with me because I could not learn the MORSE CODE</u> and he was mean and beat me with a stick and let me get all skinny and hungry all the time.

表 14 から分かるように、**angry** が用いられる文脈には一貫した典型パターンがあるというより、非常に多様な原因が存在していた。対人関係における摩擦や期待の裏切りだけでなく、個人の権利・境界の侵害、社会制度や集团的利益の損失、望ましくない状況・出来事、さらには運命や自己への不満まで、怒りの契機は幅広い。特定の関係性や特定の原因タイプに限定されるわけではなく、「自分にとって受け入れがたいこと」が生じれば、相手の親密さや原因の種類を問わず **angry** が用いられうる点が特徴である。

次にこうした怒りの原因が文中でどのように表現されているかを明らかにするために、**angry** に近接して出現する語句を考察する。

(I) 「利益」「境界」などが侵害されたことを示す語句・表現

表 14 で示すように、angry は「個人の利益や境界の侵害」や「集団・社会の利益の損失」などを契機として生じることが多く(49 例)、その特徴は文脈にも反映されている。ここでいう「利益」は金銭に限定されず、尊厳・公平な扱い・権利など、話者が本来保たれるべきだと認識する扱いを広く含む。

(16) Some people at work have been doing something really sneaky and bad to me and so I'm angry at them.

(17) He was very angry with her, for using him; presently with himself, for being usable.

(18) “ My marriage is none of your business, sir.”

And you are quite persuasively angry at the insult to your wife, as well.

これらの例に共通するのは、angry が「本来守られるべき扱いが破られた」という認識と結びついて用いられている点である。(16)(17)では、同僚の「卑劣で悪質な行為」(sneaky and bad) や「利用される」(using / being usable) という状況から、話者は不当な扱いや尊厳・個人的境界の侵害を直接的に感じている。(18)では、怒りの対象は話者自身ではなく配偶者に向けられた「侮辱」(insult) であり、「守られるべき尊厳が傷つけられた」と認識したことが怒りの契機となっている。

また、angry は個人的な場面にとどまらず、社会的・集団的な怒りでも用いられる。たとえば、以下の(19)では同盟国への批判が「裏切り」と受け止められ、国家間の信頼が損なわれたと感じられている。また、(20)では、日曜夜は家族の時間として確保されるべきだという共有認識の中で学校側が練習を設定したことが「本来払われるべき配慮の欠如」と親たちに判断される。さらに、(21)では、差別的出来事の後にもかかわらず処分が不透明で「軽すぎる」と黒人コミュニティが感じ、「公平さが守られていない」と認識して不満が高まっている。いずれの場面でも、こうした感情の表現として angry が選択されている。

(19) They were angry at the Bush Administration for criticizing Israel. Rabbi Marc D. Angel, president of the Rabbinical Council of America, said, “ The U.S. has betrayed Israel.”

- (20) Alves drifted over to talk with some of the parents. A few were angry about having a practice on a Sunday night, especially with the first full week of school starting the next morning.
- (21) Three white students were quickly identified as the perpetrators...But a school board committee overruled him. The students were suspended -- but the length and terms were not disclosed. But in the absence of any clarity, black parents and other African Americans in the community, incensed over the nooses, grew more angry at this perceived leniency.

(II) 「敵対的」「嫌悪的」な意味合いを持つ語句・表現

前節で述べたように、angry は個人の「境界」や「利益」が侵害されたときに強まりやすいが、そのような認識は、相手を「危険な存在」＝「敵」とみなす方向へ感情が展開することがある。

- (22) The entire world would be very angry at Iran to the extent that Russia and China would not sell them any more missiles (or anything else) to cause more damage. Iran would basically be alone fighting against the world.
- (23) I was having this argument with my father about Martin Luther King and how his message was too conservative compared to Malcolm X's message. My father got really angry at me. It wasn't that he disliked Malcolm X, but his point was that Malcolm X hadn't accomplished anything as Dr. King had.

(22)では、世界がイランを危険視し、イランを「世界全体の敵」として位置づける語り方 (fight against the world) が用いられており、相手を排除すべき存在として描く怒りが表れている。一方、(23)では、父親が息子の主張を「自分の価値観を脅かすもの」と受け取ったことで怒りが高まり、マルコム X とキング牧師をめぐる意見の相違が、親子の議論 (argument) を対立構造へと押し上げている。

さらに、以下の(24)と(25)のように、相手が親しくない人物の場合はもちろん、身近な人間関係や期待の裏切りに対する怒りであっても、相手を拒絶・排除したいという「嫌悪」の感情へと展開する場合も見られる。

- (24) She'd already heard how she was ruining her kids' lives by packing them up and returning to the old homestead where she'd been born and raised. To hear them tell it, she was the worst mother in the world. The word "hate" had been thrown around, aimed at her,... So her kids were still angry with her. Too bad.
- (25) We opened the door without waiting for a knock, my mother and I, and he said, "Hello, Kathryn. Hello, son."... and that I was angry about how easily he'd released me from his daily life. "Hello, sperm donor," I should have said back to him, or "Hello, ghost".

(24)の文脈では、母親の決断が子どもたちの期待や願望を裏切ったという認識が怒りの出発点になっている。怒りは次第に感情的対立へと発展し、**worst mother**、**hate**などの表現に見られるように、母親を否定し排除したいという嫌悪的態度へと変化している。一方、(25)では、父親がこれまでの人生から自分をあっさり切り離していたという「見捨てられた」という原因に対して怒りが生じる。語り手はもはや父親を「父」として扱おうとせず、**sperm donor**、**ghost** と呼び捨てたいと感じており、相手の存在を関係から排除しようとする態度が現れている。

(III) 「復讐」の意味合いを持つ後続反応

最後に、コーパスにおける **angry** の後続反応を確認する。ここまで見てきたように、**angry** は「不当な扱いを受けた」「本来守られるべきものが破られた」と感じた時に生じる感情であり、気持ちの向きは自分（または自分の側）が受けた不利益や不公平を取り戻したい方向に向かうことが多い。

そのため、**angry** のあとに続く行動は、ただ怒りを表すだけではなく、状況を正そうとする行動や相手に対抗しようとする行動として表れることがある。実際、後続反応が文章の中で明確に書かれていた 46 例を調べたところ、35 例が「罰する・押し返す・圧力をかける」などの行動につながっていた。

- (26) Oh, now and again, when something would come out from some Democrat still angry about the war, trying to stir up the flames again. You know how they say the trial was unfair or that the Surratt woman was innocent. He might pass a remark on it. "

- (27) There had been an argument about money and about who did the most work. He get angry with me all the time... -- and last night --...he do something very bad to me...but he hit me. And then... hit me again in our bedroom... Lauren sounded calm as she asked where he had struck her. On my back. Only on back.
- (28) “My sister (the one you were with) and I learned the arts of magic until we became skilled in it, (中略) . Then after that I learned even more of the arts of magic, and I came to her and stayed with her. One day I scolded her for what she did, and she became angry with me and bewitched me, turning me into a horse. She locked me up, as you saw, in that treasure chamber, and I was there for thirteen months..”

例えば(26)では、戦争をめぐる議論が再燃すると、依然として怒りを抱える一部の民主党員が、裁判の不公平さや被告人の女性の無実を主張し、過去の争点を再び持ち出して対立を煽ろうとしている。ここでの行動は、「不当だと思ふ状況を覆したい」という方向で火種を広げようとする形で表出している。一方、(27)では、夫婦関係の出来事ではあるものの、両者の関係は円満とはいえず、金銭や家事の負担をめぐる口論の中で蓄積した怒りが、最終的に夫による妻への暴力という深刻な攻撃行動として噴出している。さらに(28)では、魔術の秘術を咎められた姉の怒りが、「相手を馬に変えて閉じ込める」という極端な制裁行動につながっている。ここでは、怒りが「相手を復讐の対象として扱う」方向で行動化されている。

4.4.1.3 考察の要点

本節の分析から、angry は①向けられる対象、②原因、③後続反応のいずれの側面においても、「自分にとって受け入れがたいことが生じた」という評価と強く結びついていた。対象については、親密な人物だけでなく、親しくない人物、出来事・状況、運命・自己など幅広く確認された。原因も多様であり、個人（あるいは身近の人）の利益・境界の侵害、社会的な不公平、望ましくない状況などが生起の契機となっていた。さらに後続反応を確認したところ、怒りが行動として明示されていた例では「罰する・押し返す・制裁する」といった対抗的行動につながっていた。

こうした分析結果を先行研究と照らし合わせると、特に Lakoff & Kövecses (1987: 211) が英語の怒りのメタファーに基づいて提示した 5 段階モデル (Offending Event → Anger → Attempt at control → Loss of control → Act of Retribution) との対応が認められる。本研究で観察された angry の使用は、怒りの生起が「不当さの認識」(Offending Event) によって引き起こされ、文脈によってはさらに「復讐」(Act of Retribution) に展開するという点で、同モデルの提案内容を支持する結果となっている。

しかし、こうした angry の特徴がベトナム語の giận においてどの程度見られるのかを明らかにするためには、giận の使用文脈を確認する必要がある。

次節では、VIETLEX コーパスから抽出した giận の用例をもとに、感情表現としての使用特徴を詳しく分析する。

4.4.2 ベトナム語の giận の対象と共起する語句の傾向

本節では、VIETLEX コーパスに基づき giận の用例を分析し、対象や文脈のパターンから giận の感情表現としての特徴を考察する。

4.4.2.1 giận の対象

VIETLEX コーパスに基づく 149 件の用例を分析したところ、giận が向けられる対象は「親密な関係」「親密でない関係」「その他 (人生・運命・自己)」の 3 種類に分類できた (表 15)。最も多かったのは恋愛関係・夫婦関係で 65 件 (約 4 割) であり、家族や友達への用例も多数確認された。また、親しくない相手や抽象的对象に向けられる例もみられたものの、親密な関係に向けられる用例に比べると少数であった。

ここで注目されるのは、対象が親しいかどうかにかかわらず、giận が多くの場合、特定の相手・存在に向けられている点である。すなわち、「誰に対して腹を立てているのか」が明確であることが giận の特徴として印象的である。

表 15 : giận の用例に見られる対象の分類と頻度

	関係の種類	頻度 (合計 149 件)
親密な関係	恋愛関係 (片思い関係も含まれる)、 夫婦関係	65 件
	家族	23 ³² 件
	友人	29 件
親密でない関係	知り合い・あまり親しくない人	21 件
その他	人生・運命・自己	11 件

ベトナム語の giận という感情表現が、どのような対象に向けて使われるのかを考察するため、以下のコーパス用例を取り上げる。

先に示した対象の傾向を踏まえると、giận は多くの場合、特定の相手・存在に向けられ、その相手との関係性が怒りの成立に深く関与していることが読み取れる。たとえば、(29)と(30)³³の giận はそれぞれ恋愛関係・親しい友人関係という、強い対人的つながりの中で生じている。

(29) 【サイとフオンは恋人である。二人が離れて暮らすことになった際、フオンは何度も手紙を書いて思いを伝えようとしたが、サイは何の説明も返信もないまま突然姿を消した。この出来事はフオンに深い傷と失望を残した。そうした経緯があったため、サイが突然現れたとき、フオンは彼を避けて冷たい態度を取った。その様子を見て、周囲の人々は「フオンはサイに対して失望すぎたのだろう」と思った。】

Có lẽ nó giận quá đấy mà.

多分 あいつ とても だよ

「(その態度に対して) きっと彼女は失望しすぎたのよ。」

³² Doan (2023) の「家族」28 件には、「家族」の呼称の用いた親友の用例が含まれていたため、本稿では、分類を修正した。

³³ コーパス用例の下線はすべて筆者による。

(30) 【刑務所に入った男なら、終わりのない日々をごまかすために酒に頼りたくなるのが普通である。だがリンは違っていた。この収容所に来てからは一度も酒を口にしなかった。ここでは酒は非常に貴重で、親しい相手にしか勧めないものであったため、看守たちは好意のつもりでリンに酒を差し出した。しかし彼は何度すすめられても断り続けたため、「好意を受け取らなかった」と感じて気分を害する者もいた。】

Các ông đội quản cai	bên đồn	đã	giận	Linh
看守たち	刑務所	した		リン
vì	Linh	từ chối	chén	chân thành của họ
ので	リン	断る	杯	好意 彼らの

「看守たちは、好意として差し出した酒をリンに断られたことで、気分を害した。」

(29)では、恋人として「当然してほしいはずのこと（連絡）が行われなかった」という関係的期待の裏切りが生じており、これがフオンの「怒り」の契機となっている。ここでは、相手が特別な存在であるからこそ、その行動が強い感情反応を引き起こしたと言える。

一方、(30)では、看守たちが囚人リンに差し出した酒は「親しい者同士の心からのもてなし」を表すものであり、関係を大切に思う者であれば本来受け取って飲むべき場面であった。しかし、それをリンが繰り返し断ったことは「好意の拒絶」と受け止められ、看守たちの不機嫌へとつながっている。

また、親密ではない相手に *giận* が向けられる場合もみられたが、それは完全な他人ではなく、何らかの個人的つながりを共有する相手（近所の人など）に向けられる傾向がみられた。この点は、*angry* が「知らない相手」や「出来事・状況」など広範な対象に向けられることと対照的である。

(31)もその例である。登場人物同士は親密ではないものの、「同郷の仲間」という一定のつながりが前提となっていたため、X氏は周囲の消極的な反応を「協力すべき相手から協力が得られなかった」と受け取り、不機嫌な態度を示している。

(31) 【X氏は同郷の者たちを集めて会の設立を提案したが、目的は曖昧で賛同者も消極的だった。口では「はい」と答えつつ態度は冷ややかであったため、X氏は「公共のためなのに熱意がない」と受け取り、不機嫌な様子を見せた】

xem ra ông giận, trách rằng không có bụng nhiệt thành về việc công.
 どうやら 彼 責める は ない 熱意 に関する 公益

「(皆の態度を見て) X氏は、どうやら腹を立てたらしく、『公益のためなのに熱意がない』と責めるように言った。」

4.4.2.2 giận と近接して起きる語句

次に、giận が出現する際、その前後の文脈に現れる語句を原因別に分析する。原因の分類は表 16 に示したものである。これにより、giận という語が、それぞれの原因グループにおいて具体的にどのような感情や状況、または出来事の特徴を表現するために用いられているかを確認する。

表 16 : giận の原因の種類と用例の一部

原因の種類 (149 件)	用例の一部
恋愛関係の衝突 をめぐる怒り (54)	【数か月のあいだ、夫は彼女を顧みず遊び歩いていたが、彼女は妻としての務めを果たそうと、優しい言葉で諭し続けていた。しかし夫は聞き入れず、彼女の言葉はまったく効果がなかった。そのため、悲しみと失望が積み重なって怒りに変わり、彼女は一度だけでもはっきり叱ろうと決意した。】 Tôi nghĩ tôi giận, nên tôi mới tính tôi làm rầy một lần 「そのことを思うと giận して、せめて一度だけ叱ろうと思った。」
親友関係の衝突 をめぐる怒り (17)	【クアンザオと主人公は同じ師のもとで学んだ仲間であった。しかし、クアンザオはその情義を顧みることなく、よりによって彼が心を寄せる相手を奪った。女の子はいくらでもいるのに…。彼はクアンザオに対して、友情を裏切られたことに深い失望を覚えた。】 ..giận là giận Quảng Giao chẳng nghĩ tình nghĩa đồng song... 「彼が giận したのは、クアンザオが同門の仲間でありながら、情義を無視して、自分の愛する女性を奪ったからだだった。」

家族関係の衝突 をめぐり怒り (21)	【家族が大変な状況にあるにもかかわらず、息子は何度も知らせを受けてようやく帰ってきた。そのうえ、帰ってから家のことをまるで他人事のように扱っていた。老儒は不孝な息子を強く叱った。】 ...<u>giận</u> cả thằng con giai vô hạnh ngồi cạnh đây... 「隣に座っている不孝な息子に対しても <u>giận</u> を感じた。」
知人関係の衝突 をめぐり怒り (21)	【チャンさんは住民としてバイクを預けていたのに、翌朝消えていた。それなのに管理を任されていたベーは「持って帰ったのはあんただろ」と逆に疑ってきた。その屈辱から、チャンさんはベーに弁償額を一切まけず満額を求めると決めた。】 ...Cô Đoàn Trang <u>giận</u> Bé dám nói cô vu khống... 「ドアンチャンさんは、ベーが自分を「濡れ衣を着せるな」と疑って侮ったことに <u>giận</u> した」
相手への心配から生じる怒り (7)	【サイが通りの入り口まで来たとき、一台の自動車が急ブレーキをかけ、道を横切って向こう側へ走る子どもたちの前に止まった。彼は自分の息子だと気づき、顔色を変えて自転車を放り出し、急いで駆け寄って抱き上げた。その子はケラケラ笑いながら、土まみれの手で、心配と恐怖でこわばった父の顔をなでた。】 ...khuôn mặt của anh đã tím lại vì <u>giận</u> và hoảng sợ. 「<u>giận</u> と恐怖で、彼の顔はこわばっていた。」
愛情を込めた冗談めかしの怒り (4)	【長い旅を終えて帰宅した夫のやつれた姿を見た妻は、道中の危険を聞いて涙を流した。そして、自分の望みが夫を危険に晒したのではないかと感じ、冗談交じりに「私のせいでつらい思いをして、悲しい気持ちになった？」と夫に聞いた。夫は微笑みながら、確かに悲しみを含んだ気持ちがあると拗ねた。】 - <u>Giận</u> lắm chứ. Làm khổ người ta như thế, ai mà không giận? 「もちろん <u>giận</u> するよ。そんなに苦しめられて、<u>giận</u> しない人なんているか？」

運命・人生への 怒り (6)	【ミックの家は貧しく、母にこれ以上苦勞をさせまいと、彼は稲わら を売ろうとした。ところが、その行動が思いがけず暴行を受けるこ とにつながってしまった。その出来事を思い返すと、ミックは自分 の不運を嘆き、人生を恨み、死にたいとまで感じていた。】 Mịch tủi thân, <u>giận</u> đời, chỉ muốn chết... 「ミックは自らの境遇を嘆き、人生を <u>giận</u> し、死を望むに至った。」
自己への怒り (2)	【ミックは、ある夜、サツマイモを盗んでいた。そのとき、密かに想 いを寄せていたロンと出会い、盗みを正直に打ち明けたが、彼から は軽蔑の目で見られた。】 Mịch rất hối hận <u>giận</u> mình sao đã quá thật thà... 「ミックは、自分が正直すぎたことを深く後悔し、<u>giận</u> した。」
不明 (17)	【もし現代の作家たちが恋愛物語を書くのなら、登場人物を結婚さ せ、その後にやきもちを焼かせ、冷戦状態にさせてみればよい。そ うすれば、恋愛というものが人間を苦しめるだけだということが実 証されるだろう。】 rồi cho họ ghen nhau, <u>giận</u> nhau đi... 「彼らにお互いに <u>giận</u> させ、冷戦状態にさせてみればよい。」

表 16 から明らかなように、giận は angry と比べて、その原因がより人間関係の文脈に強く結びついているという特徴を持つ。特に恋愛・友情・家族といった親密な関係における裏切りや不義理が頻出し、相手の行為が「情」「義理」「思いやり」などの関係性の規範に反したときに giận が生じやすい。また、相手への深い思いがベースとなっているため、相手を心配するがゆえの怒りや、愛情を含んだ冗談めかしの怒りといった、単なる対立では説明できない用例も見られる。

次にこうした怒りの原因が文中でどのように表現されているかを明らかにするために、giận に近接して出現する語句を考察する。

(I) 「愛情」の意味合いを持つ表現・語句

前節で示したように、angry は「自分にとって受け入れ難い出来事」に広く反応し、原因への対立や嫌悪を示す語句が共起しやすかった。

これに対し、ベトナム語の giận は人間関係の文脈に強く結びつき、親しい相手との情義の揺らぎに関わって用いられることが多い。そしてそのような関係性の前提のもと、怒りと並行して相手への愛情を示す表現が現れる場合もあり、こうした併存は angry にはほとんど見られない特徴である。例えば、以下の例(32)と(33)を見ていく。

- (32) 【クックフオンとビンソァンは恋人同士だった。しかし、クックフオン の両親はお金目当てで、彼女を愛していない男性との結婚を無理やり決めてしまった。追い詰められた彼女は絶望し、自ら命を絶った。ビンソァンは、「なぜ彼女は自分をこんなにも苦しめる道を選んだのか」と彼女の境遇を不憫に思った。】

Vĩnh Xuân thương tiếc Cúc Hương thái quá rồi cậu giận.
ビンソァン 不憫に思う クックフオン すぎる そして 彼

「ビンソァンはクックフオンをあまりにも不憫に思い、彼女に対して giận を感じた。」

- (33) 【レホンが高校3年生だった時、母が病気で亡くなり、その後、父は再婚した。継母には二人の連れ子がいたが、レホンは家族関係の複雑な状況を懸念し、父の家に同居しなかった。レホンは、再婚によって家族関係が複雑になったことに怒りを感じる一方で、母を失ったことによって父が抱えている孤独や立場のつらさを理解する。】

Vừa giận vừa thương bố...
ながら ながら 心配する 父

「(レホンは) 父に対して怒りを感じながらも、同時に気の毒にも思っていた。」

(32)では、ビンソァン（感情主体）とクックフオン（対象）は恋人同士であり、深い愛情関係にあった。ところがクックフオンは追い詰められ、自ら命を絶ってしまったため、ビンソァンは愛する人を失った悲しみのあまり、彼女がなぜ自分を苦しめる選択をしたのかという怒りが生じている。この怒りは、彼女を大切に思うがゆえに「自分を傷つけてほしくなかった」「自分を置いていかないでほしかった」という強い愛情から派生している点に特徴がある。

一方、(33)では、レホン（感情主体）と父（対象）は親子関係にある。母の死後、父が再婚したことで家族関係が複雑になり、旧家族と新家族の間で気まずい状況が生じてしまった。そのため、レホンは旧家族の一員である子どもの立場から、そのような状況をつくり出した父に対して怒りを感じている。同時に、妻を失った夫という父の

立場から見れば、孤独や苦しさを抱えていたことを理解し、気の毒に思う感情も併存している。

(II) 「心配」の意味合いを持つ語句・表現

次に、*giân* に見られる「心配」の特徴を示すコーパスの用例を見てみよう。*giân* は親しい関係の中で生じる感情であり、特に相手が自分を大切にしない、あるいは身を守らないと感じたときに、その心配や気がかりが怒りという形で表出する場合がある。

- (34) 【偵察任務に就く息子を訪ねて、父親である大佐が山岳地帯の前線基地を訪れる。過酷な環境の中でやせ細りながらも、「もう慣れた」と淡々と答える息子の姿に、父は心配しながらも、息子が家族に頼らず、無理をしていることに怒りを感じた。】

Ông	vừa	thương	con	vừa	<u>giân</u>	nó
彼（父）	ながら	心配する	子供	ながら		あいつ（息子）

「父は心配しながらも、息子が家族に頼らず、無理をしていることに怒りを感じた。」

(34)は、過酷な任務に就く息子を父が見舞う場面である。父は、これまで大切に育ててきた息子が無理を続けているにもかかわらず、「もう慣れた」と受け入れてしまっている姿に苛立ちを覚える。そして同時に、これまでもそうであったように、これからの生活や将来を思うと、息子の身を案じる強い不安も抱いている。

(III) 「関係修復」や「思いやり」の意味合いを持つ後続反応

最後に、ベトナム語の *giân* の後続反応に見られる特徴を確認する。

英語の *angry* の場合、先行する出来事に対する当然の報いとして相手に対抗する行動が後続するといったパターンが見られた。

一方、*giân* では後続反応が確認できた 87 件中 72 件が復讐的・攻撃的ではなく、39 件は「無口になる・距離を取る」などの内向的態度、残り 33 件は相手を思いやる態度や、相手に関係を元に戻してほしいという気持ちを示す態度であった。

以下の(35)と(36)はその特徴を示す用例である。これらを通して確認する。

- (35) 【夫が長期間の旅から戻り、妻はやつれた夫の姿や旅の危険を聞いて深く心配し、涙を流す。自分が夫に危険な旅をさせてしまったことを悔やみ、「私のこと、怒っている？」と甘えるように尋ねる。彼は微笑んで言った】

Giân lắm chứ. Làm khổ người ta như thế, ai mà không giận?

とても よ 苦しめる 人 そんなに だれ でも ない

「すごく giân しているさ。こんなに人を苦しめて、誰が giân しないっていうのだ？」

- (36) 【シャンプーと間違えて殺虫剤を使ってしまった弟ウットコーを病院に連れて行った姉へオは、「ウットコーが殺虫剤を飲まなかっただけ良かった」と言いつつ、「殺虫剤の風呂に入るなんて馬鹿ね。あいつ、シャンプーだと思ったのね」と文句を言った。その後、へオは、弟にお粥を食べさせ、弟を抱きながら眠った。】

... nhìn nó vừa giân vừa thương.

見る あいつ ながら ながら 守りたい

「(姉のへオは) 弟を見ると、怒りと共に心配が湧いた。」

まず(35)では、長期間の旅から戻った夫を心配する妻の訪ねに対して夫が「すごく giân しているさ」と微笑みながら返答する場面が描かれている。この返答は対立的なものではなく、笑みを浮かべながら答えていることから、相手を傷つける意図は見られない。ここでの giân の反応は、「自分の状況を分かってほしい」「もっと大切にしてほしい」という思いを相手に伝え、仲直りしたい気持ちがにじんでいる点に特徴がある。

一方、(36)では、殺虫剤を誤って使ってしまった弟を病院に連れて行った姉が、弟の無茶な行動に文句を言いつつも、最終的にはお粥を食べさせ、抱きしめて眠らせる場面が描かれている。この反応は相手を拒絶したり傷つけたりする意図は見られない。文句を言うのは「無理をしてほしくない」からであり、お粥を食べさせる行為は弟を思いやっているからである。どの反応も、根底には弟を心配する気持ちがある。

4.4.2.3 考察の要点

本節の分析から、giân は①対象、②原因、③後続反応のいずれにおいても angry とは異なる特徴を示した。

具体的に、*giận* は、対象は家族・恋人・友人といった親密な関係に強く限定され、原因も関係性の規範（情・義理・思いやり）の逸脱や、相手が自分を大切にしないことへの心配に基づく場合が多かった。さらに後続反応についても、*angry* に見られる攻撃的な行動とは対照的に、相手から距離を置く・黙り込むといった内向的反応が多く見られ、相手を思いやったり、関係を元に戻してほしいという気持ちを示したりする反応も確認された。

4.5 まとめ

本章では、英語の *angry* とベトナム語の *giận* の文脈的特徴を比較した。どちらも「怒り」を指す語であるにもかかわらず、その実際の使用場面には大きな違いが見られた。

angry は「自分にとって受け入れがたい出来事」に広く反応し、対抗・制裁へ向かう行動と結びつきやすい。一方 *giận* は、家族・恋人・友人など親しい関係に強く限定され、愛情・心配・義理といった対人的要素と絡み合いながら生じる傾向があった。後続反応についても、*angry* が攻撃的展開へ向かうのに対し、*giận* は沈黙・距離を置くといった内向的反応や、相手を気遣う・関係を回復してほしいという気持ちの表出へと向かう傾向が確認された。

この比較から、感情の概念化は単なる生理学的反応の捉え方にとどまらず、その背景となる社会的・対人的前提までも取り込んで構築されることがわかる。すなわち、「基本的な感情」とみなされがちな怒りであっても、生理的基盤が共通しているからといって同じように現れるわけではなく、どのような状況で生じると理解されるのか、何が発生の契機とみなされるのかといった文化的・対人的解釈によってその姿が変化し得ることが示唆された。

この解釈の違いが、怒りの表れ方や言語による表現の仕方にも反映されていると考えられる。しかし、英語の「怒り」を基準に怒りを「侮辱や侵害となる出来事 → 復讐へ向かうもの」と説明する Lakoff & Kövecses (1987) の概念メタファーモデルのみでは、ベトナム語の *giận* に見られるような関係性の特徴を十分に捉えきれない。したがって、感情語の分析には、概念メタファーのみならず、対人関係やその感情と共起する表現・態度などを含めた文化的文脈を視野に入れた分析も有効であると考えられる。

次章では、これらの相違が *angry* と *giận* の使用制約にどのような影響を及ぼすのかを検討する。

第5章

対人関係の捉え方に基づく **angry** と **giận** の使用制約

5.1 はじめに³⁴

本章の目的は、論点②「対人関係の捉え方に基づく感情語の使用制約」に着目し、対人関係の捉え方に基づく英語の **angry** とベトナム語の **giận** の使用制約を比較する。

第2章で見たように、Wierzbicka (1992 : 569) の NSM 理論では、**angry** は「悪い行為を受ける → 不快感を抱く → 相手に対して何か（よくないこと）をしたくなる」という一方向的なスクリプトとして記述されてきた。しかし、このようなモデルだけでは、ベトナム語の **giận** が、怒りの後続反応でありながら相手への配慮や心配を伴う行動と結びついて用いられる、といった現象を十分に説明することができない。本章では、この点を「関係の捉え方による使用制約」という観点から再検討する。

第4章では、**angry** と **giận** はいずれも「怒り」を指すものの、それぞれの意味構造（ドメインマトリックス）には異なる対人関係のドメインが関与しており、その違いが両語の文脈の差異として現れることを確認した。**angry** が「他者から独立した個人」を前提とする怒りとして概念化されるのに対し、**giận** は「親密な関係にある相手同士」を前提とする怒りとして概念化される点である。

本章では、第4章で明らかになった対人関係を踏まえ、英語の **angry** とベトナム語の **giận** の使用にどのような制約が働いているのかを比較し、その差異がどのような意味構造にもとづいて成立しているのかを比較する。

本章の構成は次の通りである。5.2 節では、**angry** と **giận** が前提とする対人関係と、その差異が発生プロセスにどのように反映されるのかを確認する。5.3 節では、**angry** が幅広い対象に用いられるのに対し、**giận** は親密さを前提とし、内集団意識や役割共有によってのみ対象範囲が拡張される点を示す。5.4 節では、**angry** が自己への攻撃に焦点を置くのに対し、**giận** は関係のすれ違いと相手への思いやりが併存しうることを示す。5.5 節では、**angry** が対立・自己利益の回復へと展開しやすいのに対し、**giận** は相手へのケアへ展開しても矛盾しないという後続行動の特徴を示す。5.6 節では、本章のまとめを述べる。

³⁴ 本章は、Doan (2025) の議論に大幅な加筆および修正を施したものである。

5.2 angry と giận に関わる対人関係と怒りの発生プロセスの捉え方

本節では、angry と giận がそれぞれどのような前提となる対人関係と行動の流れに基づいて用いられるのかを再確認し、両語の意味構造の相違点を検討する。

まず 5.2.1 では、両語が前提とする対人関係を整理する。5.2.2 では、それぞれの対人関係を前提に、感情が生じるまでの過程を時系列的に整理し、そこから感情の性質や反応の方向性の違いが意味構造にどのように反映されているのかを比較する。

5.2.1 giận と angry を裏付ける対人関係の差異

第4章で確認したように、giận と angry は、それぞれ異なる社会的関係の前提に基づいて使用される。本節では、感情が喚起される前段階として想定される「怒りが生じない関係の前提」に着目し、両語の前提の違いを整理する（表17）。

表 17 : giận と angry における怒りが生じない条件

	giận	angry
関係の前提	恋人、家族、親友など、長期的で感情的な結びつきがある二者関係	互いに独立した立場にある個人同士
期待される行動	1.特定の相手を親しい存在として認識している 2.その相手に理解や配慮を期待している 3.その相手との親しい関係が持続的に保たれること	1.自分を独立した個人として認識している 2.他者が個人的領域・権利を尊重して行動することを期待している 3.自己のパーソナルスペースが侵害されない状態を期待している

表17が示すように、giận と angry はいずれも、怒りが生じないためには一定の関係的前提と期待が成立していることを前提としている。giận では、恋人・家族といった長期的で感情的な結びつきのある二者関係が基盤となり、特定の相手を親しい存在として認識し、相互理解や配慮を期待し、その関係が持続的に保たれることが前提となる。一方、angry では、互いに独立した立場にある個人同士の関係が基盤となり、自分を独立した個人として認識し、他者が個人的領域や権利を尊重して行動することを期待し、自らのパーソナルスペースが侵害されない状態が保たれることが前提となる。

そして、こうした関係的前提や期待が崩れたときに怒りが生じる。何が「期待の崩れ」とみなされるのかは両語で異なり、その違いがそれぞれの怒りの発生プロセスの捉え方に影響を及ぼす。

5.2.2 giận と angry の感情発生プロセスの差異

前節では、両語において怒りが生じないための関係的前提と期待を整理した。本節では、それらの前提が崩れたときに怒りがどのように立ち上がると捉えられているのか、すなわち感情発生プロセスの違いに焦点を当てる。

図 7 はその大まかな流れを示したものである。出発点（前提）、感情を引き起こす要因、その性質と反応の中心、そして最終的な収束点までが時系列的に整理されている。

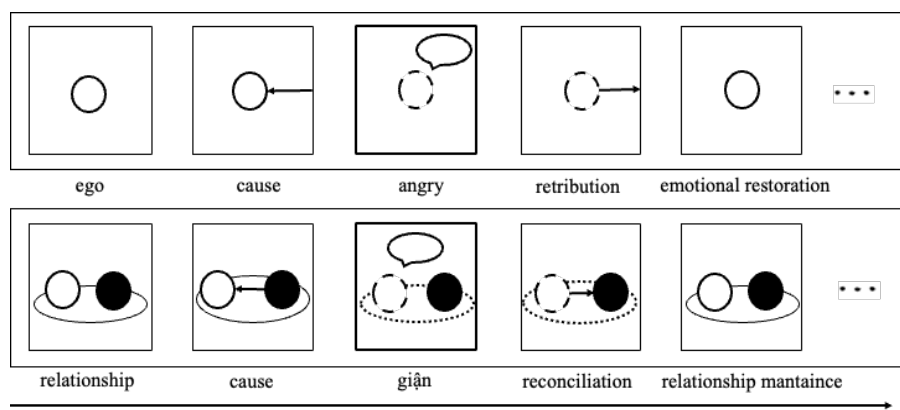


図 7 : angry と giận の発生プロセスの違い

angry は、まず「自分」(ego) を中心とした感情として生じる。契機は「自分が傷つけられた」「権利や期待が守られなかった」と感じたときであり、相手が親しいかどうかは本質的には問題とならない。重要なのは、自分が不当に扱われたと感じるかどうかである。そのため反応は自己防衛的になりやすく、否定・仕返し (*retribution*) に向かうこともある。最終的な目的は、自分の気持ちの均衡を取り戻すこと (*emotional restoration*) であり、関心の向きは終始「自分側」にとどまる。この発生プロセスは、従来の研究 (Lakoff & Kövecses 1987、Wierzbicka 1992) の怒り概念とも整合的である。

giận は、まず「関係の中にある自分」(relationship) を前提とした感情として生じる。契機は、「大切な関係に問題が生じた」「相手が自分を大切にしていらないように見えて

心配になった」と感じたときであり、相手が親しい存在であることが本質的な意味をもつ。怒りの中心には、関係の揺らぎによる痛みと相手を思う気持ちが同時に含まれるため、怒りと悲しみ・心配・共感が併存しうる。こうした怒りは相手を否定することを目的とせず、関係を回復・ケアしようとする方向に向かいやすい。最終的な目標は関係の維持（relationship mantaince）であり、感情の関心は終始「相手との関係」に向けられている。

以下の表 18 は、英語の angry と giận の発生プロセスを示すものである。

表 18 : angry と giận のプロセスの相違点

意味構成要素	angry	giận
出発点（前提）	ego（自分）が中心	relationship（親しい関係）が中心 その関係が侵害されたと感じた時
感情の原因	自分が侵害されたと感じた時 自分の権利や期待が 裏切られた時	関係内での誤解・期待の裏切り または相手のことで心配する時
感情の性質 （怒りの中心）	自己防衛的で攻撃的に なりやすい 怒りが前面化しやすく、 他の感情は併存しにくい	怒りの中心に関係への悲しみと 相手への思いやりが含まれる 怒りと悲しみ・心配・共感 が同時に生じうる
反応の方向	retribution 否定的な反応・報復	reconciliation 関係修復や思いやりの行動
最終的な期待	emotional restoration 元の感情のバランス	relationship mantaince 関係の維持

以上のように、angry と giận の発生プロセスには根本的な違いがある。

次節では、この違いが両語の使用とその制約にどのように反映されているのかを見ていく。

5.3 親密さによる対象の制約

本節では、angry と giận が実際にどのような対象に向けて用いられるのかに注目し、特に「親密さ」が使用可能な対象範囲にどのような制約を与えるのかを検討する。

英語の angry は関係の親疎を問わず幅広く用いられるのに対し、ベトナム語の giận は親密さを前提とし、使用対象が強く制約される。そのため、親しくない相手に対して怒りを表す場合には、tức giận (「詰まる」+giận) のような迂言表現が選択されやすい。

以下では、giận における親密さの前提(5.3.1)と、広義の親密さによる用法の拡張(5.3.2)を検討する。

(I) 直接的な親密さの場合

ベトナム語の giận は、相手との親密さを前提とするため、使用できる対象が限られる。一方、英語の angry は、相手との関係の親疎にかかわらず比較的自由に用いることができる。

次の(1)は英語の例、(2)はそれに対応するベトナム語の例であり、どちらも「メリーが私の悪口を言った」状況を描いている。

(1) 英語 :

- a. 【メリーは私の親友である】(親密さが高い)

I got angry when Mary spoke ill of me.

- b. 【私はメリーのことが嫌いである】(親密さが低い)

I got angry when Mary spoke ill of me.

(2) ベトナム語 :

【メリーは私の親友である】

- a. Tôi giận Mary khi nó nói xấu tôi.

私 時 彼女 言う 悪い 私

【私はメリーのことが嫌いである】

- b. (??) Tôi giận Mary khi nó nói xấu tôi.

私 時 彼女 言う 悪い 私

c. Tôi tức giận với³⁵ Mary khi nó nói xấu tôi.
私 詰まる に対して 時 彼女 言う 悪い 私

(1a)は「Mary は私の親友である」という親密さの高い文脈を示し、(1b)は「私は Mary のことが嫌いである」という親密さの低い文脈を示している。しかし、いずれの場合でも angry の使用に違和感はなく、関係の親密さに左右されない。

一方、giận は親しい関係を前提とするため、(2a)のような親密さの高い文脈では自然に用いられるが、(1b)に対応する(2b)のように親密さの低い文脈では不自然となる。このような場合、話者は(2c)の tức giận³⁶ với (「詰まる」+giận+「～に対して」) のような迂言的表現を用いることが自然であり、この表現では親しい関係が前提とはならない。

(II) 内集団意識・役割共有により拡張された親密さの場合

giận は本来、親密な対人関係を前提とする語であるが、その「親密さ」は血縁的・個人的な関係に限られない。「同じ民族」「同じ立場」「同じ役割」といった社会的な枠組みを共有することで、互いに果たすべき行動や期待が成立しているとみなされる場合には、その共有された期待が親密さの働きを担い、giận の使用が自然となる。

例えば、次の例(3)と(4)を見ていく。

³⁵ tức giận với は、tức (詰まる) + giận からなる複合語であり、原因の対象に対して với (～に対して) という前置詞を伴って用いられる。この với の使用により、自分と相手の存在が感情の中で明確に区切られ、自分と相手の存在を切り離していると感じられる。

³⁶ tức giận (「詰まる」+ giận) 以外にも、ベトナム語には「怒り」の度合いやエネルギーの強さ、表出の様態に注目した複合語が多く存在する。たとえば、nổi giận (「起こる」giận)、giận dữ (giận「激しい」)、giận điên (「狂う」giận)、nóng giận (「熱い」giận) などが挙げられる。これらの複合語は giận と異なり、使用対象との親密さにあまり左右されず、広範な文脈で用いられる傾向がある。

さらに、Vietlex コーパス（主に小説などの文学作品を中心に構成）での分析に加え、実際の使用頻度を確認するために、インターネット記事を中心とするコーパス Dự Án S (S プロジェクト) (s.ngonnguhoc.net, 2000～2024 年収録) を調査したところ、以下のような件数が得られた：tức giận (「詰まる」+ giận) 54,290 件、giận dữ (giận「激しい」) 25,727 件、nổi giận 11,644 件 (「起こる」giận)、nóng giận (「熱い」giận) 6,272 件、giận điên (「狂う」giận) 93 件。これにより、tức giận が最も広く使用されている。

- (3) 【ベトナム人は、生まれ育った村や同郷といった狭い範囲では、家族や親戚同様の強い結びつきと助け合いの精神を持つ。しかし、その枠を越えると、互いを「よそ者」とみなし、時には競争や嫉妬の感情が生じやすい。この傾向は海外においても現れ、「同じベトナム人なら助け合うべきだ」という暗黙の期待があるにもかかわらず、それが裏切られたときに失望感が大きくなる」】³⁷

Đây cũng là lý do người Việt còn giận người Việt lâu đến thế.
これ も は 理由 ベトナム人 まだ ベトナム人 長い そんなに
「これも、なぜベトナム人がベトナム人を長く giận し続けるのかという理由である。」

- (4) 【女優さんは、「自分も母親だからこそ、子どもが捨てられるニュースを見ると強い giận を感じる」と述べ、実の母親に捨てられた赤ちゃんの事件に深く憤った。】³⁸

Tôi rất giận người mẹ của bé An.
私 とても 人 母 の アンちゃん
「私はとても兄ちゃんのお母さんに怒っている」

(3)(4)のいずれの文脈でも、話者と対象のあいだに「同じ集団に属している」「同じ役割を担っている」といった関係が明示化され、その共有された役割に基づく心理的な親密さが giận を可能にしている。

(3)の「ベトナム人はベトナム人を長く giận し続ける」という現象は、「同じ民族なら助け合うべきだ」という内集団規範が共有されているにもかかわらず、互いに助け合わず、むしろ期待に反する行動が見られたときに生じた giận である。一方、(4)の女優の発言は、「母親なら子どもを守るべきだ」という役割期待を共有する立場から生じた giận であり、母親として当然果たすべき子どもの保護・養育がなされなかったときに表出している。ここでの giận は、怒りの度合いを示すためではなく、「本来果たすべき役割を果たさなかったのは相手である」という点を強く指し示す機能を持つ。

³⁷ <https://vietnamnet.vn/nguoi-viet-doan-ket-trong-nha-ghet-nhau-ngoai-ngo-279206.html>

³⁸ <https://znews.vn/nhung-cau-chuyen-bao-chi-khien-sao-viet-an-tuong-am-anh-post1098223.html>

5.4 angry と giận における怒りの焦点と含意

次に、angry と giận における関係が、怒りの発生原因の捉え方にどのように影響するのかを検討する。

5.4.1 angry と giận における怒りの出発点の違い

まず、図 8 に示された angry と giận の出発点を見ると、両語で「怒りの出発点（感情の起点）」の置き方が異なる。

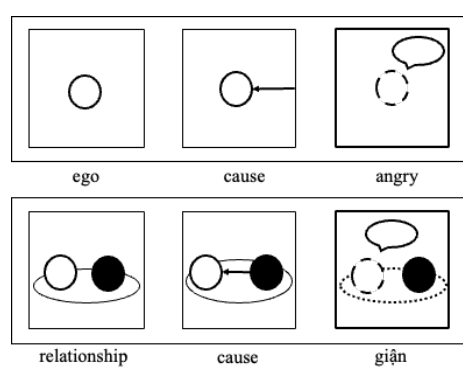


図 8 : angry と giận の怒りの出発点

angry は自己 (ego) を中心とし、「自分が不当に扱われた」「権利が侵害された」と感じたときに喚起される。すなわち、怒りの焦点は自己への攻撃にあり、相手の事情や背景はあまり考慮されない。一方、giận は関係 (relationship) を出発点とする怒りであり、①相手との親しい関係が揺らいだとき、または②相手が自分自身を傷つけていると感じられるときに生じる。いずれの場合も、怒りの焦点は自己への攻撃ではなく、関係に生じたゆがみや相手への心配と結びついている点に特徴がある。

このような出発点の違いは、同じ出来事であっても、angry と giận を用いる場合には感情の捉え方が異なることにつながる。すなわち、両語の選択によって、話者がどこに焦点を置いて出来事を理解しているのかが変化する可能性がある。次の節で、例文を見ながらその違いを確認できる。

5.4.2 怒りの焦点と含意の変化

(I) 相手の事情を考慮しない場合の怒りの解釈

例(5)では、「この人が私のお金を取った」という同一の出来事を表している。怒りを表す場合、英語の *angry* には(5a)のように基本的に一つの言い方しかなく、怒りがどのような関係性の相手に向けられているかまでは区別されない。一方、ベトナム語では *giận* の用法が二つに分かれる。(5b)の *giận* を用いる場合は、「お金を取った相手が身近な人物である」という感覚を伴って受け止められるのに対し、(5c)の *tức giận với* は親密さを必ずしも前提とせず、相手が身近な人物かどうかを示さない怒りを表す。

(5) 【この人が私のお金を取った。】(作例)

a. 英語 : I feel angry with this person.

b. ベトナム語 : Tôi cảm - thấy giận người này.
私 感じる-見える 人 この

c. ベトナム語 : Tôi cảm-thấy tức giận với người này.
私 感じる-見える 詰まる に対して 人 この

このような原因に対して、次の(6)の含意が考えられる。

angry は「自分が不当に扱われた」「権利が侵害された」と感じたときに喚起されるため、望まれる結果は相手が不当行為を元に戻すことであり、本例では「盗まれたお金を返してほしい」という要求に収束する。したがって (6a) の解釈は文脈として自然であり、そこに相手との関係や行為への失望といった追加的な含意は生じない。

一方、(6b)の *giận* でも「返金してほしい」という要求は同様に生じるが、*giận* が親しい関係を前提とするため、その要求には行為への失望や「返さないなら関係が損なわれかねない」といった含意が喚起されやすい。これに対して、(6c) の *tức giận với* は親密さを前提としないため、関係的含意は生じず、追加情報がなければ、英語の *angry* とほぼ同様に「返金してほしい」という要求にとどまる。

(6) a. 英語 : I feel angry with this person. I want him to pay back the money he stole from me.

b.ベトナム語：Tôi cảm-thấy giận người này.

私 感じる-見える 人 この

Tôi muốn anh ta trả cho tôi số tiền anh ta đã lấy.

私 欲しい 彼 返す 私 お金 彼 取った

c.ベトナム語：Tôi cảm-thấy tức giận với người này.

私 感じる-見える 詰まる に対して 人 この

Tôi muốn anh ta trả cho tôi số tiền anh ta đã lấy.

私 欲しい 彼 返す 私 お金 彼 取った

(II) 相手の事情を考慮した場合の怒りの解釈

しかし、同一の出来事であっても、相手の事情を知ったうえで感情を捉える場合には、angry と giận の機能は大きく異なる様相を示す。

たとえば、例(7)のような状況を考えてみよう。

(7) 【この人が私のお金を取ったが、その後、この人がリストラで収入がなく、生活に困ってやむを得ずしたことだと分かった。】(作例)

a.英語：(??) I feel angry with this person.

I wish he had told me earlier, I would have helped him.

b.ベトナム語：Tôi cảm - thấy giận người này.

私 感じる- 見える 人 この

Phải chi anh ấy nói cho tôi biết sớm hơn

なら 彼 言う に 私 知る 早い より

để tôi giúp đỡ.

ため 私 助ける

c.ベトナム語：(??)Tôi cảm - thấy tức giận với người này.

私 感じる- 見える 詰まる に対して 人 この

Phải chi anh ấy nói cho tôi biết sớm hơn

なら 彼 言う に 私 知る 早い より

để tôi giúp đỡ.

ため 私 助ける

例(7)では、「お金を取られた」という行為が(6)の怒りの直接原因である点は共通している。しかし同時に、「相手が困窮していたため、やむを得ずその行為に及んだ」という事情が明らかになったことで、話者は相手の状況を理解し共感を向ける立場に置かれる。このとき、怒りの焦点は「お金を取られたこと」そのものよりも、「なぜ相談してくれなかったのか」「自分を信頼してくれなかったのか」といった、相手を思いやる立場から生じる失望と心配が怒りとなって表れる。ここでは、angry と giận の使用の違いが、感情の焦点および関係の捉え方の違いとして明確に現れる。

英語の angry は、自己の権利や期待が侵害されたときに喚起されやすく、感情の焦点はあくまで「自分が不当に扱われた」という点に置かれる。そのため、(7a)のように、相手への配慮や支援の意図をすぐ後に続けると、感情の流れとして矛盾をきたし、不自然になる。

一方、(7b)のベトナム語の giận は、相手との親しい関係を前提とし、そこで築かれている信頼や思いやりが損なわれたときに生じる感情である。したがって、怒りの焦点は「お金を取られたこと」そのものではなく、「話してくれなかったこと」に向けられる。つまり、怒りが相手への心配や思いやりと並行して立ち上がるため、「もし話してくれていれば助けたのに」のような含意は、giận の文脈では自然に理解される。

なお、この段階では(7c)の tức giận với も不自然となる。tức giận với は相手との関係を前提としない怒りを表すのに対し、本例の感情は関係のすれ違いに基づいて生じているためである。

(III) 相手の事情を踏まえた giận の実例

(II)で示したような「相手の事情を考慮したうえで生じる」giận は、コーパスの実例からも確認できる。

例(8)は、父親である大佐が前線の山岳基地に息子を訪ねた場面である。息子は過酷な環境の中でやせ細っていたが、「もう慣れた」と淡々と答え、弱さをまったく見せなかった。その姿を目にした父は、深い愛情を抱くと同時に、「なぜ自分に頼ってくれないのか」「なぜ心を開いてくれないのか」というもどかしさから怒りを感じたのである。

- (8) 【偵察任務に就く息子を訪ねて、父親である大佐が山岳地帯の前線基地を訪れる。過酷な環境の中でやせ細りながらも、「もう慣れた」と淡々と答える息子の姿に、父は心配ながらも、息子が家族に頼らず、無理をしていることに怒った。」】

a. ベトナム語： Ông vừa thương con vừa giận nó. ³⁹

父 同時に 心配する 息子 同時に 彼（息子）

この場合の怒りは、むしろ父親は、息子の立場に身を置き、その過酷さと苦しさを理解したうえで、「それほどつらいのに、なぜ頼ってくれないのか」「なぜ自分を大切にできないのか」と感じたことから怒りが生じているのである。

このように、giận は相手への思いやりや愛情と並行して立ち上がる感情であるため、thương（心配）と共にしても違和感は生じない。むしろ、thương が伴うことで、giận に内在する「相手を案じる気持ち」という含意がより明確に浮かび上がる。

5.5 angry と giận における怒りの後続行動の特徴

最後に、「怒り」の後にどのような行動が選択されるのかに注目し、英語の angry とベトナム語の giận の差異を考察する。

5.5.1 angry と giận における後続行動の方向性の違い

angry と giận は、怒りが生じた後にどのような行動に展開しうるかという点で、意味構造上の異なる制約をもつ。すなわち、両語は「怒りの後続反応の動機づけ」を根本から異にしている（図 9）。

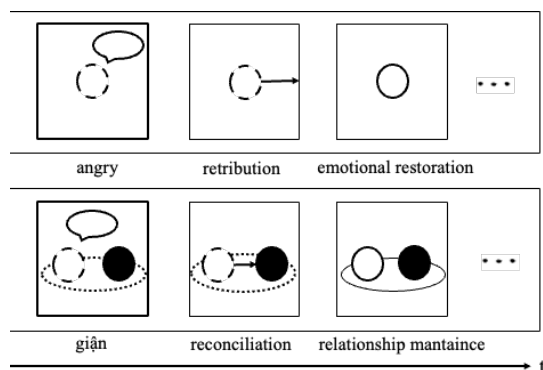


図 9：angry と giận の後続行動

³⁹この例文は VIETLEX コーパス から引用したものである。

angry は、自己の権利が侵害されたという感覚から生じる怒りであり、発生した時点で話者の内的均衡は崩れている。そのため、後続行動は「自分のため」に向かい、失われた均衡・利益を取り戻す、もしくは不当行為に対処する方向へ進む。原因が自己の不利益である以上、行動もそれを回収する方向で一貫していなければならない、相手への思いやりや支援といった「相手のため」の肯定的行動へ展開すると、感情の流れとして矛盾をきたす。

これに対し **giận** は、相手との親しい関係を前提として生じる怒りであり、「この関係の相手だからこそ生じる」という感情構造をもつ。そのため、後続行動も自分のためではなく、相手により良い状態でいてほしいという含意を伴って展開する。具体的には、相手に行動を改めてほしいというサインとして表れるだけでなく、話者自身が相手を助けたり支えたりする肯定的行動へ転じることさえある。したがって、怒ったあとに行動が「相手を守る」方向へ展開しても、感情の流れとして矛盾は生じない。

5.5.2 同一文脈における **angry** の制約と **giận** の許容

次に、こうした意味構造の違いが、具体的な文脈において怒りの後続行動にどのような制約をもたらすのか、例文を用いて検討する。

(I) 心配文脈における **angry** の後続行動の制約

5.5.1 で示した方向性の違いは、例(9)における談話展開に明確に影響している。

例(9)は、「相手を心配する気持ち」と結び付いた怒りである。具体的には、夫ジョンが家族のために過度な残業を続け、妻である語り手が「無理をしないでほしい」と繰り返し伝えても、彼が態度を改めようとしない状況である。ここでの怒りは、自分が損なわれたからではなく、「大切な相手が自分を犠牲にしてまで無理を続け、健康を害するかもしれない」という懸念から生じている。

- (9) 【ジョンは家族のためにずっと残業している。妻の私は、彼に無理をしないでと何度も言ったが、彼はシフトを減らそうとしない。】(作例)

a. 英語 : (??) I'm angry with John for his overworking.

I'm afraid that that he'll burn out if he keeps this up.

I decided to prepare a meal to help him recover. (談話として全く不自然)

b. ベトナム語

Tôi vừa giận John vì đã làm việc quá sức,
私 ながら ので 仕事をした 過度に
vừa sợ anh sẽ kiệt sức nếu tiếp tục
ながら 心配する 彼 もうすぐ 疲れ果てる なら 続ける
Tôi đã chuẩn bị cho John một bữa ăn để anh bồi bổ.
私 準備した あげる 一 食事 ため 彼 元気になる
(談話として全く自然)

まず、**angry** は自己の不利益を出発点として生じる怒りであり、後続行動は「自分のため」に向かい、失われた均衡・利益を回収する方向へ展開する。このため、感情の流れは原則として否定的・拒否的方向に進み、そのような性質の行動が後続すると予測される。したがって、(9a)のように **angry** のすぐ後に「夫のために食事を作る」といった相手への思いやりを接続すると、怒りの動機（自己の不利益）と後続行動（相手の利益）が食い違い、談話全体の感情の流れに矛盾が生じる。

一方、(9b)のベトナム語の **giận** は、相手との親しい関係を前提として生じる怒りであり、「相手により良い状態でいてほしい」という含意を内包している。そのため、後続行動は「相手や関係のため」に向かう可能性が予測され、怒りと同時に「相手を案じる心情」が共存し得る。したがって、**giận** の後に「心配している」「回復のために食事を用意する」といった思いやりの行動が続いても、感情の流れとして自然であり、談話全体に矛盾は生じない。

(II) コーパスにみられる「怒りと心配の併存」を可能にする **giận** の用例

また、例(9)で見たような、怒りと相手への心配が同時に立ち上がる用法は、コーパスにおいても確認できる。以下の例(10)はその具体例である。

- (10) 【シャンプーと間違えて殺虫剤を使ってしまった弟ウットコーを病院に連れて行った姉へオは、「ウットコーが殺虫剤を飲まなかっただけ良かった」と言いつつ、「殺虫剤の風呂に入るなんて馬鹿ね。あいつ、シャンプーだと思ったのね」と文句を言った。

ヘオは、弟を見ると、怒りと共に心配が湧いた。その後、ヘオは、弟にお粥を食べさせ、弟を抱きながら眠った。】

Chị Heo nhìn nó vừa giận vừa thương.⁴⁰

ヘオ 見る あいつ ながら ながら 心配する

「ヘオは、弟を見ると、怒りと共に心配が湧いた。」

例(10)に見られる場面は、弟の不注意に対する怒りと、弟の身を案じる強い心配が同時に生じている点に特徴がある。ここで用いられている *giận* は、相手を敵視する感情ではなく、関係の中で生じる怒りであり、「相手がより良い状態でいてほしい」「危険から守りたい」という含意を内包している。そのため、怒りは表面的には不注意を咎める叱責として現れているが、同時に姉は弟の立場に身を置き、危険にさらされていた状況や辛さを想像しているため、「無事でいてほしい」という思いやりが感情の動機として働いている。

そのため、ヘオは弟を叱りながらも、お粥を食べさせ、抱きながら眠るといった支援行動へと展開している。すなわち、怒り→相手のケアあるいは関係維持へと移行することが自然に許されている。この「怒りと心配（思いやり）が併存し、相手のケアに行動がつながりうる」という点こそ、*giận* の顕著な特徴である。

5.6 まとめ

本章では、対人関係によって生じる英語の *angry* とベトナム語の *giận* の使用のあり方を比較した。その結果、両語はいずれも「怒り」を指すものの、その成立には異なる関係的前提が関わっており、発生プロセス・対象範囲・怒りの焦点・後続行動に至るまで連続的な違いが見られた。すなわち、*angry* は「自分 vs 相手」という対立構造のもとで自己の権利侵害を契機に生じ、後続行動も自己側の均衡回復へ向かいやすいのに対し、*giận* は親密な関係の揺らぎを起点として生じ、「相手により良い状態でいてほしい」という含意を伴うため、怒りが心配・思いやりと併存し、相手を気遣う行動へ展開しても矛盾しないという特徴が見られた。

⁴⁰ この例文は VIETLEX コーパス から引用したものである。

こうした結果は、感情語の意味を Wierzbicka (1992a) の NSM 理論が示す「悪い行為 → 不快感 → 加害的反応」という一方向的スクリプトだけで説明するには十分ではないことを示唆している。特に、*giận* に見られる「怒りと心配の併存」や「怒りから相手への配慮行動への自然な移行」は、このような直線的モデルでは扱いきれない側面であると言える。

本章の検討から、感情語の意味は語彙的特徴だけでなく、話者と対象との関係性・背景的状况・期待の種類といった文脈的要因が、「どのような状況で使用が許容されるか」「どのような解釈が立ち上がるか」「怒りの後続行動がどの方向へ展開しうるか」といった使用制約を生み出すことによって形づくられることが示唆された。したがって、感情語を分析する際には、単一のスクリプトに還元するのではなく、こうした要因を含めて記述することで、言語間に見られる差異をより適切にとらえることができると考えられる。

次章では英語の *love* とベトナム語の *thương* を取り上げ、両語における意味構造の特徴を比較する。

第6章

love と thương が向けられる対象とその中心化される側面

6.1 はじめに

本章では、論点③「関連概念の中心性に見られる言語間差」に着目し、英語の love とベトナム語の thương における愛情が誰に向けられ、どの側面が中心化されるのかを比較することを目的とする。

第2章で見たように、Kövecses (1991, 2000) のメタファー理論では、「愛情」のモデルはロマンチックラブをプロトタイプとし、liking・affection・caring など複数の関連概念から成るネットワークとして記述されている。関連概念は「中心—周辺」の連続体として構成され、中心となるのは liking とされている。しかし、このモデルは西洋文化の価値観を前提としているため、それをベトナム語のような他言語に適用すると、各言語が固有にもつ「愛情」の概念的特徴を十分に捉えきれないという問題が残る。

越英辞書では一般に、ベトナム語の thương は英語の love に相当する語として記述されている (Từ điển Việt-Anh 『ベトナム語英語辞典』、p.721)。しかし、辞書上の対応だけでは両語の意味構造や使用実態を十分に捉えられない可能性がある。

本章では、love において中心となる関連概念が西洋文化の価値観を反映している可能性という観点から、英語の love とベトナム語の thương を比較し、相手に向けられる際に両語で中心となる関連概念が同一であるのか否かを踏まえて再検討する。

本章では、第4章で giận と angry の比較に用いた方法と同様に、次の3つの調査を通じて、両言語における「愛情」の語り方や意味構造について予備的なデータを得る。

(i) 自由記述による感情エピソードの収集：英語話者とベトナム語話者に対し、love と thương となる出来事や状況を自由記述形式で収集し、両言語文化における「愛情」経験の語り方の特徴を検討する。

(ii) 文完成課題による例文作成調査⁴¹：英語母語話者とベトナム語母語話者を対象に love (動詞) と thương (動詞) を含む文完成課題を実施し、愛情の対象の特徴やその対象への行為傾向 (= 相手に対して何をしたいと思うのか) を比較する。

⁴¹ なお、調査(i)および(ii)はサンプル数が限られているため統計的な一般化を目指すものではなく、各言語文化における「愛情」の語りや感情表現の一般的な傾向を明らかにし、調査(iii)の詳細な分析のための基礎資料とすることを目的とする。

(iii) コーパスデータ分析:実際の言語使用例に基づき、両言語における love と thương の対象の特徴および使用傾向を明らかにする。

最終的に、以上の調査を通じて得られたデータを基に、love と thương それぞれの特徴に整理する。

本章の構成は次の通りである。6.2 節では、自由記述課題に基づき、love と thương がどのような感情経験として語られるのかを検討する。6.3 節では、文完成課題による作例を分析し、両語における愛情の対象と相手への行為傾向の特徴を明らかにする。6.4 節では、コーパス用例の分析を通じて、love と thương が実際にどのような対象に向けて用いられ、どのような意味的特徴が焦点化されるのかを示す。6.5 節では、これらの結果を踏まえて Kövecses (1991、2000) の love モデルを再検討し、love と thương における関連概念の中心性の非対称性を論じる。6.6 節では、本章の考察結果を総括する。

6.2 調査 (i) : love と thương の感情経験の自由記述

本調査 (i) では、love や thương が話者にとってどのような出来事・感情経験を喚起するのかを把握するため、自由記述課題による予備的調査を実施した。英語とベトナム語における「愛情」の体験と語り方の特徴を比較することを目的とする。

【参加者】: 英語母語話者 1 名、ベトナム語母語話者 1 名。

【実験の流れ】: Google Form を用い、「親友に自身の体験を打ち明ける」という状況を想定し、love または thương を強く感じた出来事を母語で自由記述してもらった。記述には、感情を引き起こした対象と状況、そのときの感情的・身体的反応、相手に対して何をしたいと思ったのかという行為傾向を含めるよう依頼した。また、記述内容は実体験に限らず、他者の体験や創作でも差し支えない旨を伝え、自由な語りを促した。

【分析観点】: 以下の観点から語りの構成と表現の特徴を比較した。

- 愛情の対象と背景関係の明示度
- 感情の中心がどこに置かれているか
- 相手に対して何をしたいと思ったのかという行為傾向の表現

【結果】: 次の表 19 では、言語ごとのエピソードを示す。

表 19：母語話者による love と thương のエピソード（強調は筆者による）

アメリカ女性 30 代
One time <u>I felt love</u> was several years ago, when I was living with my long-term boyfriend in a house in the countryside. We spent most of our free time together, doing almost everything side by side : grocery shopping, cooking, even taking baths. It often felt like we were one person rather than two separate individuals. Although we had different hobbies and interests, we got along well and laughed a lot. He was taller than me and a few years older, but sometimes he acted a bit childish, so I often felt like I was taking care of him. Still, it didn't matter because we both took care of each other. In many ways, we truly needed each other to survive. One memory that stands out is our bedtime routine. We shared a large bed with soft green linen sheets. Once in bed, I would rest my head on his chest and listen to his heartbeat while he held me in his arms. We would grow sleepy together, and just before drifting off, we would whisper "<u>I love you.</u>" In those moments, I felt safe, happy, and warm, cozy in bed with no need to worry about what was happening outside or what tomorrow would bring. All that mattered was that we were together.
ベトナム男性 20 代 ⁴²
When you say "thương", it reminds me of when my grandma was still alive. Ever since I was little, she took care of every little thing for her children and grandchildren. She always worried about us and never cared about herself. Back when I was still working as a delivery driver, I would sometimes stop by to visit her. Every time I came, she would ask, 'How much did you make today, my child?' Just hearing that question made me feel so genuinely cared for. Later on, when she gradually became weaker, simply looking at her would bring back all the memories of the time we lived together. And when I thought about her cancer, knowing how

⁴²なお、ベトナム語話者の記述はすべてベトナム語で回答されたが、本稿では分析の便宜上、筆者により英訳されたものを用いている。

quickly that illness progresses, **all I could do was pray that she wouldn't suffer and that she could have as many painless days as possible.**

Sometimes just looking at her and thinking about all of that made my tears fall before I even realized it. I understood what was happening, and I felt completely helpless because there was nothing I could do.

And that's why, to me, **thương is when you recognize and truly feel the “tình thương”（「情」 + thương） and care someone has given you, over and over again. It becomes something so familiar and deeply imprinted that just looking at them is enough for you to feel it.**

【考察】：上記のエピソードから、英語母語話者とベトナム語母語話者では、「愛情」の経験や語り方に相違が見られる。どちらの語りにも「特定の相手に対して肯定的な感情を抱く」という点は共通しているものの、その感情の向け方、出来事の捉え方、語りの焦点には文化ごとの特徴が表れていることが示唆される。より詳細な検討については、表 20 と表 21 で扱う。

表 20 : love のエピソードの特徴

観点	英語の love
場面	数年前、長期的な恋人と田舎の家で同居していた時期。 日常的に買い物・料理・入浴などを共に行い、ほとんど常に一緒に過ごしていた。
感情の焦点	相手との日常生活の共有や相互のケア、身体的な親密さによって、安心感と一体感が育まれていた。 例：We spent most of our free time together, doing almost everything side by side. We would whisper ‘I love you.’
表現の特徴	そのような関係性の中で実際に経験された感覚は、相手との一体化、安心、幸福、温かさである。 例：It often felt like we were one person rather than two separate individuals. “In those moments, I felt safe, happy, and warm.”

	“In many ways, we truly needed each other to survive.” “we” “together” “each other” など、相互性を強調する表現が多用されている。 全体を通じて「関係性の親密さ」と「共にある幸福」が中心。語り手は自分の感情よりも「二人での経験」を繰り返し述べている点が特徴的。 例：We spent most of our free time together, doing almost everything side by side. It often felt like we were one person rather than two separate individuals.
望む結果	相手と共に過ごし、幸福と安心を持続すること。将来や外部の出来事よりも「今ここで一緒にいる」ことに価値を見出している。 例：All that mattered was that we were together.
物語の志向	二人の関係性と共有体験に焦点が置かれている。 相互的な親密さの理想化が物語の主軸。

英語母語話者の自由記述では、love は「恋人との親密な関係性」を軸として語られていた。語りの中心は、日常生活の共有や相互のケア、そして身体的な親密さであり、それらによって「安心感」「幸福感」「温かさ」といったポジティブな感情が生み出されている。特に we were one person rather than two separate individuals という表現に見られるように、相手との一体化や関係の融合が強調されていた。また we、together、each other といった相互性を示す語が繰り返し用いられ、語り手の個人的感情よりも「二人での経験」そのものが中心に据えられている点が特徴的である。さらに、料理や買い物などの日常的営みの共有といった二人の習慣の描写も見られ、これらの細部が関係の親密さを理想化し、二人の生活を一体化させる象徴的な営みとして機能している。この love のエピソードは、Kövecses (1991) が指摘する典型モデルであるロマンチックラブをきわめてよく体現している。語りの随所に、親密さ・切望・幸福感といった要素が織り込まれており、恋人との関係性を理想化し、二人の世界を完結させるような描写が一貫して見られる。

次に、ベトナム語のエピソードを確認する。

表 21 : thương のエピソードの特徴

観点	ベトナム語の thương
場面	祖母は長年家族に尽くし、語り手を気遣い続けた人物である。 病で衰弱する姿を前に、語り手は過去の記憶と祖母の献身を思い出す状況が描かれる。
感情の焦点	中心は語り手自身の悲しみではなく、祖母の苦労・弱さ・痛みへの共感と、何もできない無力感である。 例：“she took care of every little thing for her children and grandchildren. She always worried about us and never cared about herself.” “Every time I came, she would ask, ‘How much did you make today, my child?’”
表現の特徴	語り手は自分の感情を直接述べるよりも、祖母の行為・献身・弱りゆく姿を丁寧に描写する。 “she”、“her”、“grandma”など、対象（相手）を中心に据える指示語が繰り返し用いられている点が特徴的である。 語り手は祖母の苦しみや病状を具体的に描き、その痛みに寄り添う形で感情が喚起されている。 “Sometimes just looking at her and thinking about all of that made my tears fall before I even realized it.”
望む結果	祖母が苦しまないこと・痛みの少ない日々を過ごせること “And when I thought about her cancer, knowing how quickly that illness progresses, all I could do was pray that she wouldn’t suffer and that she could have as many painless days as possible.”
物語の志向	相手が歩んできた時間や抱えてきた負担・弱さに焦点が置かれている。 相手の人生とその苦労に寄り添う視点が物語の軸となっている。

英語のエピソードとは対照的に、ベトナム語母語話者の自由記述では、*thuong* は「恋愛関係」ではなく 祖母の苦勞と衰弱を軸として語られていた。語りには祖母という対象が繰り返し登場し、彼女が長年家族のために尽くしてきたこと、そして病によって徐々に弱っていく様子が丁寧に描写されている。語り手の関心の中心は「自分と相手の幸福」ではなく、祖母の痛みや負担への共感 に向けられている点が特徴的である。このエピソードには、英語の *love* に見られた親密さや幸福感といった要素はほとんど確認できない。むしろ感情の焦点は、現在の苦しみだけでなく、これまで祖母が担ってきた負担や語り手に対する愛情そのものに置かれ、語り手は祖母の痛みを自分のことのように受け止めながら、「悲しみ」「心配」「思いやり」「感謝」といった感情を表現している。

【理論的含意】

本節の調査結果から、英語話者とベトナム語話者はいずれも「特定の相手に対して肯定的な感情を抱く」という点では共通していた。しかし、その相手のどの側面に心が動かされ、語りの中で何を中心に据えるのかという点では明確な相違が見られた。つまり、両者は単に同一の「愛情」として理解しているのではなく、それぞれ異なる性質をもつ感情として捉えている可能性がある。言い換えれば、各感情語には固有の意味構造があり、その違いが語りの焦点化の差異として表れていると考えられる。

意味とは、客観的状況がそのまま言語化されるのではなく、話者が状況をどのように概念化し、どのような表現を選択するかによって構築されるものである (Langacker 1987 : 35)。この観点に立てば、本節で示唆された *love* と *thuong* の違いは、自由記述における語りの傾向だけにとどまらず、実際の言語使用にも反映されることが考えられる。したがって、両語の使用実態を精査することで、その言語において何が「愛情」とみなされ、どのようなあり方が「愛情」として受け止められているのかを明らかにできる。

次節では、自由記述で観察された特徴が、より制御された条件下でも確認できるのかを検討するため、予備調査(ii)として文完成課題を実施する。

6.3 調査(ii) : love (動詞) と thương (動詞) を用いた例文作成

本節では、6.2 節で示唆された love と thương の概念化の違いが、より制御された条件下でも観察されるかを検証するため、感情語を含む文完成課題による調査を行った。

【目的】: 英語の love とベトナム語 thương において、「愛情」の経験がどのような対象と結びつき、その対象に向けてどのような行動と関連づけられるのかを比較することで、両語の語用的特徴および文化的な位置づけを明らかにする。

【参加者】: 英語母語話者 8 名 (10~50 代)、ベトナム語母語話者 8 名 (いずれも 20 代) を対象とした。いずれも日常的に該当言語を使用している者である。

【課題の流れ】: 各参加者には、それぞれの母語に対応した形式で、感情語 love または thương を含む例文を作成してもらった。文の形式は以下の通りである。

(1) 英語

a. I loved (誰か／何か／ある瞬間) because (理由) .

b. I loved (誰か／何か／ある瞬間) , so I (反応) .

(2) ベトナム語

a. Tôi (cảm thấy) thương (誰か／何か／ある瞬間) vì (理由) .

私 (感じ-見る) ので

b. Tôi (cảm thấy) thương (誰か／何か／ある瞬間) , nên tôi (反応) .

私 (感じ-見る) だから 私

【分析観点】: 収集した例文は、以下の 3 点から分析を行った。

- 愛情の対象のタイプ (恋人／家族／仲間／弱者など)
- 対象の性質 (親密さや理想化／共感や心配など)
- 相手に向けられる行為傾向 (何をしてあげたい・どう関わりたいと思うのか)

【結果】: ここでは、前述の文完成課題によって得られたデータをもとに、love と thương に関する作例の結果と示す (表 22 と表 23)。そして、それぞれの考察を 6.3.1 節および 6.3.2 示す。

表 22 : 英語の love (動詞) の作例

参加者	love の作例
女性 15 歳から 30 歳 コケージャン	I love my grandmother because she teaches me what it means to be a woman. I love my boyfriend so I buy him dinner.
女性 15 歳から 30 歳 コケージャン	I love Angel because she means everything to me and always treats me with respect and care. 2. I love Pokemon, so I keep playing it from childhood into adulthood.
女性 30 歳から 45 歳 アフリカ系米国人	I love standing on stage having Jim take a picture of me because I knew it makes him proud. I love seeing the huge squash in my garden so I show my husband on a video call since he's out of country right now.
女性 30 歳から 45 歳 コケージャン	I love my mom because she is my family. I love reading so I read a lot of books.
女性 45 歳以上 コケージャン	I love that movie because the plot and aesthetic are fun and unique. I love that cheese, so I always finish it.
男性 45 歳以上 コケージャン	I love my trip to Scotland because it brings back so many happy memories. I love my trip to Scotland, so I make arrangements to go again.
性別記載なし 15 歳から 30 歳 コケージャン	I love my cat because she is my first proper pet. I love my cat, so I give her lots of treats and special treatment.
性別記載なし 15 歳から 30 歳 コケージャン	I love my boyfriend because he is kind and understanding of me. I love worldbuilding, so I write articles about my fictional world.

表 23 : ベトナム語の *thương* (動詞) の作例

参加者	<i>thương</i> の作例
女性 20 代	Tôi cảm thấy thương đứa bé bán vé số giữa trưa nắng⁴³, vì em vẫn cố gắng mưu sinh dù mồ hôi ướt đầm lưng áo. (私は正午の炎天下で宝くじを売っている子どもを <i>thương</i> と感じた。汗でびっしょり濡れているのに、それでも必死に生計を立てようとしていたからだ。) Tôi cảm thấy thương con mèo hoang trước cổng nhà, nên tôi đem cho nó chút đồ ăn và làm cho nó một chỗ trú mưa nhỏ. (私は家の門の前にいた野良猫を <i>thương</i> と感じ、少し食べ物を与え、小さな雨よけの場所を作った。)
女性 60 代	Tôi cảm thấy thương những đứa trẻ sống trong căn nhà tranh ở vùng cao, vì khi bị lốc xoáy hoặc nước từ trên núi tràn về sẽ không có chỗ trú ẩn và không có thực phẩm, không có nước uống. (私は山間部の藁葺きの家に住む子どもたちを <i>thương</i> と感じた。台風や山からの水が流れ込んできたとき、避難所も食料も水もないからだ。) Tôi cảm thấy thương những đứa trẻ ở vùng sâu vùng xa.. (一部省略) Do vậy khi có đoàn tổ chức thiện nguyện tôi đều gửi 1 ít để mong làm ấm lòng bọn trẻ (私は山奥に住む子どもたちを <i>thương</i> と感じた。そのため、慈善団体が活動するときには、少しでも子どもたちの心が温まるように寄付をしている。)
男性 20 代	Tôi thương một người bạn vì họ không ngại thời tiết, thu xếp công việc để có thể đến gặp và hẹn hò với mình. (一部省略) (私はある友人を <i>thương</i> と感じた。天候をものともせず、仕事をやりくりして私に会いに来てくれたからだ。) Tôi thương mẹ tôi vì sự chăm sóc, quan tâm dù tôi đã trưởng thành nhưng với mẹ, tôi mãi là đứa trẻ không bao giờ lớn. (一部省略) (私は母を <i>thương</i> と感じた。私が大人になった今でも、母にとって私は決して大きくなならない子どものままだからだ。)

⁴³ ベトナムでは、家庭の経済的事情などから、子どもが学業と並行してあるいは学校に通えないまま、宝くじの束を手を持ち、街頭を歩き回りながら販売して家計を支える場合が多くある。

男性 20 代	Mình thương con mèo nhà mình vì lúc nào em ấy cũng ở đây. (私は自分の飼い猫を <i>thương</i> と感じる。いつもそこにいてくれるからだ。) Mình thương bản thân mình rất nhiều nên mình luôn nhắc nhở bản thân phải ăn đủ 3 bữa 1 ngày, phải khỏe mạnh và phải kiếm được thật nhiều tiền. (私は自分自身をととても <i>thương</i> と感じるので、毎日三食を欠かさず食べ、健康を維持し、お金をしっかり稼ぐようにと自分に言い聞かせている。)
男性 20 代	Tôi cảm thấy thương những người già neo đơn nhìn thấy bên đường, vì ở tuổi này họ nên nhận được sự chăm sóc của con cái chứ ko phải đội nắng mưa mưu sinh vất vả. (私は道端で見かける孤独な高齢者を <i>thương</i> と感じた。本来なら子どもに世話されるべき年齢なのに、炎天下や雨の中で必死に生計を立てているからだ。) Tôi cảm thấy thương những đứa trẻ vô gia cư nên tôi luôn mua ủng hộ những tờ vé số hoặc mua cho chúng cái gì đó để ăn và uống. (私はホームレスの子どもたちを <i>thương</i> と感じたので、いつも宝くじを買ったり、食べ物や飲み物を買ってあげたりしている。)
男性 20 代	Tôi cảm thấy thương cháu tôi vì ngày nào cháu cũng làm tôi cười. (私は甥を <i>thương</i> と感じる。なぜなら、毎日私を笑わせてくれるからだ。) Tôi thương gia đình tôi nên tôi thấy hạnh phúc khi được ở bên họ. (私は家族を <i>thương</i> と感じるので、一緒にいられると幸せを感じる。)
男性 20 代	Tôi cảm thấy thương cha mẹ, vì đã giành tất cả những gì tốt đẹp nhất cho tôi mà không cần tôi phải đền đáp. (私は両親を <i>thương</i> と感じる。なぜなら、両親は私に見返りを求めず、常に最良のものを与えてくれたからだ。) Tôi cảm thấy thương cha vô cùng khi thấy cha rất vui khi nhận được món quà đầu tiên từ tôi, nên tôi đã cố gắng làm việc hơn nữa để có thể giúp đỡ được cho gia đình, để cho cha có nhiều khoảnh khắc vui vẻ hơn nữa. (私は父をととても <i>thương</i> と感じた。私から初めてのプレゼントを受け取ったとき、とても嬉しそうにしていたからだ。そのため、父にもっと楽しい瞬間を与えられるよう、私はさらに一生懸命働き、家族を支えようとした。)

男性 20代	Tôi thương mẹ tôi vì mẹ nuôi lớn và dạy dỗ tôi để tôi có được ngày hôm nay. (私は母を <i>thương</i> と感じる。母は私を育て、教育して、今日の私にしてくれたからだ。) Tôi thương bản thân mình nên tôi sẽ đi ngủ sớm để không phải hối hận khi sức khỏe suy giảm. (私は自分自身を <i>thương</i> と感じるので、健康を損なって後悔しないように、早く寝るようにしている。)
-------------------	--

6.3.1 love の作例の考察

(I) love が向けられる対象の種類とその特徴

英語母語話者の作例では、love は主に二つの方向に向けられていた。一つは、親密な関係にある相手であり、もう一つは、自己に喜びや満足をもたらす対象である。いずれの用例においても、英語 love を成立させている中心には「対象を好ましいと感じる」という要素が前提として存在している。以下の例(3)~(4)に具体的に表れている。

(3) I love my grandmother because she teaches me what it means to be a woman.

(4) I love Angel because she means everything to me and always treats me with respect and care.

(関係性に基づく好意)

(5) I love that movie because the plot and aesthetic are fun and unique.

(6) I love my trip to Scotland because it brings back so many happy memories.

(快さや幸福感に基づく好意)

(3)と(4)では、love の対象は「親密な関係にある相手」として描かれている。いずれの例にも、「相手そのものを好ましく感じ、関係性を大切に思う気持ち」が中心に据えられている。(3)では、祖母という身近な存在に対し、人生の価値観や生き方を教えてくれるという行為への敬意と感謝が love を支えている。一方、(4)では、恋人が「自分にとってすべて」であり、尊重や思いやりを基盤とした相互的な支え合いが love の核となっている。

これに対して、(5)と(6)では、love の対象は「自己に喜びや満足をもたらすモノや経験」として描かれている。両者に共通するのは、「対象そのものから得られる快さや幸

福感」によって love が成立している点である。(5)では、映画のストーリーや美的要素の独自性がもたらす純粋な楽しさが love の根拠となっている。(6)では、スコットランド旅行が、幸福な体験や思い出を想起させることで love を喚起している。

いずれの例においても、対象がもつ特質が語り手にとって固有の価値として受け止められている点がうかがえ、このような価値づけが love の成立に関与している可能性が示唆される。これは、Kövecses (1991、2000) が英語のモデルにおける中心的関連概念として指摘した liking (好ましさ・好意) と無理なく関連づけて理解でき、作例における love が「価値ある対象への好意」を基盤として表現されている可能性を示唆している。

(II) love に伴って相手に向けて生じる行動傾向

英語母語話者の作例では、love に伴う行動傾向は大きく二つに分けられる。一つは自分が好きな対象との関わりを深めたいという方向、もう一つは相手を喜ばせたいという方向である。以下の(7)～(10)の作例にその特徴が示されている。

(7) I love Pokemon, so I keep playing it from childhood into adulthood.

(8) I love worldbuilding, so I write articles about my fictional world.

(自分の楽しさ・充足感を維持・発展させたいという方向)

(9) I love my boyfriend so I buy him dinner.

(10) I love my cat, so I give her lots of treats and special treatment.

(相手を喜ばせたい・幸せにしたいという方向)

(7)と(8)では、love の対象は「自分に喜びや満足をもたらすもの」であり、そこから生じる行動は、その楽しさや創造性を維持・発展させるためのものである。ポケモンを継続してプレイし続けることや、空想世界の記事を書くことは、いずれも「その対象が好きだからこそ続けたい」「もっと関わりたい」という感情に基づく。つまり、love が語り手自身の幸福や快さを支える行動へと転化している。

一方、(9)と(10)では、love の対象は「親密な関係にある生きた相手」であり、そこから生じる行動は「相手に喜びを与える」ことに向けられている。恋人に食事を奢る、

ペットにご褒美を与えるとといった行動に共通するのは、相手が幸せになることそのものが語り手にとって価値をもつ点である。ここでは、love が思いやりや配慮に基づく「相手を大切に扱いたい」「相手を喜ばせたい」という行動として具現化している。

6.3.2 thương の作例の考察

次に、ベトナム語の例文の特徴を見ていく。

(I) thương の対象とその特徴

ベトナム語母語話者の作例では、thương の対象は一貫して「人間（あるいは生き物）」に限られており、英語の love のように映画・旅行・趣味などモノや経験に向けられることはなかった。そのうえで、thương は親密な相手だけでなく、話者と直接の関係をもたない弱い立場の他者にも向けられうるという点に特徴が見られた。

以下の(11)~(14)はその例である。

(11) Tôi thương mẹ tôi vì mẹ nuôi lớn và dạy dỗ tôi để tôi có được ngày hôm nay.

(私は母を thương と感じる。母は私を育て、教育して、今日の私にしてくれたからだ。)

(12) Mình thương con mèo nhà mình vì lúc nào em ấy cũng ở đây.

(私は自分の飼い猫を thương と感じる。いつもそこにいてくれるからだ。)

(身近で自分を支えてくれる存在)

(13) Tôi cảm thấy thương những người già neo đơn nhìn thấy bên đường, vì ở tuổi này họ nên nhận được sự chăm sóc của con cái chứ ko phải đội nắng mưa mưu sinh vất vả.

(私は道端で見かける孤独な高齢者を thương と感じた。本来なら子どもに世話されるべき年齢なのに、炎天下や雨の中で必死に生計を立てているからだ。)

(14) Tôi cảm thấy thương đứa bé bán vé số giữa trưa nắng, vì em vẫn cố gắng mưu sinh dù mồ hôi ướt đầm lưng áo.

(私は正午の炎天下で宝くじを売っている子どもを thương と感じた。汗でびっしょり濡れているのに、それでも必死に生計を立てようとしていたからだ。)

(困難・脆弱な状況に置かれた他者)

(11)と(12)では、*thương* の対象は母やペットといった親密な存在である。これらに共通するのは、「相手が自分を支えてくれる／そばにいてくれる」といった相手の行為や存在への感謝・愛着が中心となっている点である。このような親密な相手に向けられる *thương* のあり方は、*love* にも見られる特徴である。

一方、(13)と(14)に見られる対象は、英語の *love* にはほとんど観察されない特徴である。ここでは、*thương* は話者と直接のつながりをもたない高齢者や子どもに向けられている。共通しているのは、相手の苦しさ・弱さ・不遇な状況に心が動かされるという点である。

いずれの例にも、相手が払ってきた犠牲や苦勞に目が向けられており、こうした「負担を抱えながら生きる相手へのまなざし」が *thương* の成立に関与していると考えられる。また、この傾向は、Kövecses (1991、2000) が英語の *love* の中心概念として位置づけた *liking* (好ましさ) がほとんど見られず、むしろ周辺概念とされる *caring* (相手を思いやり支えること) に近い側面が目立っている点とも対応している。

(II) *thương* に伴って相手に向けて生じる行動傾向

ベトナム語母語話者の作例では、*thương* に伴う行動傾向は一貫して他者志向的である。*love* と同様に「相手に幸福をもたらそうとする行動」が見られる点は共通しているものの、対象が親密な関係にあるかどうかを問わず、語り手は相手の苦しみや弱さを和らげたり、相手の幸福を増やそうとしたりする方向へ行動が向かうという特徴がある。

ここでは、*love* の作例に見られたような「自分の楽しさ・幸福のために対象と関わり続ける」行動は確認されず、相手の状態を基準に行動が誘発されるという点で大きく異なる。

以下の(15)と(16)を見ると、その特徴がより明確に示される。

(15) Tôi cảm thấy thương cha vô cùng khi thấy cha rất vui khi nhận được món quà đầu tiên từ tôi, nên tôi đã cố gắng làm việc hơn nữa để có thể giúp đỡ được cho gia đình, để cho cha có nhiều khoảnh khắc vui vẻ hơn nữa.

(私は父をととても *thương* と感じた。私から初めてのプレゼントを受け取ったとき、とても嬉しそうにしていたからだ。そのため、父にもっと楽しい瞬間を与えられるよう、私はさらに一生懸命働き、家族を支えようとした。)

(親しい相手の幸福をさらに増やそうとする行為)

(16) Tôi cảm thấy thương những đứa trẻ vô gia cư nên tôi luôn mua ủng hộ những tờ vé số hoặc mua cho chúng cái gì đó để ăn và uống.

(私はホームレスの子どもたちを *thương* と感じたので、いつも宝くじを買ったり、食べ物や飲み物を買ってあげたりしている。)

(弱い立場の相手の苦しみを軽減しようとする行為)

(15)と(16)では、*thương* の対象は「親密な相手」か「直接の関係をもたない弱い立場の相手」である点に違いがあるものの、そこから生じる行動はいずれも「相手の苦しみを和らげたり、幸福を増やしたりすること」に向けられている。父をもっと喜ばせるために努力して働く、困っている子どもに食べ物を与えて支援する、といった行動に共通するのは、相手の状態の改善そのものが語り手にとって価値をもつ点である。

以上の作文調査から、*love* と *thương* はいずれも「相手を大切に思い、幸せを願う」点では共通していたが、感情を喚起する際に語り手が着目する側面には違いが見られた。*love* では、対象の特質や関係性が「価値あるもの」として受け止められる傾向があったのに対し、*thương* では、対象が抱えてきた犠牲・負担・苦勞、または誰かを支えてきたあり方が意味をもつものとして描かれる傾向が見られた。

そこで次節では、コーパスを用いて *love* と *thương* の使用実態を分析し、これらの傾向がコーパスの用例でも観察されるのかを検証する。

6.4 調査 (iii) : コーパスの用例から *love* と *thương* の考察

本節では、*love* と *thương* がどのような対象に向けて用いられているのか、そしてその対象に向けられたときにどのような意味的特徴や側面が強調されるのかに着目して分析を行う。具体的には、VIETLEX と COCA から抽出した用例をもとに、「誰に向けられた愛情なのか」と「対象に向けられた愛情がどのような特徴を帯びているのか」の二点を比較し、対象選択と意味の焦点化のパターンを明らかにする。

表 24 : love と thương の用例分析に用いたコーパスの概要

コーパス名	時代	ジャンル	総合数
COCA (Corpus of Contemporary American English)	1990 年 ~ 2019 年	SPOKEN, FICTION, POPULAR MAGAZINES, NEWSPAPERS, ACADEMIC JOURNALS	約 10 億語 (2025 年現在)
VIETLEX (Vietnamese Corpus of Vietlex)	- ⁴⁴	FICTION, POPULAR MAGAZINES, NEWSPAPERS, ACADEMIC JOURNALS	1 億 5000 万語 (2025 年現在)

次に、love の対象を調査するために、COCA から“I love”の右側に現れる句を検索し、そのうちランダムに 140 件を抽出して分析した。thương についても同様に、VIETLEX から 140 件を抽出し、対象範囲と意味的特徴を分析した。

ここでいう「対象」とは、love/thương が向けられている人物・関係・事物・出来事などを指す。「対象の特徴」とは、その感情が向けられる際に焦点化される性質や契機(例：特別さ・魅力、困難・弱さなど)を意味する。

これらの観点から両言語を比較することで、6.2 節および 6.3 節で確認した「語り方の傾向」を、実際の言語使用データに基づいてさらに検証する。

6.4.1 英語の love の対象と love を喚起する対象の性質

ここでは、COCA コーパスから抽出した用例をもとに、love がどのような対象に向けられ、その対象のどのような特徴が感情を喚起し、さらにどのような態度へと結びついているのかを観察する。

(I) 英語の love の対象：親しい人間関係と嗜好対象を中心として

コーパスにおける love の用例（全 140 件）を整理した結果、love が向けられる対象は、親しい人間を対象とする場合（78 件）と、人間以外（物・動物・出来事・趣味・場所など）を対象とする場合（61）に大別される（表 25）。

⁴⁴ VIETLEX は公表していないため扱われる用例の時代範囲は不明である。

表 25 : love の対象の種類

	対象の種類	頻度 (合計 140 件)
人間の対象	恋愛関係・夫婦関係	56 件
	家族関係	20 件
	友人関係	2 件
	あまり知らない人	1 件
嗜好対象	物・動物・出来事・趣味	55 件
	環境・場所	6 件

まず、人間を対象とする用例を見てみよう。

コーパスの例からは、love が恋愛関係や家族関係を中心に、相手との結びつきや絆を示す文脈で多く用いられていることが分かる。例えば、(17)と(18)⁴⁵のいずれの用例でも、話者と相手の関係が非常に親密なものとして描かれている点が共通している。(17)は母子関係の場面であり、love によって互いの愛情と関係性を確認している。一方、(18)は恋人同士のやり取りで、男性が love を述べることで、相手が自分にとって最も大切な存在であることを伝えている。

(17) He repeated the same words to everyone, and for a long moment he held his mother.

“Take care, Mom... I love you....”

She wanted to sink to her knees and wail at the thought of seeing her son sent off to war, but she bravely nodded, kissed him again through her tears, and squeezed Ed’s hand until he thought his fingers would break, while Peter said good-bye to Paxton.

(18) He pulled me into his strong embrace.

“I’m sorry,” he whispered.

“No, it’s okay. I have to get past all of this, find some way to stop freaking out every time you’re not right here with me. (中略)

“Ari,” he said against my temple, “I love you. There’s nothing I want to protect more than you.”

⁴⁵ 用例の下線はすべて筆者による。

また、コーパスの用例から、love は人間だけでなく物・動物・出来事・趣味・場所にも向けられることが確認できる。

例えば、(19)では、本の紙の匂いや手触りが語られ、それが話者に心地よさを与えている。(20)ではチートスへの日常的な嗜好が述べられ、「飛行機に乗るたびに必ず買う」という行動を通して、対象への強い愛着が示されている。

(19) It was one of pure lust. I love books, especially old books.

(20) I love Cheetos so much it kind of makes my butt hurt.

また、love は、人間関係においても、物や出来事といった非人間的対象においても、共通して「対象への強い好意や愛着」を示す。

(II) love を喚起する対象の性質

次に、それらのうち、love の感情がどのような特徴をもつ対象によって喚起されているのかを明らかにする。

ただし、家族的な愛情は、血縁に基づく親密さそのものが愛情の根拠となっており、その点で他の対象とは区別されるため、ここでは恋愛関係・夫婦関係および嗜好対象を中心に考察する。

まず、恋愛関係・夫婦関係における love の特徴を見てみよう。

今回コーパスから収集した 56 例のうち、相手への態度が明示されている 12 例をみると、love は多様な理由で表明されているものの、いずれも「相手を肯定的で特別な存在として大切に扱う態度」を基盤としている点で共通している。

例えば、(21)から(24)の例において、love の対象はいずれも、相手の外見的魅力や内在的特質など、個人としての魅力や個性に向けられている。

(21) He laughed.

“...Why should I love her for that?

I love you for your beauty and your courage, and for your deep and loving heart. I have known no other woman who...”

She never found out what made her so singular.

(22) She's got a curious look on her face, as though puzzling through what this means, which is one of the reasons I love her.

(23) I love Ginger. She's a foxy girl, ain't she?

(24) Dorian : I loved you because you were marvelous, a genius who made art come alive. But now I see you for what you really are, a third-rate actress with a pretty face.

まず、(21)では「美しさ」「勇気」「深く思いやりのある心」といった外面と内面の双方が称賛されており、話者はそれらの性質を自分にとって価値のあるものとして受けとめている。(22)では「考え込むような表情」という知的な態度が魅力として挙げられ、話者がその姿に惹かれていることが分かる。一方、(23)では「性的魅力のある」という語が示すように、性的な魅力への強い惹かれが表現されている。また(24)では、話者がかつて相手を「芸術を生き生きとさせる天才」として高く評価していたことが語られている。

これらの例に共通するのは、挙げられた性質がすべて対象の内面的・個人的特徴であり、話者がそれらを自らの感覚や価値観を通して意味づけている点である。その意味づけの過程において、相手は話者にとって他にはない唯一無二の特別な存在として立ち現れる。すなわち、loveにおける重要な要素は「その人を見たときに、自分がどのように感じ、どのような価値を見いだしているか」という感覚であり、それは同時に相手が自分にとって特別でかけがえのない存在であることの認識と深く結びついている。

この点を踏まえると、loveが親しい関係を対象とすることが多いのは自然である。なぜなら、相手の個人的特徴を深く知り、その価値を見いだすためには、ある程度の親密さが前提となるためである。

このような特徴は、嗜好対象に向けられたloveにおいても共通して見られる。物や場所などを対象とする場合にも、話者はそれぞれの対象がもつ内在的な特質を自らの感覚や価値観を通して意味づけ、そこに特別な価値を見いだしている。

(25) It was one of pure lust. I love books, especially old books. There's a smell and a feel to old paper that makes me feel like I am shaking hands with people across time. (= (19))

(26) "I love San Francisco for its wonderful views. I love Boston for its historical sites. I love New York for its great museums...I think."

(25)では「古い本」が愛着の対象となっており、紙の匂いや手触りといった物理的特徴がその理由として語られる。話者はそれを「時間を超えて人々と握手しているように感じる」と述べ、新しい本にはない古い本特有の感覚的・象徴的価値を見いだしている。また(26)では、サンフランシスコ、ボストン、ニューヨークといった都市がそれぞれ「眺望の美しさ」「歴史的建造物」「博物館の多さ」といった独自の魅力とともに語られ、話者はそれぞれの都市のもつ他に代えがたい特徴を通して個別的な愛着を表現している。

6.4.2 ベトナム語の *thương* の対象と *thương* を喚起する対象の性質

次に、VIETLEX コーパスから抽出した用例をもとに、*thương* がどのような対象に向けられ、その対象のどのような特徴が感情を喚起し、さらにどのような態度へと結びついているのかを観察する。

(I) ベトナム語の *thương* の対象：親密さの有無を問わず人間全般を中心として

コーパスにおける *thương* の用例（全 140 件）を整理した結果、*thương* は人間を対象とする感情が確認された。

その上でより細かく分類すると、大きく二つに分けられる。

第一は、特定の人物・ものに向けられる場合であり、恋愛・夫婦関係（24 件）、家族関係（29 件）、友人関係（6 件）、知人関係（57 件）、未知の人（11 件）、好ましくない人（1 件）、および場所・ペット（3 件）が含まれる。

第二は、不特定多数の人を対象とする場合（9 件）であり、たとえば *thương người nghèo khó*（貧しい人を *thương* する）、*thương kẻ dưới*（自分より弱い人を *thương* する）などがこれにあたる（表 26）。

前節の英語の *love* が主として恋愛関係・家族関係など「親しい人」あるいは「物・出来事・趣味」といった嗜好対象に向けられるのに対し、ベトナム語の *thương* はほとんどの場合、人間を対象とし、しかも親密さの有無を問わないという点である。

表 26 : thương の対象の種類

対象の種類	頻度 (合計 140 件)
恋愛・夫婦関係	24 件
家族関係	29 件
友人関係	6 件
知人関係	57 件
未知の人	11 件
好ましくない人	1 件
人間一般 thương người nghèo khó (thương + 貧しい人) など	9 件
場所・ペット	3 件

まず、英語の love と同様に、ベトナム語の thương も、家族や恋人など「親しい人」を対象として用いられる感情である。

例(27)と(28) ⁴⁶はどちらの場合も、相手は話者にとって大切にしたい存在として描かれている。(27)は、父親と幼い娘の関係を描いている。病気の娘を長いあいだ看病してきた父親に対し、娘は thương で父をいちばん大切な存在として語り、将来お金を稼いでおいしいものを食べさせてあげたいと約束している。一方、(28)は、恋人関係にある二人のやり取りを描いている。女性が不安や不満を口にする中で、男性は自らの献身的な行為、すなわち病気の恋人を看病し、そばに寄り添い続けた経験を通して、自分の愛情を示そうとしている。これらの行為もまた、thương の表れとして理解できる。

(27) 【病気で娘は入院した。彼は何日も夜通し点滴の針を見守りながら、妻と娘を休ませていた。ある夜に「トゥイはお父さんが一番好きだ。大きくなったらアイスクリームを売って、お父さんにたくさん食べさせてあげる」と娘が彼に言った。】

“Thùy thương bố nhất.”

トゥイ 父 一番

「トゥイはお父さんのことが一番好きだ。」

⁴⁶ コーパス用例の下線はすべて筆者による。

(28) 【二人の恋人は口論になり、女性が「あなたは私のことを愛していないのね」と責めた。それに対して男性は「夜通し医者を探して薬を手に入れ、君のそばにいたのに、それでもまだ愛していると言えないのなら、もうどうすることもできない」と答えた。】

“...chưa được coi là thương em, anh cũng đành chịu.”

まだ 見る は 君 私 も 仕方ない

「あなたを“thương”しているとはまだ言えないのなら、仕方ないよ。」

しかし、thương は必ずしも親密な関係を前提としない。家族や恋人だけでなく、親密でない人に対しても用いられる点で、英語の love とは異なる。

(29)はその一例である。祖母が孫に、戦争中に会った抵抗運動の人々の話を語っているが、彼らは家族でも知人でもなく、自らも厳しい生活を送っていたにもかかわらず、祖母の家族を助けてくれた。祖母は、その困難な境遇と助けてくれた行為の両方を大切に受け止め、thương によってその思いを表している。

(29) 【戦争中、祖母は森の端で黒い服を着た抵抗運動の人々と出会い、小舟で彼らの隠れ家に入り、その姿を記憶している。彼らは自らも低い小屋や水に浸かった森で苦しい生活を送りながら、祖母の家族に蜂蜜や干物、衣服などを分け与えて助けてくれた。祖母は、その厳しい境遇への同情と、家族が受けた助けへの感謝の気持ちを表している。】

“Thương lắm con à!”

とても あなた だよ

「あの人たちの苦しさも、助けてくれた気持ちも、本当に大切に受け止めているんだよ。」

(II) thương を喚起する対象の性質

ベトナム語の thương は、英語の love と同様に「愛」を表すが、その対象は親しい人に限定されない点に特徴がある。では、thương はどのような対象の特徴によって喚起されるかを考察する。

前節で見たように、英語の love は、相手の魅力や個性といった「特別さ」を評価し、それを自分にとって価値あるものとして受けとめる感情であった。一方、ベトナム語の thương では、恋愛・夫婦関係を対象とする 24 例のうち、相手の「特別さ」に基づくものはわずか 1 例のみである。他の用例では、相手の「弱さ」や「困難な状況」が感情を喚起する契機となっており、相手の苦しみや不安に寄り添う姿勢が中心的な特徴として見られる。

例えば、(30)では、男性が結婚を望む女性に対して、過去の孤独や喪失を打ち明けている。彼は、支えを求める切実な思いを通して自らの弱さをさらけ出しており、ここでの thương は、相手の魅力を評価するというよりも、相手の立場や状況を理解し、そばにいてほしいと願う気持ちを含んでいる。

一方、(31)では、女性が病気で倒れた男性を見守るうちに、その気持ちが少しずつ変化していく。もともとの関心が、相手の弱さを目にした瞬間に思いやりへと変わり、やがて「大切にしたい」という穏やかな情愛へと深まっていく過程が描かれている。このように、thương は相手の苦境に共感し、その存在に寄り添う姿勢を中心に据えている。

- (30) 【ある男性が、結婚を望む女性に、自らの過去を語りながら気持ちを打ち明ける場面である。彼は「以前、妻に捨てられて孤独の中で苦しんできた。もし君が自分を愛してくれなければ、生きていけない」と訴え、彼女に支えてほしいという切実な思いを表している。】

“Nếu cô không thương tôi, chắc tôi chết mất .”

もし 君 ない thương 私 多分 私 死んでしまう

「もし君が僕を愛してくれなければ、生きていけない」

- (31) 【彼女は、近所に住む中年の男性が弾く姿を見て以来、どこか惹かれるものを感じ、心の片隅で特別に気にかけるようになった。あるとき、その男性が病気で倒れたとき、彼女は看病しながら「弱っているのに無理をして...」と心配した。それ以来、彼女の気持ちはいっそう強まり、彼を愛しく思うようになったが、告白する勇気はなかった】

“Chị thương ông Bi từ đó.”

彼女 男性の類別詞 ビーさん それ以来

「それ以来、彼女はビーさんを愛しく思うようになった」

同様の特徴は、人間以外の対象に向けられた *thương* においても見られる。

love が対象のもつ「特別な魅力」や「価値」に焦点を当てるのに対し、*thương* は対象の「苦しみ」や「弱さ」に心を寄せる点に特徴がある。

たとえば、(32)では、祖母が「貧しく、洪水の絶えない土地」に対して *thương* を抱いている。ここでの感情は、単なる郷愁や愛着というよりも、厳しい環境で生きてきた土地とそこに暮らす人々の苦労を思い、その負担を「支えてあげたい」と感じる気持ちである。

- (32) 「虫の声がかすかに響き、カエルの鳴き声がまるで遠い昔からの魂の呼びかけのように聞こえてくる。その音を聞くたびに、祖母は先祖のことを思い出し、この貧しく、洪水の絶えない土地を思って胸が痛むのだった。」

<i>thương</i>	<i>cho</i>	<i>xứ sở</i>	<i>nghèo nàn</i>	<i>ngập lụt</i>	<i>liên miên</i>	<i>này.</i>
	に対して	土地	貧しい	洪水	絶えない	この

「この貧しく、洪水の絶えない土地を思って胸が痛む。」

このように、*thương* は、対象の置かれた状況や苦しみ、弱さに心を向け、その立場を理解しようとする過程で生まれる。すなわち、対象に価値を付与するのではなく、そのあり方に寄り添うことによって成立する。

6.5 英語の *love* とベトナム語の *thương* の関連概念の中心性の差異

6.2～6.4 節の調査結果は、英語の *love* とベトナム語の *thương* がいずれも「他者を大切に思い、守りたい」というポジティブな感情を表し、ケアや責任感の形成に関わる点で共通していることを示した。しかし、その感情をどのように語り、どのような枠組みで理解するかという点では、両言語の話者のあいだに明確な違いが見られる。

6.3 節で示した理論的含意に基づき、本節ではまず Kövecses (1991、2000) の *love* モデルを再検討し (6.5.1)、続いて *love* と *thương* における中心ドメインの非対称性を議論する (6.5.2)。

6.5.1 既存の「愛情」のモデルの再検討 (Kövecses 1991、2000)

第2章で述べたように、Kövecses (1991、2000) は、英語の love が liking (好意)、affection (愛情)、caring (思いやり)、friendship (友情)、respect (尊敬)、さらに intimacy (親密さ) など、複数の概念と密接に関連していることを指摘している。これらの概念は階層的に組み合わさり、英語における love の意味ネットワークを構成している。彼はこのネットワークの中心にロマンチックラブを据え、特に liking と affection を love の中核的要素として位置づけ、caring を中間層に置いている。このような構造から、英語の love は本質的に「好ましさ」といった評価的側面に強く根ざしており、その感情が対象の理想化と深く結びついていることがうかがえる。

なぜ英語の love はこのような性質を持つのか。その背景には、Lutz (1988) や Averill (1985 : 101) が指摘するように、アメリカ社会に広く共有されている「個人の尊重」や「平等」といった文化的価値観がある。このような文化では、親密な関係においても相手は「自立した対等な個人」として理想化される。したがって、西洋における「愛」は、相手を一人の他者として尊重し、その内面の良さや独自性を評価するという前提のもとで成立する。このような文化的枠組みは、英語の love の概念モデルにも反映されており、特に liking が感情の中心に据えられ、対象の理想化を促す構造となっていると考えられる。

こうした理論的枠組みをふまえ、本稿では、英語母語話者が実際に love をどのように経験・表現しているかを明らかにするために三つの調査を行った。その結果、理論で示された傾向が実際の語りにも確認された。特に恋人や配偶者といった親密な人間関係において、相手の内面的特質や魅力を高く評価する記述が多く見られ、liking に相当する賞賛や好感の表現が頻繁に用いられていた。これらは、love の感情において liking が中心的な役割を担う傾向があることを示唆している。

また、intimacy に関しても注目すべき点がある。Kövecses のモデルでは intimacy は中核的要素とはされていないものの、調査結果からは love が主に親しい関係性の中で経験・表現されていることが確認されており、intimacy も中核的な要素の一つとして機能していると考えられる。さらに言えば、相手のことを「好ましい」と感じるためには、ある程度その人の内面や性格を知っている必要がある。この意味で、liking の成立には intimacy が前提となることが多く、両者は相補的に love の感情を支えているといえる。

こうした対象の価値づけを中心に据える構造は、Oxford English Dictionary の辞書記述にも反映されている。

(33) “I. Senses relating to affection and attachment.

A feeling or disposition of deep affection or fondness for someone, typically arising from a recognition of attractive qualities, from natural affinity, or from sympathy and manifesting itself in concern for the other's welfare and pleasure in his or her presence (distinguished from sexual love at sense I.4a) ; great liking, strong emotional attachment; (similarly) a feeling or disposition of benevolent attachment experienced towards a group or category of people, and (by extension) towards one's country or another impersonal object of affection. With of, for, to, towards.” (OED “love” n.1.a.) (下線は筆者による)

ここで重要なのは、話者が「対象のどの性質を価値づけているか」(recognition of attractive qualities) という評価のあり方を通して、英語の love の感情を構築している点である。挙げられた性質の多くは、対象の内面的・個人的特徴に関するものであり、話者はそれらを自身の感覚や価値観に基づいて意味づけている。この意味づけの過程において、対象は「他にはない唯一無二の存在」として立ち現れ、話者の感情的世界において特別な位置を占めるようになる。

すなわち、英語の love における本質的な要素は、対象を通して自分が何を感じ、どのような価値を見出すかという他者の理想化と深く結びついている。

6.5.2 英語の love とベトナム語の thương における中心ドメインの非対称性

既に第2章で述べたように、ベトナム語の thương は Từ điển Việt-Anh (『ベトナム語英語辞典』) において love と相当すると訳されている。確かに love と thương は、いずれも「相手を大切に思い、相手のために良いことを願う」というポジティブな対人的感情を表す点では共通している。

しかし、両語がこのような共通性を持つからといって、その意味構造の関連概念(ドメイン)が同じであるわけではない。むしろ、6.2～6.4 節の調査結果が示すように、両語は同じ「愛情」領域に属しながらも、どの関連概念を中心化し、どの側面を意味構築の核として強調するのかという点において大きく異なっている。そして、この中心と

なるドメインの違いこそが、両感情が言語間でどのように概念化されるかという通言語的差異を生み出す要因の一つとなっている。

英語の *love* の中心には、前節で示したように「相手の魅力や良さを認めること」(recognition of attractive qualities) が置かれていたのに対し、ベトナム語の *thương* では、この位置を占めているのは全く別の側面である。それが「相手の弱さや苦しみに気づき、それに共感すること」(recognition of suffering) である。6.2～6.4 節の調査結果から、*thương* が相手の困難・病気・不幸といった状況を認識し、その立場に思いを寄せる中で生まれる感情であることを示していた。すなわち、*thương* の成立には、相手の「苦しみ」や「弱さ」などへの共感が欠かせない⁴⁷。

このような弱さへの気づきが、英語の *love* では中心的な契機というよりも、そっと添えられるような要素にとどまっていることである。英語話者ももちろん相手の幸福や不幸に心を向けるが、その感情を支えているのは、まず「その人に魅力を感じる」ことや「好ましいと思うこと」である。そのため、英語では (34) のように、相手の属性や行為を価値あるものとして評価することを理由に *love* を用いることが自然である。

一方、ベトナム語の *thương* では「相手が困難な状況にある」「負担や犠牲を引き受けている」といった事実そのものが、感情を喚起する主要な契機となりやすい。このため、英語の *love* において中心概念となる「肯定的価値評価」を、そのまま *thương* に対応させることは困難であり、(35a) のような文は違和感を伴う。その代わりに、このような価値評価を根拠とする愛情表現には (35b) の *yêu* が用いられる。すなわち、ベトナム語においては、このような二種の愛情が同一の感情概念としてまとめられるのではなく、性質の異なる感情として区別され、それぞれ独立した語によって言語化されている。

(34) 英語 : I love you for your beauty and your courage.

(35) a. ベトナム語 : (??) Anh thương em vì vẻ đẹp và lòng dũng cảm của em.
私 君 ので 美しさ と 勇気 の 君

⁴⁷ OED の定義からは、英語の *love* が、魅力の認知に基づく深い愛情だけでなく、*sympathy* (共感) に根ざして他者の幸福や安寧を願う側面も含むことは否定できない。しかし、愛情研究ではプロトタイプ的なロマンティック愛に関心が集中し、こうした共感的側面は十分に論じられてこなかったと大森 (2015) は指摘する。*love* に内在する「共感」がどのように表れ、ベトナム語 *thương* の「共感」といかに異なるのかという点は、今後検討する価値のある課題である。

b.ベトナム語： Anh yêu em vì vẻ đẹp và lòng dũng cảm của em.
私 君 ので 美しさ と 勇気 の 君

すでに調査で示したように、英語の *love* は話者自身の評価を起点として成立するのに対し、*thương* は相手が置かれている状態に心が動かされて生じる。この方向性の違いは使用範囲にも表れており、*love* が主に親密な人間関係の中で用いられるのに対し、*thương* は血縁や親しさに限らず、弱さや困難に置かれた人、さらには動物にも向けられる語である。これは、*thương* が相手の状態そのものを出発点とする感情であるためである。

このように、「愛情」という感情の理解や表現のされ方は、言語ごとに異なる意味構造に根ざしている可能性がある。その背景には、文化ごとの人間観や関係性に対する価値の置き方の違いが影響していると考えられる。特に注目されるのは、同じ「愛情」領域に属する語であっても、話者がどの側面に焦点を当て、どの意味的要素を中心化するかが異なり得る点である。

6.6 まとめ

本稿では、英語の *love* とベトナム語の *thương* がどのような対象に向けて用いられ、その感情がどのような特徴によって喚起されるのかを検討した。両語はいずれも人に対するポジティブな情感を表す語であるにもかかわらず、感情が成立する際に話者が相手のどの側面に焦点を当て、どの概念を中心化するかには違いが見られた。

こうした違いは、愛情という感情に対して各言語がどのような意味的焦点を置くか、すなわちドメインの中心性が異なりうることを示唆している。そして、ある感情語において中心となるドメインは、必ずしも普遍的に共有されるものではなく、その言語・文化に特有の価値観や人間観を反映している可能性がある。

そのため、感情語を通言語的に捉える際には、一つの言語に基づくモデルを前提として他言語に当てはめるのではなく、それぞれの言語がどのドメインを優先的に参照しながら感情を構成しているのかを、実際の使用状況に基づいて記述していくことが重要である。

次章では、*thương* の語源とその意味拡張を検討する。さらに、日本語の「心が痛む」と比較することで、*thương* における共感の成立基盤を明らかにする。

第 7 章

空間認知の枠組みから見た *thương* の「視点共感」の特徴

7.1 はじめに

本章では、論点④「文化固有の共感観の特徴」に着目し、ベトナム語の *thương* に見られる「他者の痛みを相手の視点から感じ取る」の特徴を明らかにする。

第 2 章で述べたように、Wierzbicka の NSM 理論は普遍的意味素によって感情語の意味を簡約化して記述する枠組みであるが、その性質上、文化固有の核心的意味を十分に捉えにくいという限界がある。第 6 章では、*thương* にとって重要な「相手の弱さや苦しみに寄り添う共感」という側面を示した。この共感の側面は、語源である「傷」

(『大南國音字彙』(Đại Nam Quốc Âm Tự Vị, 1895 : 429)) に由来し、相手の痛ましさを自分の内側の傷として感じ取るという特徴をもつ。しかし、このような共感の在り方は NSM では過度に単純化されてしまう。その結果、各言語がどのように異なる仕方で共感を表すのかという点も十分に見えてこない。さらに、NSM では、この共感が実際にどのような場面で自然に用いられるのかを説明することも難しい。

本章ではまず、*thương* の通時的な意味拡張を整理する。そのうえで、Levinson (1996) の空間認知の枠組みを用い、日本語の「心が痛む」との比較から、話者がどの視点に立つかによって他者の「痛み」がどのように捉えられるのかを分析する。こうした検討を通して、*thương* が視点の選択に強く依存する共感表現であることを示す。

本章の構成は次の通りである。7.2 節では、*thương* の語源およびベトナム語としての語義の広がり辞書記述から確認し、7.3 節では現代ベトナム語における用法を具体例に基づいて整理した上で、「心が痛む」との意味の重なりと相違点を検討する。7.4 節では、第 3 章で取り上げた Levinson (1996) の空間認知における相対的枠の理論を再確認し、この枠組みを応用して、*thương* の意味解釈における「視点の選択」がどのように機能するかを分析する。7.5 節では、本章の考察結果をまとめる。

7.2 ベトナム語 *thương* の語源と意味の広がり

ベトナム語の *thương* は元々「傷」を表す漢字に由来し、そこから「身体的損傷」や「心理的な痛み」を指す語として用いられるようになった。その後、意味領域は拡張し、現代語では「他者への共感」など感情を表す用法へと発展している。

本節では、この語義の広がりや辞書記述に基づいて整理する。まず 7.2.1 節で漢字表記の付された辞典を用いて基本義と多義性を確認し、7.2.2 節で漢越辞典の記述から借用語としての性格を検討する。最後に、7.2.3 節で現代語辞典の項目立てを参照し、感情表現としての *thương* の位置づけを明らかにする。

7.2.1 漢字表記を付したベトナム語辞典における記述

まず、漢字が付記されているベトナム語辞典によると、ベトナム語の *thương* という語は、もともと漢字（中国語）の「傷」に由来している。例えば『大南國音字彙』（Đại Nam Quốc Âm Tự Vị 1895 : 429）や『越南字典』（Việt Nam Tự Điển 1954 : 587）では、*thương* の多義性が以下のように示されている⁴⁸。

(I) 身体的な傷（例えば、*vết*⁴⁹ *thương* 「疳傷」（傷））

(1) Tôi có một vết thương ở tay. (作例)

私 ある 一 類別詞 傷 に 手

「私は手に傷がある。」

(II) 心理的な傷（例えば、*thương tổn tinh thần* 「傷損精神」（心理的に傷つく））

(2) Cô ấy bị thương tổn tinh thần. (作例)

彼女 される 傷 損 精神

「彼女は心理的に傷ついた。」

(III) 悲慘さに対する観察者の評価（例えば、*thương tâm* 「傷心」、*bi thương* 「悲傷」）

(3) Hậu quả của chiến tranh thật thương tâm. (作例)

結果 の 戦争 本当に 傷 心

「戦争の結果は本当に痛ましい。」

⁴⁸ 以下の分類は筆者が両辞典を参照の上、意味のまとまりに基づいて整理したものである。また、各グループ内の語は一部のみを示したものである。

⁴⁹ 現代ベトナム語で類別詞として扱われる。ある表面に残った（乾いた状態の）跡を特定する（Ngo 2014 : 204）

(IV) 他人への感情⁵⁰

(例えば、thương kẻ nghèo 「傷+貧しい人」(貧しい人に共感する))

(4) a. Tôi thương kẻ nghèo khó. (作例)

私 傷 人 貧しい 困難な

b. Tôi cảm thấy thương kẻ nghèo khó. (作例)

私 感じる-見える 傷 人 貧しい 困難な

「私は貧しい人をかわいそうに思う。」

まず、例(1)に見られるように、thương は基本義として身体的な損傷(手の傷など)を表す名詞であり、単独ではなく類別詞とともに用いられる。一方、例(2)では、この物理的な意味から拡張し、心理的な損傷を表す動詞として用いられており、外部からの出来事や言動によって内面が傷つくことを示す thương tổn のような複合語を形成する。この場合、thương は「傷つく」という状態を表す。さらに、例(3)では、痛ましい出来事(戦争の結果など)そのものに対する評価を表し、観察者の感情的反応というよりは、状況の悲惨さを形容する形容詞的用法である。このように、thương は心理的な反応を述べる動詞的用法(2)とは異なり、出来事の性質を叙述する語として機能している。最後に、例(4)では、thương が他者への共感を表す動詞として用いられている。ここでは、相手の困難や不幸を自分のことのように感じ取る心的態度を示し、単独で用いられるほか、cảm-thấy 「感じる-見える」のような感覚動詞とともに使われることも多い⁵¹。

⁵⁰なお、漢字表記を付したベトナム語辞典では、thương の意味の扱いが一定していない。大きく三つに分けられる。

第1に、『大南國音字彙』(1895 : p.429)や Nôm Characters with Quotations and Annotations (電子版)のように、「心が痛む」「共感」「愛情」などを一つの項目にまとめる辞典。

第2に、『越南字典』のように、「共感」(=傷)と「愛情」(漢字なし)を別項目として区別する辞典。

第3に、Giúp đọc Nôm và Hán Việt (2004 : p.794)のように、「悲しみ」には「傷」、「同情・愛情」には「愴」を用いて漢字を使い分ける辞典。

また、多くの辞典は用例を示さないが、第1のグループの Nôm Characters with Quotations and Annotations (電子版)に限り、古典作品の例が引用され、漢字「傷」が「共感」の意味で実際に用いられることが確認できる。

⁵¹なお、thương は giận と同様に、複数の感情的側面を併せ持つ語であり、「共感」と「愛情」といった意味が複合的に共存している。そのため、複合語の用法においては、それぞれ特定の側面に特化している。たとえば、thương cảm は相手の苦しみに「共感」の意味、thương hại は

ただし、これらの辞典には、それぞれの意味が歴史的な順序あるいは使用頻度に基づいて分類されているという言及は見られない。そのため、どの意味が漢文（中国語）からの借用に当たるのかをより明確にするには、ベトナム語に取り入れられた漢語（いわゆる「漢越語」）を専門的に収録した辞典も参照する必要がある。

7.2.2 漢越辞典における記述

そこで、『漢越辞典』（Hán Việt Từ Điển 1942 : 40）や『漢越辞典簡要』（Hán Việt Từ Điển Giản Yếu 1931 : 840-842）など、主に漢文から取り入れられた漢越語を詳述する辞典を確認すると、「傷」（thương）の項目では、

- (5) 身体的な傷：thương tích（傷跡）、thương hàn（傷寒）など
 - (6) 心理的痛み：傷感（thương cảm）など
 - (7) 悲慘さに対する観察者の評価：傷心（thương tâm）、慘傷（thảm thương）など
- といった意味が主に取り上げられている。

ところが、これらの辞典には、用法（IV）（他者に対する感情）で見たような、thương を単独で用いる現代ベトナム語的な用法はほとんど確認されない。このことから、ベトナム語の thương は漢文から取り入れられた当初、主に身体的あるいは個人的な心理的痛み、困難な状況に関する意味を持ち、現代ベトナム語で広く使われる(4)で見たような「他人への共感」といった意味は、ベトナム語に借用された後で新たに定着した用法であると考えるのが自然であろう。

7.2.3 現代語辞典における意味の扱い

このような語義の変遷を踏まえて、1945 年以降の文学作品や出版物を主なデータとして編纂された現代ベトナム語辞典の Từ Điển Tiếng Việt『ベトナム語辞典』（2021）（ローマ字表記のみで、漢字の付記なし）を参照すると、見出し語は単語または語句とし

相手を気の毒に思う「同情」の意味（ただし上位者的・憐憫的ニュアンスを伴う）、thương yêu は親しい相手への「愛情」や「いとおしさ」を表す意味である。そして、dễ thương（易い+thương）は、「愛情」的側面をもとに、「かわいらしい」「好感を与える」といった相手の外見的な印象を描写する際に用いられる形容詞であり、特に子どもや女性など、愛らしい対象に対してよく使われる。

て成立している表現ごとに独立して提示されている。そのため、従来一つの項目に含まれていた意味も、以下のように分かれた項目として掲載されている。

(8) *bị thương* (見出し語 *bị*) (p.76) : 身体的な傷を負う

(9) *vết thương* (見出し語 *vết*) (p.1235) : 具体的な傷跡や外傷

(10) *thương tâm* (見出し語 *thương tâm*) (p.1236) : 痛ましい

(11) *thương* (見出し語 *thương*) (p.1410) : 愛情⁵²や共感、同情といった感情表現⁵³

7.2.1 節で確認した辞典では、*thương* の多義性が一つの項目にまとめられ、「身体的な傷」「心理的な傷」「痛ましい状況」「他者への感情」といった用法が並列的に提示されていた。これに対し現代語辞典では、それぞれが別々の見出しとして整理される。

たとえば(8)の *bị thương*、(9)の *vết thương*、(10)の *thương tâm* は *thương* を要素とする複合語として扱われ、「身体的損傷」や「痛ましい状況」に特化している。他方、感情表現としての(11)の *thương* (=4)) は単独の動詞として用いられ、「愛情」または「他者への共感」を表す独立項目となる。こうした違いから、母語話者にとって *thương* を感情表現とする用法は独立した意味として認識され、「傷」という基本義との直接的つながりは意識されない可能性がある。

次節では、現代ベトナム語における *thương* の「共感」を表す意味の用法を具体的文脈で確認し、それぞれの語義が日本語でどのように訳されるかを考察する。

7.3 日本語の「心が痛む」との比較

本節では、ベトナム語の *thương* の特徴を明らかにするために、日本語の「心が痛む」と比較する。両者はいずれも他者の状況への心配を表す点で一致が見られるが、その用法と意味の範囲には違いもある。まず 7.3.1 節で *thương* の用法を整理し、7.3.2 節で「心が痛む」との共通点と相違点を考察する。

⁵² “A Dictionary of 15th Century Ancient Vietnamese” によると、19 世紀ごろの文献から、*thương* に「愛情」を表す意味が見られるようになった (p.356)。

⁵³ 共感と愛情が一語にまとまる現象は、ベトナム語だけではない。Jackson ら (2019) は、いくつかのオーストロネシア語で “pity” と “love” が同じ語で表されることを示している (p.1522)。

7.3.1 現代ベトナム語における thương の用法

現代ベトナム語における thương は、意味によって用いられる形が異なる。感情を表す場合には単独の動詞として使われるのに対し、身体的あるいは心理的な「傷」を表す場合には、固定的な語構成（7.2.1 節で述べた vết thương、tổn thương、thương tâm など）の中で現れることが多い。本節では、このような用法の違いを具体的な例文に基づいて整理し thương がどのように多義的な機能を有しているかを確認する。

(I) 物理的な傷

まず、(12a)のように、thương は類別詞 vết（「痕跡」や「跡」を意味する）とともに用いられ、「物理的な傷」を表す名詞句となる。このとき、vết の存在によって thương の意味が具体化され、実際の負傷を指す表現として成立する。日本語でも、(12b)のように「傷」は身体的なけがを示す語として使われ、vết thương に対応すると考えられる。

(12) a. ベトナム語

Tôi có (vết) * thương ở chân do tai nạn giao thông.

私 ある 類別詞 傷 に 足 によって交通事故

b. 日本語：私は交通事故によって足に傷を負いました。

また、(13a)のように、受動構文の標識 bị を前に置くことで、「(外部要因によって) 傷を負う」という動詞的な意味を持つようになる。この表現は、身体的な負傷を表すものであり、日本語では(13b)のように「～で／～して傷を負う」と訳すことができる。

(13) a. ベトナム語：

Cô ấy bị thương ở tay do dùng dao không cẩn thận.

彼女 される 傷 に 手 によって 使う ナイフ 不注意に

b. 日本語：彼女は不注意な包丁の使い方をしていて、手に傷を負いました。

(II) 心理的な傷

thương は物理的な傷だけでなく、心理的な傷も表す。とくに、(14a)の tổn thương（損傷）は動詞 làm（「～させる」）と結びつき、「相手の心を損なう」という意味になる。

この表現は身体的な傷ではなく、言葉や行動によって相手の内面に与えるダメージに焦点を当てている。日本語では(14b)のように「傷つける」という動詞が対応する。

(14) a. ベトナム語 : Lời nói đó đã làm tổn thương cô ấy.

言葉 その させた 損傷 彼女

b. 日本語 : その言葉は彼女を傷つけた。

(III) 悲慘さに対する観察者の評価

次に、(15a)の *thương tâm* は、出来事や状況そのものの「悲慘さ」を表す語である。これは、(14a)の *tổn thương* (心理的な傷) のように「誰かの内面の痛み」を描写するのではなく、目の前の出来事や状況のひどさを示すために用いられる。*thương tâm* (傷心) は文字通り「傷ついた心」に由来するが、ここでは個人の心情よりも出来事の深刻さに焦点があり、心理的ダメージを抱える主体は明示されない。一方、日本語でも(15b)のように「痛ましい」という形容詞で同様の評価が可能だが、日本語は「傷」を使わず、「心」や「感情」による抽象的評価を用いる点が注目される。

(15) a. ベトナム語 : Tin tức về vụ tai nạn thật thương tâm.

ニュース について 事故 本当に 傷心

b. 日本語 : その事故のニュースは本当に痛ましい。

以上のように、(I) ～ (III) の用法において *thương* はいずれも「傷」という意味領域に根ざしており、「痛み」を表す点で日本語との対応も見られる。しかし、次の (IV) の用法では、ベトナム語では (I) ～ (III) と同様に「傷」に由来する *thương* を用いるのに対し、日本語では「心が痛む」といった心的領域に焦点を移す表現を用いる点で異なる。

(IV) 他人に対する感情

thương は「自己の傷」を表す名詞を超え、「他者の物理的・心理的痛みへの共感」を示す動詞へ発展した。例(16a)の *cảm-thấy thương* (感じる-見える+傷) は逐語的に「相手の傷を感じて見える」を意味し、話者が「寒空で震える子供」を見たとき、その苦し

みを自分の感覚として受け止めることを示す。thương は本来「傷」を意味し、相手の痛みや困難を自分の傷のように引き受けることで「共感」「同感」の意味が生じた。他方、(16b)の日本語の「心が痛む」は同じ状況下でも「私はその子を見て心が痛む」と表現し、相手の苦しみに反応して自己内面に痛みが生じる感情反応を示す。

(16) 【寒空の下、ホームレスの子供が薄い服を着て震えていた】

a. ベトナム語 : Tôi cảm - thấy thương đứa bé đó.
私 感じる-見る 傷 子供 その

字句通りの逐語訳 : 私はその子の傷を感じて見える。

ニュアンスを含めた訳 : 私はその子の傷を感じ自分の傷のように受け止める。

b. 日本語 : 私はその子を見て、心が痛む/傷ついた。

上記のように、thương は身体的・心理的な傷、痛ましい状況、そして他人への感情を表す際に多義的に用いられている。その中でも、特に「他人への感情」を表す用法は、日本語の「心が痛む」と近い意味領域を持つように見える。両言語は共感を表すという点で重なりを持ちながらも、ベトナム語は外向的に「相手の傷を感じ取る」ことを強調し、日本語は内向的に「自己の内面的感情」に焦点を置くという対照的な特徴を示している⁵⁴。そこで次節では、両語の用法における具体的な相違点について検討する。

7.3.2 日本語の「心が痛む」との相違点

前節では、両語の類似点を確認したが、用法の全てが一致するわけではない。ここでは、特に次の相違点に注目する。話者の主観的な心配を表す場合、thương は必ずしも自然に用いられるわけではない点である。

「話者が一方的に抱く主観的な心配」において、thương がどのように制約を受けるのかについて考察する。以下のような文脈を考えてみる。

⁵⁴ 中国語においても同様の意味拡張の過程が確認される。

中国語の心疼 (xīn téng) における「疼」は本来「痛み」を表す語であり、そこから①他者の苦痛に接した際に生じる心的な痛み、②他者の苦しみを見ていられないという共感的感情へと意味が拡張している。さらに③の用法では、ベトナム語の thương に見られるような愛情の意味をもち、主として家族関係、特に両親が子どもに向けて抱く情愛 (甘やかしを伴う) を指す (Sundararajan 2015 : p78、81、84)。

(17) 【何度も注意しているのに、30歳の息子は遊んでばかりで、きちんと仕事を探そうとしない。母親として、息子の将来が心配だ。】

- a. ベトナム語 : (??) Tôi cảm - thấy thương thằng con trai của mình.
私 感じる-見える 傷 息子 の 自分
- b. 日本語 : 息子の様子を見ると本当に心が痛む。

例(17)の文脈では、母親である話者は「30歳の息子が遊んでばかりで仕事を探さない」ことから、その将来を一方的に心配している。この状況で(17b)の日本語「息子の様子を見ると本当に心が痛む」は自然に言える。一見すると「心が痛む」はベトナム語の *thương* に近いようだが、実際には(17a)で *thương* を使うと違和感がある。息子の状況は明確な苦痛や困難とはみなされず、母親が主観的に案じているだけだからである。したがって、日本語では自然でも、ベトナム語では用いにくい点に違いがある。

以上の考察から、日本語の「心が痛む」とベトナム語の *thương* は、いずれも他者の状況に対する共感や心配を表す表現でありながら、その使用条件には明確な違いがある。

「心が痛む」は話者の内面的な感情反応を中心とし、相手の苦しみが客観的に明示されていない場合でも自然に用いられるのに対し、*thương* は、相手に実際の苦痛や困難が明確に存在し、話者がそれを感覚的に共有する状況でなければ不自然に感じられる。つまり、「心が痛む」は自己志向的、*thương* は他者志向的な性質を持つと言える。

こうした相違は、両表現がどのような「視点」に基づいて感情を捉えているかに関わっていると考えられる。次節では、第3章で述べた Levinson (1996) の「相対的枠」の理論に基づき、話者と対象との視点関係が感情表現の意味解釈にどのような影響を与えるのかを、認知的観点から分析する。

7.4 相対的枠 (Levinson 1996) を用いた *thương* の分析

本節では、*thương* の意味解釈に影響する「視点」の働きを整理するために、Levinson (1996) の相対的枠を手がかりとする。まずこの理論の基本概念を再確認する (7.4.1 節)。続いて、その枠組みを用いて、*thương* の使用が自然になる文脈と不自然になる文脈を比較し、話者がどの視点を採用しているかが用法の差を生むことを具体的に検討する (7.4.2 節)。

7.4.1 「相対的枠」の理論的背景の再確認 (Levinson 1996)

Levinson は、空間に関する表現が単なる語彙差ではなく、文化ごとに異なる認知的枠組み、すなわち空間情報の捉え方を反映すると強調する (pp.376-377)。この指摘は、認知プロセスや文化固有の空間的思考が言語表現にどのように投影されるのかを考える上で重要であり、彼はこの認知的差異を、三種類の座標系として整理している。具体的には、外部の方位を基準とする「絶対的枠」、対象物固有の向きを基準とする「内在的枠」、そして観察者の視点に基づく「相対的枠」である。

絶対的枠と内在的枠はいずれも、観察者の視点によって基準が変化しないという点で共通する。絶対的枠では北や南などの固定された外部基準が用いられ、観察者の向きは判断に関与しない (pp.371-373)。同様に内在的枠では、対象物が備える前後方向などの固有の属性が基準となり、観察者の位置は空間理解に影響しない (pp.366-368)。

これに対し、相対的枠は観察者の立ち位置や身体の向きを基準に空間関係を判断する点に特徴があり、視点の選択によって解釈が異なる (pp.369-371)。

例えば、図 10 のように人物 A の横にボールが置かれている場面では、少なくとも 2通りの可能性がある。観察者 B が自己視点をとればボールは A の右側に位置すると判断され、A の視点を採用すれば同じボールを A の左側と捉えることになる。

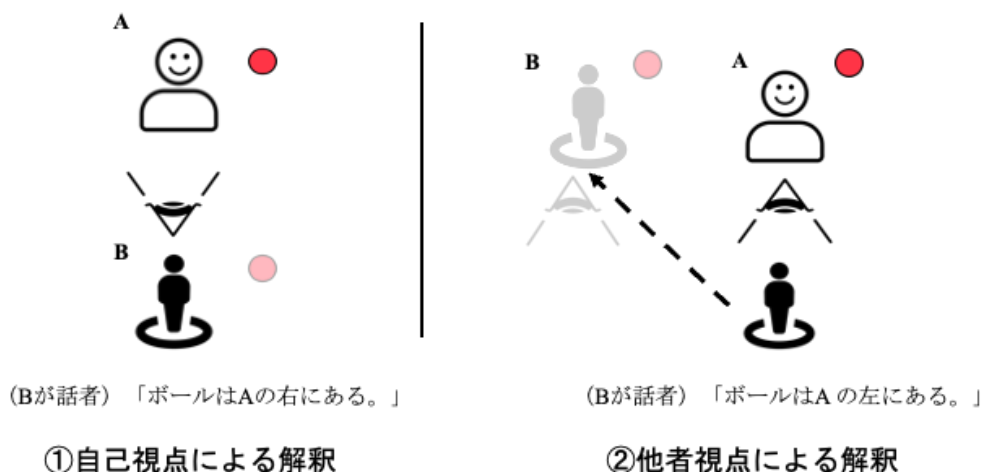


図 10：自己視点と他者視点に基づく空間の捉え方 (Levinson 1996) (再掲)

また、この視点選択の問題は、単に空間認識にとどまらず、感情表現や意味理解にも密接に関わっている。特に本稿で取り上げるベトナム語の *thương* に関しては、話者が相手の「痛み」や「傷」を誰の視点から捉えているかが、感情のニュアンスに深く影響する。次節ではこの点をより具体的に分析する。

7.4.2 相対的枠を用いた *thương* の分析

本節では、Levinson (1996) の相対的枠の枠組みを手がかりに、話者がどの視点から相手の状況を捉えるかによって *thương* の用法がどのように分かれるかを検討する。具体的には、7.4.2.1 で相手の実際の苦しみに寄り添う場合を、7.4.2.2 で自分の損を負って行動する相手の視点を取る場合を取り上げ、視点の違いが意味解釈に与える影響を明らかにする。

7.4.2.1 相手の実際の苦しみに寄り添ってその視点を取る場合

まず、*thương* の使用には、話者が相手の立場や感情に寄り添っているかどうかに関わってくる。以下では、話者の主観的な心配と、相手の苦しみの共有が *thương* の使用にどのような影響するのかを具体例を通して見てみよう。

(I) 相手にとって苦しみがあるかどうか明確でない場合

(話者の視点からのみの心配)

(18) 【何度も注意しているのに、30歳の息子は遊んでばかりで、きちんと仕事を探そうとしない。母親として、息子の将来が心配だ。】 (= (17))

a. ベトナム語 : (??) Tôi cảm - thấy thương thằng con trai của mình.
私 感じる-見える 傷 息子 の 自分

b. 日本語 : そんな息子の様子を見ると心が痛む。

例(18)の文脈において(18b)の日本語「心が痛む」は、母親が息子の態度に抱く不安など主観的感情を自然に表せる。しかし、(18a)のベトナム語の *thương* はこの文脈では不自然に響く。息子自身は困難や痛みを抱えておらず、母親の感情は主観的な「心配」や「将来への懸念」にとどまっているからである。この場合、*thương* に必要な「相手の視点を取る」という認知枠組みが成立せず、文としての自然さに欠けると考えられる。

次に、例(18)と対照的に、相手が実際に苦しみを抱えており、話者がその内面的状態に寄り添っている例(19)の文脈を見てみよう。

(II) 相手にとって苦しみであると話者に理解される場合

(相手視点に寄り添った心配)

(19) 【30歳の息子が投資詐欺で全財産を失い、生きる目的を見失ってから、毎日を遊んで過ごしている。母親として息子が心配だ。】

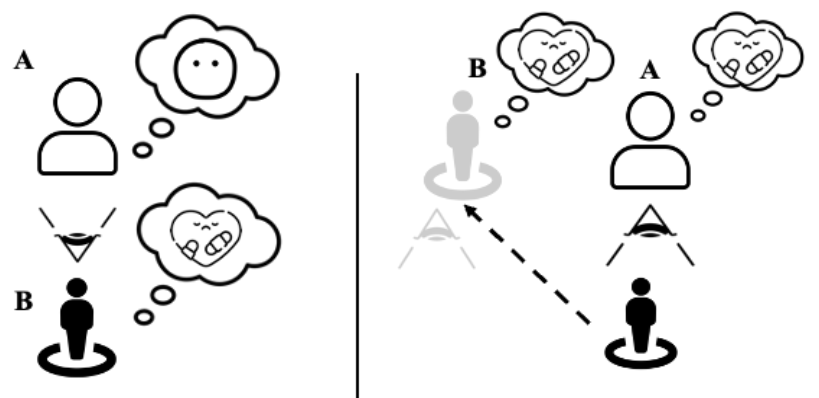
a. ベトナム語 : Tôi cảm - thấy thương thằng con trai của mình.

私 感じる-見える 傷 息子 の 自分

b. 日本語 : そんな息子の様子を見ると心が痛む。

例(19)の文脈では、息子が投資詐欺によって全財産を失い、生きる目的を見失っているという具体的な苦しみが描かれている。その状態が「本人にとっても苦痛である」と明確に認識される状況となっている。そして、母親はそうした息子の様子を見て、その苦しみに共鳴し「息子が苦しんでいることを自分のことのように感じ取る」ことで、感情的な痛みを共有している。このような文脈において、(19a)の *thương* を用いることは自然である。

Levinson (1996) の相対的枠に基づき、(18)と(19)における話者の視点の違いと、それに伴う感情表現の違いを視覚的に整理したのが、次の図 11 である。



③ 話者(B)は息子(A)の状況を外から観察する場合

④ 話者(B)は息子(A)の視点に寄り添う場合

図 11 : *thương* における視点共感の特徴 (右)

左側の③は(18)に対応し、話者(B)が相手(A)の状態を外部から観察する場面を示す。

ここでの「心配」は自分の視点に基づくものであり、相手が実際に苦しむかは不明確である。そのため、*thương* のように「他者の傷を自己の感覚として受け取る」表現には不自然さが残る。一方、右側の④は(19)のように話者が相手の視点に立ち、その内面的苦しみを自己の感覚として共有する状態を示す。ここで話者は単に「相手を心配する」のではなく、相手の苦しみを深く理解し、自分の痛みとして感じている。

7.4.2.2 自分の損を負って行動する相手の視点を取る場合

7.4.2.1 節では、*thương* が相手の実際の苦しみに寄り添い、その内面的状態を自分の「痛み」として受け取ることで成立する用法を確認した。これに対して、本節では、相手の実際の苦しみが明示されていない場合に成立する別の用法を取り上げる。

ここで問題となるのは、相手が「今この瞬間に苦しんでいる」とは必ずしも言えない状況であっても、他者のために行動することで自分の損を引き受けているような状況を踏まえて、話者が「この人は損をしている」「この立場はどこか痛ましい」と感じ取るような場面である。

たとえば、例(20)では小学4年生の少女が被災地支援のために自分の貯金をすべて寄付し、「少しでも困っている人の力になれば」と嬉しそうに語っていた。このように、対象が喜びの感情を示している状況であっても、*thương* の使用は自然に成立している。

- (20) 【私たちが募金を募っていると、小学4年生の少女が貯金を全て持ってきて被災地の人々に寄付した。少女はお金を手渡す際、「少しでも困っている人たちの力になれば」と嬉しそうにしていた。私たちは少女が全てのお金を差し出したことが気になると同時に、その優しさに感動した。】

ベトナム語：Chúng tôi cảm-thấy thương tâm⁵⁵ lòng của cô bé.
私たち 感じる-見える 傷 類別詞 内臓 の 彼女

字句通りの逐語訳：私はその子の内臓の傷を感じて見える。

ニュアンスを含めた訳：私はその子の思いやりの心の傷を感じ、自分の傷のように受け止める。

⁵⁵ tâm (類別詞)：薄くて長い平たいものを表す名詞につける。(Ngo 2014 : 188)

例(20)の少女は、小学生という年齢でまだ自立できない弱い立場にあり、本来なら自分の欲しい物を買うために自由に使えるはずの貯金をすべて差し出している。少女自身も、寄付すれば自分が欲しかったおもちゃなどを買えなくなることを理解しつつ、それでも困っている人の役に立てることを喜びとして受け止めている。その場面では、少女はあくまで嬉しそうに振る舞っており、自分の側の苦しみや損を訴えてはいない。

しかし話者にとっては、少女の立場に身を置いてその状況を想像すると、その貯金が幼い彼女にとってどれほど大きな価値をもつかを踏まえると、その行為は、自己の利益を手放してまで他者のために行動しているという不利な状況を内包するものとして理解される。その結果、少女自身は喜びを表しているにもかかわらず、話者の側ではその損や痛ましさを感じ取り、*thương* が喚起されるのである。

一方、例(18)の30歳の息子の場合、遊んでばかりで仕事を探そうとしないという状況は、外的な要因や避けがたい事情、あるいは誰かのために自ら不利な立場を引き受けた結果として生じたものではなく、すでに大人である本人の選択や行動が直接もたらした結果である。このため、話者（母親）は息子の行為から、例(20)の少女のように「この人は損をしている」といった性質を読み取りにくい。その結果、息子の将来を心配することはあっても、話者は相手の側に「損」や「痛み」を見いだすこと自体が難しい。こうした痛みを自分のものとして共有するような共感も形成されにくく、この文脈では *thương* の使用は不自然となる。

以上の分析から、*thương* の使用には、話者が相手の立場に寄り添い、その状況を相手の視点から捉えようとする認知的過程が不可欠であることが明らかになった。7.4.2.1 で見たように、相手が実際に苦しみを抱えている場合には、話者はその苦しみを自分の感覚として取り込みやすく、その痛みを共有するかたちで *thương* が自然に成立する。一方、7.4.2.2 で見たように、相手が明示的に苦しみを示していない場合であっても、行為や背景から「自分にとって損を引き受けている」「どこか痛ましい状況に置かれている」と解釈できるとき、話者は相手の側に立ってその状況を想像し、その「損」や「痛ましさ」を自分のものとして感じ取ることで *thương* が用いられるのである。

7.5 まとめ

本章ではまず、ベトナム語 *thương* の通時的な意味拡張を辞書記述から整理した。漢字「傷」に由来する基本義から、身体的・心理的な損傷や悲惨な状況の評価へと広がり、さらに現代語では「愛情」や「共感」を表す感情表現として独立した意味をもつに至ったことを確認した。

つづいて、Levinson (1996) の相対的枠を用いて、*thương* の「相手への共感」を表す用法を取り上げて、日本語の「心が痛む」と比較した。その結果、「心が痛む」は話者側の感情を中心とする自己志向的な表現であるのに対し、*thương* は相手の現実の苦しみや「損」を相手の視点から自分の痛みとして受け止める、より他者志向的な共感表現であることが分かった。

さらに、このような視点共感的な性格は、第 6 章で見たように、現代ベトナム語において愛情を表す *thương* の用法にも受け継がれている。相手に対して *thương* と言うとき、話者は単にその人に好意や親しみを抱いているだけではなく、その人がおかれてきた事情や、これまでに抱えてきた苦労にも思いを寄せていると考えられる。そうした相手の痛ましさを自分のことのように感じ取りながら向けられる愛情という点で、*thương* はベトナム語における文化固有の「愛情表現」のあり方をよく表していると言える。

第 8 章

結語

本稿は、ベトナム語の感情語 *giận* (怒る) と *thương* (心配する・愛する) を対象に、Langacker (1987、2008) のドメインマトリックスおよび Levinson (1996) の視点理論を枠組みとして採用し、その意味構造を認知的・文化的観点から分析した。従来研究は、英語 *angry* や *love* に基づく普遍的モデルを前提とし、生理的側面を重視する一方で、文脈依存的要因や語用的多様性が十分に扱われてこなかった。本研究は、ベトナム語の感情語において対人関係や視点の取り方が意味形成に大きく寄与することを具体的データに基づいて示し、複数ドメインと視点枠を統合する分析が感情概念の記述に有効であることを提示した。

第 2 章では先行研究を整理し、本研究が扱う 4 つの論点、すなわち(1) 感情語の意味解釈における文脈の重要性、(2) 対人関係の捉え方に基づく感情語の使用制約、(3) 関連概念 (ドメイン) の中心性に見られる言語間差、(4) 文化固有の共感観の特徴によってどのように特徴づけられるのかという問題が、英語中心の枠組みでは十分に説明されてこなかった点を指摘し、これらの側面を適切に扱うためには複数のドメインを統合的に捉える枠組みと話者の視点を考慮した分析が必要であることを示した。

第 3 章では、分析の理論的基盤として、Langacker (1987、2008) が提示した認知言語学概念である「概念化」および「ドメイン」の枠組みを整理した。感情は単一の意味成分では説明できず、複数の認知的背景が相互に関与するドメインマトリックスとして理解される。また、感情の解釈には、話者がどの立場で状況を捉えるかという視点の違いが影響する点に注目し、Levinson (1996) の視点モデルを導入した。こうした検討を通して、本研究は、複数ドメインと視点枠の双方に基づいて感情語を捉えるための理論的枠組みを整え、後続章での分析に向けた基礎を示した。

第 4 章では、論点①「感情語の意味解釈における文脈の重要性」を検討するため、自由記述・文完成課題・コーパスを用いて *angry* と *giận* を比較した。分析の結果、*angry* は望ましくない出来事の評価にもとづき幅広い対象に向けられるのに対し、*giận* は親しい関係にある相手の言動や期待のずれに反応して身近な相手に限定的に向けられやすいことが明らかになった。また、共起語句にも違いが見られ、*angry* では攻撃・復讐を示す語が、*giận* では心配・関係修復を示す語が多く伴った。すなわち、両語はいずれ

も望ましくない出来事への反応であるものの、その状況をどの関係枠で解釈するかが異なることが示された。

第5章では、論点②「対人関係の捉え方に基づく感情語の使用制約」に着目し、**angry** と **giận** の使用条件を比較した。分析の結果、**angry** は望ましくない出来事の評価を起点とし「自分 vs 相手」という対立枠に沿って自己の利益回復・拒否へ展開しやすいのに対し、**giận** は親密な関係のずれを起点とし「相手により良い状態でいてほしい」という含意を内包するため、怒りの直後に相手のケアや支援へ行動が転じても矛盾が生じない。すなわち、両語はいずれも怒りを表すものの、関係性の捉え方の差が行動意図を分岐させ、**angry** は対立へ、**giận** は関係維持へ向かう点に本質的差異がある。

第6章では、論点③である「関連概念（ドメイン）の中心性に見られる言語間差」に着目し、**love** と **thương** の語用的特徴を比較した。その結果、英語では相手の魅力や価値といった肯定的属性が感情の根拠として提示されやすく、**love** は「好ましさ」を中心とした枠組みとして働く傾向が確認された。一方ベトナム語では、困難に耐える姿勢や背景的負担など相手の弱さに寄り添う特徴が **thương** の根拠として現れやすく、こうした概念構造の違いは使用範囲にも反映されていた。すなわち **love** が主に親しい相手に限定されるのに対し、**thương** は家族や親しい相手に限らず幅広い対象に向けられる点に、両語の概念化の方向性の差異が見られた。

第7章では、論点④である「文化固有の共感観の特徴」に取り組み、**thương** の語源と意味拡張を整理し、日本語の「心が痛む」と比較した。**thương** はもともと「傷」を意味する語に由来し、身体的痛みから心理的痛み、さらに他者の痛みへの共感へと連続的に意味が広がった歴史を持つ。この過程で、相手の痛みを理解し、その負担を和らげたいと願う気持ちが、愛情表現としての **thương** を形づける重要な要素となってきたこうした意味発達は、現代の **thương** が相手の立場を基準に痛ましさを理解する「他者志向的視点共感」を中心に持つこととよく対応する。

続いて、本稿の議論が感情表現の研究に対して持ち得る意義について述べる。

一つ目は、感情語は生理反応のみで説明されるのではなく、関係性や視点選択など複数の側面が重なり合う多面的な構造を持つため、単一モデルでは文化ごとの特性を十分にとらえきれないという点である。感情語は普遍的な生理反応だけで成立するわけではなく、その言語が育まれてきた文化的背景や価値観などの違いを反映して形成される。そのため、英語の **angry** や **love** を基盤にした意味モデルといった、特定の言語

の枠組みを他言語にそのまま当てはめると、各文化固有の感情の捉え方を見落とす危険がある。たとえ怒りに類似した生理的反応が存在しても、その反応にどのような意味が付与され、どのような原因として理解されるのかは文化によって異なるためである。こうした文化的要因が怒りの成立に深く関わるベトナム語 *giận* では、英語の *angry* と同じ性質を共有しているとは言い切れない。したがって、感情語の分析には、多面的な視点が不可欠である。

二つ目は、感情語の意味構造を複数のドメインから捉える枠組みは、文化差に基づく感情理解を比較するうえで有効である。感情を複数のドメインが重なり合うドメインマトリックスとして概念化する立場をとることで、身体反応・対人関係・社会的背景といった諸要素をそれぞれのドメインとして位置づけ、これらが意味形成にどのように関与するのかを一つのモデルに固定されることなく柔軟かつ精緻に記述できる。さらに通言語的比較にも応用でき、各言語がどのドメインを中心に感情を概念化しているのか、また共有ドメインの構造がいかに異なるのかを示すことで、文化差による意味のずれを説明できる。

しかし、本稿では十分に扱いきれなかった点や、今後さらに検討を要する課題も残されている。

第4章および第6章では、自由記述調査、文完成課題、コーパス分析を通して感情語の使用実態を検討したが、いくつかの課題も残されている。今回の調査では、回答者の年代や出身地域といった母語話者の属性が比較的限られており、主に20代の若年層で、出身も南部に偏っていた。そのため、話者属性の偏りによって、*giận* や *thương* の使用に関して拾いきれていない特徴が残っている可能性もある。コーパスによってある程度多様なデータを補ったものの、それでもなお、話者の地域的・世代的多様性を広げることで、これまで見えなかった特徴が明らかになる可能性がある。

第5章では *giận* を中心に、その対人関係的性質や英語 *angry* との相違を明らかにしたが、語形成との関係については十分に扱いきれない点が残されている。*giận* には *tức giận* (詰まる+*giận*) のほか、*giận dữ* (*giận*+強い)、*nóng giận* (熱い+*giận*)、*giận điên* (*giận*+狂う) など、いずれも「強い怒り」を表す複合語が存在し、これらは親密度に関わらず幅広い相手に対して用いることができる。第5章で示した「*giận* は基本的に親しい関係を前提とする」という傾向と比べると、こうした複合語では使用条件が変化する点は興味深い。*tức*「詰まる」や *dữ*「強い」などといった度合いを表す要素

が付加されることで、怒りの意味構造における生理的ドメインが相対的に前面化し、対人関係的な要因が弱まる可能性も考えられるが、本稿ではこの点まで十分に検討するには至っていない。複合語における意味の変化がどのように生じるのかについては、今後の検討課題としたい。

第 6 章では、love と *thuong* の使用を同じ調査方法によって比較し、それぞれの感情がどのような関連概念（ドメイン）を中心に構築されているのかを示し、さらに第 7 章では *thuong* の中心的特徴である「共感」について検討した。しかし、そこで扱ったのは両語の中心的ドメインに限られており、特に *thuong* に関しては、共感以外の中心的でない関連ドメインを十分に掘り下げるまでには至っていない。*thuong* は、弱さへの寄り添いだけでなく、他にも複数の意味成分が重なって成立している可能性があり、本稿で用いた枠組みだけではその全体像を捉えきれていない面も考えられる。そのため、第 6 章で示した差異はあくまでその一部にとどまり、今後さらに関連ドメインを広く検討することで、未だ明らかになっていない違いが見出される可能性も残されている。最後に、本稿で行った考察が、通言語的な視点から感情語を扱う研究の意義を示すうえで、ささやかでも役立つものであれば幸いである。以上をもって本稿の議論を終えることにする。

参考文献一覽

❖ 英語文獻

- Averill, James R.(1985). “The social construction of emotion: With special reference to love.”
In *The Social Construction of the Person*, ed. Kenneth J. Gergen and Keith E. Davis. New
York: Springer-Verlag.
- Barrett, L. F. (2011). Was Darwin wrong about emotional expressions? *Current Directions in
Psychological Science*, 20, 400–406.
- Barrett, L. F. (2013). Psychological construction: A Darwinian approach to the science of
emotion. *Emotion Review*, 5, 379–389.
- Barrett, L. F. (2017). The theory of constructed emotion: An active inference account of
interoception and categorization. *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, 12(1), 1–
23.
- Blumczyński, P. (2013). Turning the tide: A critique of Natural Semantic Metalanguage from a
translation studies perspective. *Translation Studies*, 6(3), 261–276.
- Croft, W., & Cruse, D. A. (2004). *Cognitive Linguistics*. Cambridge University Press.
- Darwin, C. (2009). *The Expression of the Emotions in Man and Animals* (2nd ed., F. Darwin,
Ed.). Cambridge University Press. (Original work published 1872)
- De Leersnyder, J., Boiger, M., & Mesquita, B. (2015). Cultural differences in emotions. In
Emerging Trends in the Social and Behavioral Sciences (pp. 1–15). Wiley.
- Ekman, P., Sorenson, E. R., & Friesen, W. V. (1969). Pan-cultural elements in facial displays of
emotion. *Science*, 164(3875), 86–88.
- Ekman, P. (1992). An argument for basic emotions. *Cognition and Emotion*, 6(3–4), 169–200.
- Ekman, P. (1999). Basic emotions. In T. Dalgleish & M. J. Power (Eds.), *Handbook of Cognition
and Emotion* (pp. 45–60). John Wiley & Sons.
- Ekman, P. (2003). *Emotions Revealed: Recognizing Faces and Feelings to Improve
Communication and Emotional Life*. Times Books.
- Ekman, P., & Cordaro, D. (2011). What is meant by calling emotions basic. *Emotion Review*,
3(4), 364–370.

- Fehr, B., & Russell, J. A. (1991). Concept of love viewed from a prototype perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 425–438.
- Fehr, B. (1994). Prototype-based assessment of laypeople's views of love. *Personal Relationships*, 1(4), 309–331.
- Fillmore, C. J. (1982). Frame semantics. In *Linguistics in the Morning Calm* (pp. 111–137). Hanshin Publishing.
- Foolen, A. (2012). The relevance of emotion for language and linguistics. In A. Foolen, U. Lüdtke, T. P. Racine, & J. Zlatev (Eds.), *Moving Ourselves, Moving Others* (pp. 349–368). John Benjamins.
- Gibbs, R. W., Jr. (2017). *Metaphor Wars: Conceptual Metaphors in Human Life*. Cambridge University Press.
- Goodenough, F. L. (1932). Expression of the emotions in a blind-deaf child. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 27(3), 328–333.
- Harkins, J., & Wierzbicka, A. (Eds.). (2001). *Emotions in Crosslinguistic Perspective*. Mouton de Gruyter.
- Izard, C. E. (1994). Innate and universal facial expressions: Evidence from developmental and cross-cultural research. *Psychological Bulletin*, 115(2), 288–299.
- Jackson, Joshua Conrad, Joseph Watts, Teague R. Henry, Johann-Mattis List, Robert Forkel, Peter J. Mucha, Simon J. Greenhill, Russell D. Gray, and Kristen A. Lindquist. (2019). Emotion semantics show both cultural variation and universal structure. *Science*, 366, 1517–1522.
- King, Brian. (1989). *The conceptual structure of emotional experience in Chinese*. PhD dissertation, Ohio State University.
- Kuno, S., & Kaburaki, E. (1977). Empathy and syntax. *Linguistic Inquiry*, 8(4), 627–672.
- Kövecses, Z. (1991). A linguist's quest for love. *Journal of Social and Personal Relationships*, 8(1), 77–97.
- Kövecses, Z. (2000). *Metaphor and Emotion: Language, Culture, and Body in Human Feeling*. Cambridge University Press.
- Lakoff, G. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.

- Lakoff, G., & Johnson, M. (1980). *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press.
- Lakoff, G., & Kövecses, Z. (1987). The cognitive model of anger inherent in American English. In D. Holland & N. Quinn (Eds.), *Cultural Models in Language and Thought* (pp. 195–221). Cambridge University Press.
- Langacker, R. W. (1986). An introduction to cognitive grammar. *Cognitive Science*, 10(1), 1–40.
- Langacker, R. W. (1987). *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (2008). *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press.
- Levinson, S. C. (1996). Language and space. *Annual Review of Anthropology*, 25, 353–382.
- Levy, R. (1984). Emotion, knowing, and culture. In R. Shweder & R. LeVine (Eds.), *Culture Theory: Essays on Mind, Self, and Emotion* (pp. 214–237). Cambridge University Press.
- Lutz, C. (1982). The domain of emotion words on Ifaluk. *American Ethnologist*, 9(1), 113–128.
- Lutz, C., & White, G. M. (1986). The anthropology of emotions. *Annual Review of Anthropology*, 15, 405–436.
- Lutz, C. A. (1988). *Unnatural Emotions*. University of Chicago Press.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98(2), 224–253.
- Matsuki, K. (1995). Metaphors of anger in Japanese. In J. Taylor & R. E. MacLaury (Eds.), *Language and the Cognitive Construal of the World* (pp. 137–151). Mouton de Gruyter.
- Mesquita, B. (2001). Emotions in collectivist and individualist contexts. *Journal of Personality and Social Psychology*, 80(1), 68–74.
- Omori, A. (2008). Emotion as a huge mass of moving water. *Metaphor and Symbol*, 23(2), 130–146.
- Pavlenko, A. (2014). *The Bilingual Mind and What It Tells Us about Language and Thought*. Cambridge University Press.
- Quinn, N. (2015). A critique of Wierzbicka's theory of cultural scripts: The case of Ifaluk *fago*. *Ethos*, 43(2), 165–186.
- Riemer, N. (2006). Reductive paraphrase and meaning: A critique of Wierzbickian semantics. *Linguistics and Philosophy*, 29, 347–379.

- Rosaldo, M. Z. (1980). *Knowledge and Passion*. Cambridge University Press.
- Russell, J. A. (1991). Culture and the categorization of emotions. *Psychological Bulletin*, 110(3), 426–450.
- Russell, J. A. (1994). Is there universal recognition of emotion from facial expression? *Psychological Bulletin*, 115(1), 102–141.
- Russell, J. A. (2003). Core affect and the psychological construction of emotion. *Psychological Review*, 110(1), 145–172.
- Sabini, J., & Silver, M. (2005). Ekman's basic emotions: Why not love and jealousy? *Cognition and Emotion*, 19(5), 693–712.
- Sato, W., Hyniewska, S., Minemoto, K., & Yoshikawa, S. (2019). Facial expressions of basic emotions in Japanese laypeople. *Frontiers in Psychology*, 10, Article 259.
- Shariff, A. F., & Tracy, J. L. (2011). What are emotion expressions for? *Current Directions in Psychological Science*, 20(6), 395–399.
- Stefanowitsch, A. (2006). Words and their metaphors: A corpus-based approach. In S. Gries & A. Stefanowitsch (Eds.), *Corpora in Cognitive Linguistics* (pp. 63–104). Mouton de Gruyter.
- Sundararajan, L. (2015). *Understanding emotion in Chinese culture: Thinking through psychology*. Springer.
- Wierzbicka, A. (1986). Human emotions: Universal or culture-specific? *American Anthropologist*, 88(3), 584–594.
- Wierzbicka, A. (1992a). *Defining emotion concepts*. *Cognitive Science*, 16(4), 539–581.
- Wierzbicka, A. (1992b). *Semantics, Culture, and Cognition*. Oxford University Press.
- Wierzbicka, A. (1997). *Understanding Cultures through Their Key Words*. Oxford University Press.
- Wierzbicka, A. (1998). “Sadness” and “anger” in Russian: The non-universality of the so-called “basic human emotions.” In A. Athanasiadou & E. Tabakowska (Eds.), *Speaking of Emotions*. De Gruyter.
- Wierzbicka, A. (1999). *Emotions across Languages and Cultures*. Cambridge University Press.
- Ye, Z. (2006). Why are there two “joy-like” “basic” emotions in Chinese? In P. Santangelo (Ed.), *Love, Hatred, and Other Passions* (Vol. 1, pp. 59–80). Brill.

- Yu, N. (1995). Metaphorical expressions of anger and happiness in English and Chinese. *Metaphor and Symbolic Activity*, 10(2), 59–92.
- 石井 公成 (1998) 「ベトナム語の字喃 (chữ nôm) と梵語音写用の漢字」『駒沢短期大学研究紀要』通号 26, 41–48.
- 大石 亨 (2008) 「感情のメタファーの日英差をもたらす要因についての考察」『日本認知言語学会論文集』第 8 卷, 274–284.
- 大森文子 (2015) 「認知詩学とスキーマ」、『レトリックと英語の語彙 (言語文化共同研究プロジェクト 2014)』、15–22.
- 碓井 智子・田村 幸誠・安原 和也 (2021) 『認知日本語学講座 1 認知言語学の基礎』くろしお出版.
- Doan Ngoc Minh Tran (2023) 「フレーム意味論と直接スコープから見たベトナム語、日本語および英語の感情概念：ベトナム語の *giận*、日本語の「怒り」、英語の *anger* を比較して」『言語文化共同研究プロジェクト 2022/ レトリックと文法』、大阪大学人文学研究科. 91- 104.
- Doan Ngoc Minh Tran (2024) 「「怒り」を表す感情概念に関するフレーム意味論的考察：コーパス調査に基づくアメリカ英語の *angry* とベトナム語の *giận* を比較して」『言語文化共同研究プロジェクト 2023/ こちら側とあちら側のレトリック：メタファー・翻訳・認知』、大阪大学人文学研究科. 91- 104.
- ドアンゴクミントラン (2025) 「文化依存的コンテキストと普遍的身体性の相互作用 — ベトナム語の感情概念 GIẬN の分析を例に一」日本認知言語学会、『日本認知言語学会論文集』第 25 卷、203-213.
- Ngo Quang Vinh (2014) 『現代ベトナム語の類別詞研究：類別詞の本質とその意味・用法』一橋大学博士論文.

【辞書】

- Đào Duy Anh (2005) . *Hán Việt Từ Điển Giản Yếu* (『漢越辞典簡要』) [原著 1931 年刊] . ハノイ：文化情報出版社.
- Harper, D. (n.d.). Etymology of compassion. Online Etymology Dictionary. Retrieved November 22, 2025, from <https://www.etymonline.com/word/compassion>
- Hội Khai Trí Tiến Đức (1954) . *Việt Nam Tự Điển* (『越南辞典』) . ヴァンムオイ出版社.

Huỳnh-Tĩnh Paulus Của (1895) . *Đại Nam Quốc Âm Tự Vị* (『大南國音字彙』) . Saigon : Imprimerie Rey, Curiol & Cie.

Oxford University Press.(n.d.). Love, n.¹. In *Oxford English dictionary*. Retrieved November 22, 2025, from https://www.oed.com/dictionary/love_n1?tab=meaning_and_use#38904196

出版社. Retrieved November 22, 2025, from https://www.nomfoundation.org/nom-tools/Tu-Dien-Chu-Nom-Dan_Giai/Tu-Dien-Chu-Nom-Dan_Giai?uiLang=vn

Thiều Chửu (1942) . *Hán Việt Từ Điển* (『漢越辞典』) . ホーチミン市出版社.

Trần Trọng Dương (2014) 『阮廌國音辭典 (Nguyễn Trãi Quốc Âm Từ Điển : A Dictionary of 15th Century Ancient Vietnamese)』. ハノイ : 百科事典出版社.

Trần Văn Kiệm (2004). *Giúp đọc Nôm và Hán Việt* (『喃字と漢越語を読むために』) . ダナン : ダナン出版社.

Viện Ngôn Ngữ Học (ベトナム言語学研究所) (主編 : Hoàng Phê) (2021) . *Từ Điển Tiếng Việt* (『ベトナム語辞典』) [初版 : 1988 年] . ハノイ : ホン・ドゥック出版社.

Viện ngôn ngữ học [(Vietnam) Institute of Linguistics] (1993) “angry,” *Từ Điển Anh - Việt* [English - Vietnamese Dictionary], 51, Ho Chi Minh City General Publishing House.

Viện ngôn ngữ học [(Vietnam) Institute of Linguistics] (2001) “thương,” *Từ Điển Việt - Anh* [Vietnamese - English Dictionary], 51, Ho Chi Minh City General Publishing House.

Viện Nghiên cứu Hán Nôm (漢喃研究院) (主編 : Nguyễn Quang Hồng) (2006) . *Nôm Characters with Quotations and Annotations* (『引用例付き字喃辞典』) . ハノイ : 教育出版社.

❖ コーパス

Davies, Mark. (2008-) *The Corpus of Contemporary American English (COCA)* . Available online at <https://www.english-corpora.org/coca/>.

Vietnam Lexicography Centre (1998-) *Vietnamese Corpus of VIETLEX (VIETLEX)*) . Available online at <http://www.vietlex.com/kho-ngu-lieu>.

ngonngu.net (2021) 『Dự án S : ベトナム語コーパスおよびテキスト処理ツール (オンライン新聞記事を中心とする 2000 年以降の大規模データ)』

Available online at <https://s.ngonngu.net/>

❖ 引用サイト

[https : //vietnamnet.vn/nguoi-viet-doan-ket-trong-nha-ghet-nhau-ngoai-ngo-279206.html](https://vietnamnet.vn/nguoi-viet-doan-ket-trong-nha-ghet-nhau-ngoai-ngo-279206.html)

[https : //znews.vn/nhung-cau-chuyen-bao-chi-khien-sao-viet-an-tuong-am-anh-post1098223.html](https://znews.vn/nhung-cau-chuyen-bao-chi-khien-sao-viet-an-tuong-am-anh-post1098223.html)

(最終閲覧 2025 年 11 月 22 日)